
藤の花の匂う頃

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤の花の匂う頃

【Nコード】

N6635Y

【作者名】

yuki

【あらすじ】

親が金持だが身分の低い花房は、中納言家の姫の婚礼のための新たな女房候補として、京の都に上京するが、この結婚は先の帝に狙われていた。それを知った中納言は花房に姫の身代わりとなる事を要求。花房はそれを引き受ける。その献身的な行動に姫の結婚相手、大将に妻の座を提示されるが花房は返事を出来ずにいた。琴が得意な少女の平安サクセスストーリー。（歴史、文化に明るい訳ではないので、内容はあくまでイメージです）

上京

康行はしつこく食い下がっていた。私はうんざり声でさえぎった。

「いらぬ物は、いらぬの。何よ、そんな安物」

康行は真つ赤になって言い返した。

「安物なんかじゃないぜ」

「嘘おつしゃい。侍で飼われ者のあんたが、たいしていい物を買える訳が無いじゃないの。あんたなんかにもらわなくても、私はお父様から素晴らしい螺鈿細工や、彫刻の櫛をたくさんいただいたているの。田舎長者の娘と侮らないでほしいわ」

まあ、この物のいい方こそが、劣等感の表れなのは分かっているけど、康行があんまりしつこいので、つい、言ってしまう。

「今度の若君のご結婚は特別な事だからと、うちの殿様がお手当を大層弾んで下さったんだ。それを田舎にも送らずにお前のために買った櫛なんだ。若君だつてこれは良い物だとおっしゃって下さった。受け取つて、損は無いはずだ」

そう言つて康行は尊大な顔つきをする。

ふん。しゃらくさい。

確かにあなたのご主人のお父様は、今、京の都を牛耳る大納言様でしょうけど、私の姫様のお父上だつて中納言でいらっしやる。ご主人様の格を言うなら殆んど同格よ。

私は康行を見下した。たとえではなく、本当に縁の上から見下ろしている。なぜなら私はこの、中納言家の一の姫様の女房、と言っても小間使いに近い立場だけれど……であって、康行は武蔵の国から雇われてきた、下男同様の立場、侍だからだ。私はこの屋敷にいる以上、主人の許可も用事もないのに、人前ではしたなく屋根の外へ出る事は出来ないし、康行は大納言家に飼われている立場なので、貴人や女人の上がる建物のうちへは入れない。

しかも、ここは中納言家のお屋敷だ。元の身分は康行と私は同じでも、ここでは私が何かと有利。だから私も強気で受け答えをしているのだ。

「京で男が最初に贈るのは、モノじゃ無くて和歌よ、わ、か。それに私だって国に帰れば武蔵で名をさせた長者の娘。あんなんかに贈られたものを持っていたりしたら、いい赤っ恥だわ」

「たしかにお前の名前は有名だよな。じゃじゃ馬の花房さんよ」

「なんですって?」

私が康行にかみつこうとしていると、女房仲間で姫様の乳母の娘、乳姉妹の「やすらぎ」に声をかけられる。

「花房、こんなところにいたの? さっきっから探していたのに。早くしないと姫様に怒られるわ」

「いめん。すぐ行く」

実はこれはやすらぎの助け船。私が苦手の康行に引っ掛っている

のを見かねて声をかけてくれたのだろう。姫様の元に参上するのが遅れているのも事実だけど、姫様が私達をあからさまに叱ったり、たしなめたりするのを私は見た事が無い。

それでも康行は美しい漆絵の櫛を縁の上に置いて侍所へと帰って行った。私も結局そのままにはしておけず、その櫛を手にとってみる。

確かにそれはみごとな漆絵の、櫛目の細やかなものだった。上質なものだと一目で分かる。

私の父は身分が低いながらも、金の力を借りて、私にありったけのモノを買い与えていた。だからモノの良し悪しくらいは分かるのだ。

あーあ。無理しちゃって。

でも、本当のところは、私こそかなり無理をし続けている。康行は苦手だし、武蔵の国の侍は乱暴者で有名だから、相手にするつもりはないのだけれど。それに、なんのために作法見習いに、ここに勤めたのか分からなくなってしまうのだけれど。物持ちの父に育てられたとはいえ、所詮田舎者。きらびやかな、京の邸暮らしは何かと気骨が折れる。同郷の康行とちよつとした言い争いをするのは、実はよい気晴らしになってはいるのだ。

本来なら、こんな立派な方々にお仕え出来る身分ではない私が、下働きの下女ではなく、女房として一の姫様にお仕え出来るのは、父の金の力もあるのだけれど、私が何故か姫様に気に入られたのが

一番の理由だ。

姫様は私の一つ下の十五におなりになる、愛らしい顔立ちの方で、一時は帝の女御様候補にも挙がられた。

だが今は中納言様の政治的お立場が難しい時で、やむなく御入内はあきらめられたのだとか。

実際、帝には何人かの女御、更衣様方が寵を競っていらして、すでに后宮に男御子も儲けられているので、その後を追ったとしても、姫様が幸せになられたかどうかは難しいところ。中納言家にとって政治的なうまみもあまりなかった。

しかも、早々とその男御子様か赤子の身で東宮になられたので、これはむしろ、早く一の姫に女の子を産んでいただいて、お年頃になられたら東宮の元に入内させる方が、時も稼げて一石二鳥、と、中納言様は考えられたらしい。

そこで、今やこの京の都で最も権力を誇っている大納言様のご長男と、姫様の縁組が組まれる事になった。

そこそこの家柄の姫君や若様なら、評判を聞いて、和歌や手紙のやり取りをして（それでも互いの顔を見る事は出来ないのだけれど）几帳をはさんで会話をしたりして、気が合えばご結婚の運びとなるのだけれど、ここまで上流の、一度は帝の元へ嫁ごうかとされた方にまでなると、気が合うも合わないもなく、家柄と政治力と、親の相性がモノを言うので、お話が来た時点でご結婚が決まったも同然。

さっそく新しい女房や、下女を増やそうと、中納言様が当てを探していた所に、私の父が、今は亡き私の母の妹につてを頼って私を

推薦させたのだ。

父は今では地元の女性と再婚して、長者としての地位を築いているが、昔は私の母の元に通い、そこで私が生まれたらしい。母は下流貴族の家の人だったらしく、父が財を築く元手になったのは、母の家の人間関係による援助があった事も大きかった。母は私を生んですぐに亡くなったが、普通、女の子は母方の実家で育てられるのが常なのに、父は私を自分の郷里の武蔵の国へ連れていき、そこで私を育ててくれた。

郷里で成功を治めた父は私に都の様々な情報を与えてくれた。

読み物、詩集、きらびやかな衣装、流行の和歌、美しい細工もの。私は自然と都に憧れをもった。

いつの日か、京の都で暮らしてみたい。

私は父に甘やかされて育ったせいかな、地元で評判のお転婆と言われるようになっていた。父と再婚した義母はその事に胸を痛めていて、

「いつそ花房さんをどこかのお邸にお勤めに出したらどうでしょう？」と、言いました。

義母にしてみれば、地元の国守の邸に行儀見習いに出すつもりだったのだからけれど（そう言う事は良くあることなのだけれど）幸い、私には母と仲の良かったという、母の妹である、伯母とのつながりがあった。都で暮らす絶好の機会である。

私は父に頼みこみ、叔母にきちんと連絡を取り続ける事を条件に、普通では無理であろう権門の家の女房候補として上京したのだった。

叔母の家で支度を整え、他の人たちと中納言様の正妻でおられる北の方、つまり、姫様のお母上様と、姫様にお目にかかる時、誰もがかしこまって顔も上げられずにいる中で、私はどうしても好奇心に勝てずに、顔を少し上げてお二人の顔を見ようとした。

そこを姫様の乳母、やすらぎの母親に見とがめられて、失礼だと叱られたのだが、つい、田舎にいた時の勢いで、

「私は身分がいやしいですから、ここで追い返されるやもしれません。だったら都のお姫様のお顔を、一度くらい拝見しておきたいんです」と、言い返してしまった。

皆が息をのむ中で、一の姫様がコロコロとお笑いになられた。そこで私と姫様は初めて目があったのだが、その一瞬で姫様は私を気に入られたらしい。問答無用で私を姫様付きのおそばの女房に決めてしまわれた。

姫様の周りには、沢山の女房が仕えている。乳母や大人の実務を取り仕切っている女性達と、どちらかと言えば姫様のお話相手を要求される若い少女達。その中でも最も姫様に近いのは、乳母の娘の、姫様と乳姉妹である「やすらぎ」だ。姉妹同然に育っているので、彼女が姫様の事を一番よく知っている。姫様のこれまでのいきさつを教えてくれたのもやすらぎだ。

本来なら、身分いやしく、知識も才も、優れているとは言い難い

私なのに、やすらぎは

「姫様がお気に召したのなら、あなたは絶対いい人よ。都育ちではないけれど、決して頭の悪い人ではないわ。それに堂々と、のびのびとしたところがある。姫様はそういう方が好きなの。きっと私達も気が合うわ」

と、言って私を受け入れてくれた。

姫様と同じ年なのだから私よりも一つ下なのだが、とてもしっかりした人なのだ。

田舎者の私がそんな風に出世したのだから、当然周りにはねたむ者もいた。じゃじゃ馬でならした私はそんな事歯牙にもかけないつもりでいたが、風当たりが強くてはいい気持ちはしない。ところがそこをやすらぎが救ってくれた。

「せっかく新しい方々がいらっしやるのですから、今夜はにぎやかに過ごしたらいかがでしょう？」

やすらぎが姫様に提案した。

「それはいいわね。やすらぎの琴も聞きたいわ」

姫様も賛成して琴が用意されるが、やすらぎは琴を二つ用意した。

「花房さん。あなたも少しお引きになってはいかが？ 合奏も華やかでいい物だから」

そう言って私の前に琴を押ししてくる。

私は驚いた。琴は得意中の得意だ。父が都から来た人を呼んで、私に習わせてくれていたのだ。和歌の応酬や、都人の礼義には弱い私でも、琴なら負けずに弾きこなせる。

私がやすらぎとの合奏を終える頃には、周りの見る目が変わっていた。私はあとでやすらぎに尋ねた。

「どうして私を合奏に誘ってくれたの？」

「手を見たのよ。あなたの手には琴を弾く時のタコが出来ていたのよ。よっぽどたくさん練習されたのね。これなら絶対に素晴らしい音を聞かせてもらえると思ったの」

そう答えて、姫様と視線を合わせてにっこりと笑った。どうやら姫様とは何でもピン！とくる仲で、姫様も承知していたらしい。

権門の家のお姫様ともなると、こんな召使の人間関係にまで心配りが出来るのか。私は感心してしまった。

後に、これはこの二人の独特の特性で、どこのお屋敷に上がっても同じとは限らないと知っただけだ。

だから本当のところ、私も和歌や、詩を吟ずるのは苦手で、康行に言った言葉はまるで当て外れなのだけれど、同じ田舎者の私としてはこの方法が康行を手っ取り早く遣り込める事が出来るので、つい、「歌の一つも詠めない」と言ってしまうのだ。

それに父が私を都に出したのは、当然、都人とのつながりを意識している。

私が都の身分が上の男とつながりを持てば、それが一番だし、そうでなくても私を経由して都人たちとの人間関係を父は持つことが出来るだろう。万が一にも、貴人のお手つきにでもなれば万々歳

だ。さすがにそれは無いだろうけど。

だから、同郷で、身分が同じで、経済的には私よりも低いはずの康行なんか私がかかわったとなれば、父はがっかりするはずだ。だから私は康行には辛辣になるのだ。

警護

中納言家では婚礼の仕度が着々と進められている。今後は大納言家の若君が、毎夜通われる事になるので、屋敷の中を増築し、そこを御新婚のご夫婦の寢所にする予定である。

若君は去年の春の除目で、少将から中将に御出世されたばかりだが、あの大納言のご長男、宮廷内での評判もいいとのことなので、今年の春には早くも大將になられた。つまりは出世街道まっしぐら勢いのついた若い上達部、貴公子という訳だ。

そういう婿君を通わせるのはその家にとっても大変な名誉で、人々の関心も集まるし、家族、親せき一同の出世や立場にも大いにかかわる。そのため婿君へのもてなしは、それはそれは心も贅も尽くしきられたものでなければならぬ。屋敷の中はてんでこ舞いだ。

大工や職人の出入りも激しく、庭先を見知らぬ人の姿が通り過ぎたりしている。今の姫様の部屋の方や、中納言様の北の方の寢所は静かなたたずまいを保っているが、ちょっと用があつて渡廊と呼ばれる、館と館をつなぐ橋状の専用通路を渡っていくと、沢山の人がいてびっくりしたりする。

これは遠い唐土の国や、もっと遠くにある国でも同じだそうだが、貴族の方々は御家族とはいえ同じ屋根の下で暮らすという事が無いらしい。大きな邸の敷地の中に、それぞれの館があり、それぞれに人が雇われ、設備を整えて暮らしている。

私は物持ちの父が贅をこらした邸に暮らしてはいたが、父や義母

と部屋は違えども同じ屋根の下で暮らしていた。

家が違つのは、下男や下女の者たちで、あとは父が通つ先の女人達ぐらいだろうか？

「同じ屋根の下で、家族で毎日ともに食事が出来る。これは貴人には無い楽しさだ」と、父は言っていた。

初めのうちは、姫様のご家族が、まず歌や手紙で御訪問の旨を伝えてきて、お返事の歌を送り、先駆けの者が来訪を伝えてから、ご本人が渡廊を渡ってお出ましになるのを私は物珍しげに見いつてしまった。

物語や本で知識としては知ってはいたが、その段取りや所作を見たのは初めてで、私も憶える必要があつた。

私のお仕える姫君様はまだ御母上である北の方様のお部屋の近くに住んでいられるけれども、増築先が整えば、そちらに移つていただく手筈になっている。だから私達も引越しの仕度に大わらわだ。

婿君とそこご家来のご衣裳の仕度を整えるのもこちらの役目、日が傾いてくると、油に火をともして縫い物に追われる。お針子の下女もいるにはいるが、それでも間に合わないのだ。

そんな忙しい中、私は姫君様の庭先に数人の侍がいる事に気がついていた。その中に康行もいる。

「なんで大納言家の侍達がここにいるの？」

私は康行に尋ねた。

「のんきな奴だな。こんな大きな邸にこれだけ大勢の人間が出入りしているんだ。いつ、何が起こるか分からないじゃないか。中納言家の侍だけじゃ足りないだろうと、俺達も大納言様に言われて助っ人に来ているのさ。お前なんかは知らないだろうが都つてのは物騒な所なんだ。盗人に強盗、人さらいに人買い。特に女子供は狙われやすいんだ。たとえ権門の家の女房でもな」

「まさか。あんた私を怖がらせようって思ってるんでしょ？」

私は秘かに、康行は長者の娘である私を出世のために狙っているんじゃないかと疑っている。郷里に帰れば田畑を耕して暮らしているであろう彼が、私に対して少々なれなれしいのが引掛つているのだ。

「本当にお前さんは世間知らずだな。いいか、都じゃ女はいい金になるんだ。まず、その着物だ、上質の絹の袷から、肌触りのいい綿の下着まで、幾重にも重ねたその着物だけで、貧乏人は自分、面白おかしく暮らせるんだ。それに髪の毛だ。その長い髪はいい、かもじ（つけ毛）の材料になる。髪は女の命だから、買い手は引く手あまただ。そして本人は淀の遊び女の元締めに売られて、春を売ることになるんだろう。その時も出自が良ければいいほど金になるのさ。姫君だつて今時は危ないんだ。へたすりゃかえって狙われる」

そう言えば、女房達の間でも噂になった話がある。さる権門の家の姫君が、家人に裏切られて夜中にさらわれ、そのまま行方知れずになつているが、東の国よりも北の地の遊び女に、姫君にそっくりな女がいたんだとか。

「特に、ここ最近は物騒な事になっている。まして今度のご婚礼は世間の注目の的。何かあつたら、大納言様も中納言様も面目は丸つぶれだ。他にも男の社会には色々あるらしいが、俺もそこは噂しか知らない。何にしても俺達はお前さんの姫君をしつかり守らなければならぬんだ」

そういわれると邸の中のにぎわいも、何か落ち着きのない騒々しい物に聞こえてくる。

「嫌だわ。せつかくのお祝い事なのに」

「そう思うのなら、お前さんも姫君から離れないでいてほしいもんだ。それにあんまり動き回らない方がお前さんのためにもなるだろう」

「どつという意味？」

何か遠回りな言い方だ。

「どついう時、新参者は疑われる。ましてあんたは出自がいい方じゃない。金をつかまされて何かしでかすんじゃないかと、疑っている人間もいる筈だ」

「私がそんなことする訳ないじゃないの！」

思わず声を荒げてしまう。

「そういう見方をする人間も多いんだよ、都には。実際そういう事が起こっているんだからな。誰もが用心深くなっているのさ」

そこまで行くと、用心深いというよりも、疑心暗鬼という言葉の

方がしつくりくる。しつかりした紹介があつて、身元を調べつくした召使まで、信用できない世界なのか。

物語で姫君がさらわれると言えば、悲恋の恋人が姫を拉致するか、人妻に恋する間男が、思いあまつて夫人を連れ去るとか。そう言つた美しい世界は、現実にはあり得ない物らしい。

「まさかとは思つけど、あんた達は大丈夫なんでしょうね？」
そう聞いて白状する悪党はいないのだが

「そうそう、そのくらい用心深い方がいい。お前さんは姫君から離れるな。なんだかんだ言つたつて、姫君のいらつしやる所が一番安全だ」

真剣に話していたかと思うと、からかいのそぶりが見える。どこまで気を許せるのか分からない。

「分かつたわ。でも、あまり姫様の近くに姿を見せないでね。ご結婚前の落ち着かない時なんだから、少しでもくつろがれる時間を持つていただきたいの」

本当にそう思っていた。例の琴の一件から、私は姫様への肩入れする気持ちが強くなっていた。

「そこは俺達も若君に言い含められているよ。うちの若君もなかなか面白い人なんでね」

そう言つて康行は仲間の元へ戻ろうとしたが、思い出したように振りかえると

「あの櫛は気に入ったか？」と、聞いてきた。

「何のこと？」

私はとぼけた。

「……まあ、いいか」

そう言つて今度こそ康行は背を向けて歩いて行つた。

それにしても、康行という男はどういう男なのだろう？ 私はちよつと気になつた。

たかが侍。若君付きの従者と言う訳でもないのに、従者や使いの方が来る時にはいつも康行が警護についている。大納言家ともなれば、飼っている侍の数は相当なものだろう。その中でも高貴な方々に近い所にいつもいるような気がする。下男と変わらぬ立場にありながら、それほど信頼されているのだろうか？

その日の夕方に私は姫様にお声をかけられた。

「私の三日夜の宴の席で、あなたも琴を弾いてもらいたいの」

私は仰天した。そんな大切な席の演奏を新参者の私が勤めたりしてよいのだろうか？

ご結婚は三日の時間が必要だ。まずは初夜。婿君が姫君のお部屋を訪れて、お二人が初めて顔を合わせる晩だ。そして翌日も婿君はお部屋に通われて、いわば相性を確かめる。

そして三日目の夜に婿君のお披露目として盛大な宴が催されるの

だ。その後お二人で正式なご結婚をされたあかしとして、三日夜餅と呼ばれる姫君側で用意したおもちを召しあがっていただく。

この時三日間男君が通わなければ結婚は成立せず、女君は愛人という事になってしまふ。だから形式的とはいえ、三日目の夜の宴はとても重要なものなのだ。

この日の客人達は両家の親族は勿論、中納言家の面子をかけたそうそうたる顔触れになることだろう。演奏に携わる方々も、当代一流の演奏家たちが集められるはず。その中で私に琴を弾けと？

「そんなに緊張しないで頂戴。もちろんやすらぎにも弾かせるわ。この間の合奏のような演奏で私の婚礼を是非、飾って欲しいのよ。あなた達の演奏はどんな名演奏よりも私には価値があるの」

そう、言っていただけるのは本当にありがたい、とても名誉なことではあるけれども、じゃじゃ馬の私も、これには緊張する。あまりの事に背筋にひんやりと汗をかいてしまふ。

どのような演奏家がいらっしやるのかとうかがうと、宮中で大切な儀式の時に帝の前で演奏なさっている有名な方の名前がポンポン出て来る。聞かなきゃよかった。

「私はあなた達が心をこめて演奏してくれれば満足よ。でも、急こんなことを言われても緊張するなという方が無理でしょう。あなたはまだ、この邸にも慣れていないとは言えないのだし。練習する時間をあげましょう。花房はしばらく縫い物はしなくていいわ。夜の参上も控えてよろしい。心が落ち着くまで練習に励みなさい」

励みなさい、と、言われても。

しかしここまで言われると断ることもできない。私ひとりならともかく、やすらぎも弾くというのだから逃げ場が無い。

仕方なく、私はしばらくの間、琴の練習に明け暮れて過ごすことにした。

このことを叔母を通じて父に知らせると、父は家の誉れと大喜びで、新しい琴と弦を用意してくれた。使い慣れない物では心もとないのだが、せつかくの心づかいなので、練習で慣れる事にする。

衣装も抜かりなく用意できそうだ。康行ではないが、女房は正装にお金がかかる。格の高い方々は、上質で軽く、暖かい品の良い衣装に身を包むが、私達は失礼のないように、十二の衣を身にまとう。質はともかく、きちんとした光沢のある絹を色とりどりに染め上げて、宴の花としての振る舞いが求められる。見ようによってはひと財産を抱えているような物なのだろう。

演奏するには邪魔なのが本音だが。

上達部（かんだちめ）

それから私は、毎晩琴の練習に励んだ。もしも失敗しようものなら、自分の恥は勿論、家族や、この中納言家の人々にまで恥をかかせてしまいかねない。

私は父親が下司（庶民）の娘という事で、陰ではいろいろ言われているはず。そんな私が公の大切な席で失敗などしようものなら、中納言家に泥を塗るようなものだろう。

皆が忙しげにしている中での練習なので、私は遠慮をして、局と呼ばれる私達女房の宿泊場所の前にある縁に出て、一心不乱に琴を弾き続けていた。康行の話を聞いてしまった後なので、少し不安ではあったが落ち着いて弾ける場所が思いつかなかったのだから仕方がない。だから人の気配には全く気付かずに行った。

ふと、品のいい匂いがした。焚き締められた香のにおいだ。

女物の香ではない。中納言様の香でも、その従者の匂いでもない。だが明らかに上質な、貴人が使うであろう香りがする。しかしここは姫君の部屋の近く。いくら寝所からは遠いとはいえ、男性の貴人が案内も乞わずに入ってきてよい場所ではないはずだ。私は一気に緊張した。

こういうことは全くない訳ではない。姫君の元に男君が通う時は、従者や女房、あるいは従者の知り人の上達部にとっても、逢引の機会になっている。昼間、手紙で連絡を取り合って、夜、人気のない場所でこっそり逢瀬を重ねるのは、恋人同士にとっては常識だ。だが、この香はあまりに上品すぎる。それに女人の気配も感じないのだ。

「良い、音ですね。もうしばらくお聞かせいただきたかったな」

そう言つて、暗闇の中から一人の上達部が現れた。すつきりとした顔立ちの、十七、八の青年だ。私は慌てて扇を広げて顔を隠した。いや、隠そうとした。

女が貴人に顔を見せるのははしたないこと。不用意に縁に出たりせず、御簾の中から顔を出さず、いざという時は扇を開いて顔を隠すのがたしなみ。そんな事わかつちやいるけど、不慣れなしぐさに私はうろたえ、うっかり扇を落としてしまう。上達部はクツクと笑いながら私に扇を拾ってくれた。

私はあらためて扇を広げ直し、すでにバツチりみられてしまったであろう顔を隠し直した。顔を見せるということは、裸を見せてもかまいませんと、宣言したと同じこと。大失態だ。自分が一気に安っぽくなつた気がする。

「どなたかとお約束があるのでしょうか？ あいにくこちらには誰もいませんけど」

精いっぱい気取つた声を出す。とにかく落ち着かなくては

「約束事があった訳ではないのですよ。従者や下男、侍達の取り繕わぬ姿を垣間見ようかと思ひましてね。するとこちらから美しい琴の音が聞こえたもので」

「琴は音を楽しむもので、演奏者の姿をご覧になるものではありませんね」

私はわざと相手を非礼だとたしなめた。私の方の失態ではあるけれど、こっちは女。こういう時に身分がどうのと言っていたら、舐められてしまいそうだ。

すると上達部はプーっと吹き出してしまった。そしてとうとう本格的に笑い出す。

「武蔵の国のじゃじゃ馬姫から、そのような言葉が聞けるとは思いませんでした」

「私を御存じなのですか？」

私はビツクリした。実は都に来てから若い公達（公家の若者）をこんなに間近に見たのは初めてのことなのだ。何故私を知っているのだろうか？

「侍所の康行から聞きました。武蔵のじゃじゃ馬姫は琴の名手で、今は局で毎晩琴を弾いていると」

また康行！ なぜ、身分の低いあいつが、この方とそんな話をしているのよ！

「ああ、気になさらないでください。康行は私にとって特別なのですよ」

「特別？」

「私は馬が大好きでね。特に流鏑馬の馬にはことさら凝っているの

ですよ。康行は良い馬を育てる名人なんです。彼はもう、何度も都に来ていて、そのたびに良い馬を用意してくれる。ただの侍として飼うにはもったいない男です。身分から従者にする訳にはいかないが、大納言家でも、彼のことは一目置いて、信頼しているのです。初めて大納言家に来た時も、私の可愛がっていた馬が生きるか死ぬかの瀬戸際で、康行の適切な治療と、懸命の介護のおかげで命拾いをしたんです。それにお互いに馬好きですから私は彼と気が合うんですよ」

「康行と気が合うんですか？」

立派な公達が、康行なんかと気が合うのか。荒々しげな武蔵の侍と。

「あなたは誤解している。康行の刀の腕は決して悪くはないが、あれはそんなに荒ぶった男ではありませんよ。一頭の馬のために身を尽くして世話の出来る優しい男です。白状すると、そんな康行が気に入りの武蔵のじゃじゃ馬姫とはどんな女人なのか、確かめてみたくてこっそり垣間見に来てみたのです」

最初から私が目的だったってどういうの？ いかにも貴公子と言った風情の方が、なんとまあ。

「あなたは大納言家の方なのですか？」
私は聞かすにはいられなかった。

「ゆかりのものですよ。こちらの姫君はもうすぐ大将とご結婚されますね。姫君はどのようなお方ですか？」

「美しい、というよりは愛らしいお姫様です。御心も優しくして決

して声を荒げたりなどなさらぬ、私のような、取るに足りない者にまでとてもよくして下さいませ」

「あなたが姫君のお気に入りだということは聞いていますよ。あなたを見れば姫君の人柄も分かるようだ。武蔵の国には素朴でよい人柄の人間が多いのでしようね。よい国なのでしよう」

私は気を良くした。郷里を褒められて悪い気はしないものだ。

「大将も、康行がお気に入りですよ。あなたの姫君とも相性が良いことでしょう。この縁組はきつと良い縁組になる。社会的な事だけではなく、姫君のお幸せのためにもね」

そう言つて上達部は立ち去ろうとする。

「あの、あなたは……」

「私がここに来たのは誰にも内緒ですよ。私のことならすぐに分かるでしょう。では、宴の琴の音を楽しみにしています」

そして上達部は去つて行つてしまわれた。私は呆然とするばかりだった。

「内緒ですよ」とは言われたが、私はこの一件を内緒にしておくつもりはなかった。あまりにも危険すぎる。

私が世間知らずでも、深窓の姫君のお部屋近くに、高貴な身分に見えたといえ若い男がうろつろつていていいはずがないことくらいは分かっている。

昨日の様子や話しぶりから見ると、暇を持て余した大将様のお知り合いの方が、康行から何かしら私の話を面白おかしく聞かされていたずら心を起こして私をからかいに来られたのだろう。

ただ、ここはご婚礼前の姫君の住まうところ。しかもいつも以上に厳重な警備が敷かれている中での出来事である。どうやって忍んでこられたのかは分からないが、放っておくわけにもいかない。

それに若君の事を「大将」と、軽く呼んでいらした。少なくとも従者や、乳兄弟ではない。もっと上の方だ。

身分の高い方は、実の親子でさえも簡単に訪ね歩くことはない。同じ邸のうちでさえ手紙のやり取りをする。

昨日の公達はこう言っちゃなんだけど、ちょっと軽々しい方なんじゃないかしら？

そういう方が何か間違いでも起こせば、大変な事にもなりかねない。でも、いきなり姫君に言うのもちょっとなあ。

康行の事に随分詳しくそうだったし、ひよっとすると康行があの人達にそそのかされて庭先に通したのかもしれない。

私に気をつけるように言っておきながら、油断も隙もありやしな

い。
「そんな事があったの？　なんだか信じられないわ」

私と局で同室になっっている桜子は、目を丸くしてひっそりと声を立てた。

「私は康行が手引きしたんじゃないかと思っっているんだけど」

「そうかもしれないわね。警備にあたっている本人でもない、今の邸の守りをかいくぐるのは難しそうだわ。ねえ、これはそれとなく姫君様に伝えておいた方がいいわよ」

桜子は珍しく人のいい顔を曇らせていう。

桜子は私と女房仲間で二つ年上。越後の国の受領（国司）の娘で、越後育ちだ。とても色が白い。

私に来る前は彼女も田舎受領の娘という事で、肩身の狭い思いをしていたらしいが、人のよい、おとなしい人柄の優しい娘だ。同室になってみると、意外に明るいところもある人だと分かった。肩の凝らない人なのだ。

彼女は私に同情的で、自分と似たような立場の私をかばいたくなるようだ。最も私の身分では本来彼女の下に召し使われてもおかしくないのだけれど。

「でも、警護の侍が手引きしたかもしれないなんて、姫様を怖がらせるだけなんじゃないかしら？」

私はためらう。

「康行の事を心配しているのね？　そこまではつきり言う必要はないわ。約束した女房の誰かと落ち合えなかつたらしい公達が、庭先をさまよっていたとでもいい繕っておけばいいのよ」

桜子は「どういうことにも物慣れていて、すぐに知恵を授けてくれる。ちよっとだけ康行が心配でもあった私は、その知恵に乗って姫様にご報告した。」

その日の昼間、その康行が私に声をかけて来た。

「お前、昨夜、上達部と話をしたんだって？」
はつきりとご機嫌斜めな顔が浮かぶ。

「私だって姫様付きの女房だもの。そういうことだってあるわ」
私はずん、としたまま答える。

「あんたの事に随分詳しい方だったわ。本当はあんたがあの方を忍びこませたんじゃないの？」

「俺がそんなことするもんか。この間注意したばかりだったのに、顔まで見せたそうじゃないか」

私は真っ赤になった。そんな事まで聞いているのか。

「偶然見られちゃっただけよ。だいたいあの方だって軽々しいわ。ここは大将様のご結婚相手の住まわれている場所なんだから。一体どういう方なのよ？ あんた、知っているんでしょ？」
思わずまくしたてる。

「そんなこと教えられない。まったくなんてじゃじゃ馬だ。琴ぐらい御簾の奥で弾いていられないのか？ 夜に貴人の前で顔を見せればどういうことになるか知らない訳じゃないだろう」

康行も言い返してきた。

「あら、それならそれで結構よ。私が女の身で出世の糸口をつかむかもしれないじゃないの。そうなれば誰も私を見下せなくなるし、お父様の立場もずっと良くなるってものよ」

「お前、本気で言ってるのか？ お前の身分じゃ殆んど間違いなく愛人扱いだぞ。暮らしに困った親無しの娘ならいざ知らず、わずかばかりの地位を上げるために本妻の方々に一生頭を下げ続ける人生を送って、何が出世なもんか。そういう女は表はともかく、裏では男達に見下げられているんだぞ。よく考える」

考えてるわよ。別にそれほど本気で言った訳じゃない。康行が面と向かって「顔を見せた」なんて言うから、引つ込みがつかなくなつたんじゃないの。どうして東男って、繊細さの欠片もないんだらう？

「少なくともあんたみたいな侍なんかの相手をするよりはよっぽどましだわ。それに私がそんなに簡単に男君を近づけると思ってるの？ 馬鹿にしないでよ」

私は心とは裏腹な事を言っていた。あの時は顔を見られてしまった事に動揺した上、初めて若い公達を前にして、すっかり普通ではなくなっていた。私は身分が低すぎるから、本気でかかれれば誰にも助けてはもらえないだろう。向こうもあまりみっともない真似はしないだろうけれど、経験が無いので本当のところは分からない。

正直、今頃になって冷や汗の出るような思いをしている。

「じゃじゃ馬のお前なら大丈夫か。思ったよりは冷静だったんだな」

全然冷静ではなかったのだけど、私にだって意地がある。ここは誤解しておいてもらいたい。

「今日はうちの若君がこちらを訪ねにくるぞ」

「え？」

「中納言様にお話があるらしい。姫君のところへもご挨拶があるだろう。それですべて分かるぞ」

そう言うと、康行は私の返事も聞かずに不機嫌そうに去って行ってしまった

身代わり

その夜、中納言家はわかにはざわめいていた。大納言家の若君、近衛の大将がおこしになっているのだ。

只今中納言様とご歓談中で、後ほどこちらへも御挨拶に来るとい
う。

御挨拶と言つても、姫君と大将様は顔を合わせることはできない。奥に引きこもられた御姿も見えないし、もちろん姫君の御声をお聞かせするわけにもいかない。事実上、周りで働く私達との顔合わせのようなものである。

果して姫君様のお相手はどのような貴公子なのだろうかと、私達はワクワクしながら待っていた。

姫君は部屋の一番奥の御簾の中、さらに几帳を立てたその奥に脇息に持たれていらつしやる。

そのそばには乳母の君と上？と呼ばれる古参の女房が控えている。手前にはやすらぎ達若い女房。その中に私もいて、御簾のうちから出てきては、畳や敷物の用意をする。客人のお世話をするのに顔を隠す訳にはいかないので、皆、かしこまる意味も兼ねて頭を低く垂れている。

知らせを受けてしばらくすると、衣擦れの音とともに大将様がやってきた。私は一層深く頭を下げる。

「春とは言え、いまだ梅も咲き初めぬような冷やかな夜に、わざわざ

ざ足をお運びくださり、ありがとうございます」

姫君の御言葉を声が良くて同じ年ごろのやすらぎが、大将様にお伝えする。

「本日は中納言殿にご相談があつてお伺いしたのですが、こちらに
も少し御挨拶をと思ひまして」

大将様の御声を聞いて、わたしは「え？」と、戸惑った。聞き覚えのある声だ。

下女が運んでくれた酒と肴を御前にお出しするのに、私は思い切つて大将様のお顔を見た。

そこに座つておられたのは、昨夜、私をからかわれていた、あの上達部だった。私は啞然とした。

どおりで「大将」と、軽々しく呼んでいらした訳だわ。だって当のご本人だったんだから。

警備の間をすり抜けられたのも至極当然。姫様の部屋の周りの警備に侍を用意したのは大納言家。おそらく大将様ご本人だ。この警護に誰よりも詳しい。皆の前では私も大将様も知らんぷりをしていたけれど、おそらく大将様の心の中では昨夜のように噴出していたに違いない。

なんてばつが悪い。

こんなこと、誰にも言えやしない。姫様のご結婚相手に、夜、

人気がない所で、顔を見られてしまったんだから。

大将様がお帰りになられた後、皆がかしましく大将様をほめたたえる中で、私はつい、黙りがちになってしまった。

姫様ややすらぎが心配するのは分かっていたけど、私の中で大将様は「変な公達」から「とんでもない公達」に格上げされてしまっていたので、とても口を開く気にはなれなかったのだ。

「どうしたの？具合が悪いのなら下がって休んでいいのよ」
そう姫様に言われると、申しわけなくなるんだけど。

そこへ今度は中納言様のお使者がいらっしやって、私とやすらぎに話があるから参上するようにと言われる。

乳母の君や、上？の方々を差し置いて、私達に話しなんて。昨日から異常事態のてんこ盛りだわ。

中納言様の前に参上すると、中納言様は北の方とともに深刻な趣でいらっしやった。

「実は今日、大将殿がうちに来たのには訳がある。このままでは一の姫の身に危険が及びそうなのだ」

私とやすらぎは顔を見合わせた。どういっことだろう？

「今上の兄弟で、前の帝だった方を知っているな？」

前の帝はお小さい頃から御気性が荒く、帝の地位につかれてからも、中納言様とのそりが合ってはいなかった。

そのため何かと政務上の衝突も多く、国の人心も真つ二つに割れてしまった。

そこで中納言様は一計を案じた。その頃、前の帝には大変ご寵愛が深い女御様がおられたので、その方がご病気になった際に、病氣平癒の祈願に大変効果があるという、ある僧侶を宮中に招いて、日々、祈祷を続けさせた。

その僧侶は日ごろから国の政策が二つに割れている事に心を痛めていて、女御様のご心配のあまり気の弱くなっている前の帝に、連日のように御国譲りをそそのか……いや提案していたという。

その甲斐あってか、前帝は弟宮にその地位を譲られた。そして女御様も回復したかのように思われた。

ところが女御様は翌年にあっけなく亡くなってしまった。

当然中納言様は前帝に恨まれた。このような形で帝の地位を追い落とされた前の帝に同情が集まり、中納言様の信用は落ちてしまつたかに見えた。

それを追って今度は大納言様の力が大きくなっていった。世の流れは大納言様と今の帝へと移っていく。

しかし中納言様もしたたかだった。大納言様が勢力を伸ばすのに、中納言様も自ら全精力をかけて協力していた。大納言様はとうとう

都の勢力のほとんどを支配するにいたった。自らの娘を後に据え、東宮を産ませ、盤石の地位を築いたのだ。献身的に協力していた中納言様もそれに次ぐ力をつけた。

一度、信用を落としているので、いまだに政敵も多く、一の姫様の御入内は叶わなかったものの、こうして大納言家との結婚にこぎつけて、両家の力と依存しあう関係はますます深まっている。これは国中の人間が知っていることだ。だから、前の帝、と言えば、この邸では中納言家を恨む恐ろしい方、というのが普通の見方になっている。

「前の帝が嵯峨野の別邸に、怪しい者達を集めていると聞いた。色々と探ってみるとどうやらこの結婚を阻むために姫を拉致しようとたくらんでいるらしい」

「これ程警備が厳しい中をですか？」
にわかには信じがたい。

「花房、先ほど大将殿に聞いたのだが、昨夜、お前は大将殿と会ったそうだな」

私は思わず青くなった。男君が女房を相手にするのは許されているとはいえ、（むしろ、邸に引き留める理由は多い方がよいとはいえ）今は結婚前だ。間が悪い。

「も、申しわけございません！」
これでは暇を出されても仕方がない。なにもなかったことをどう証明しよう？

「お前を責めるために呼んだのではない。詳しい話は大将殿から聞いている。実はお前に頼みがあるのだ」

「私に、ですか？」

「お前に姫と入れ替わってもらいたい」

一瞬、私は息が出来なくなった。いったい何を言い出すんだろう？

「さつき、お前に聞いたとおり、大将殿は昨夜、姫の近くに忍び込む事が出来た。つまり、内部に詳しい者が裏切れば、姫をさらうことは、決して不可能ではないということだ。昨夜、大将殿はそれを試されたのだ。今、この屋敷には大勢の人間が出入りをしている。このままでは危険だ。そこで姫を別の場所に移そうと思うのだが、姫がいないことを怪しまれては困る。そこでお前に姫の身代わりを務めてほしいのだ」

身代わり？ この私が？ よりによって姫君様になり変われというのか？

「そんな事が出来るのでしょうか？」

私はすぐには頭が回らなかった。隣でやすらぎも啞然としている。

「姫の新しい寝所には、明日にも移る事が出来よう。少し早まったが明日、さっそく引っ越しをする。その時にお前と姫に入れ代ってもらおう。このことを知っているのは私達夫婦と乳母、姫のごく近い女房達だけだ。上？の者達と乳母には姫について行ってもらう。お前には新しい寝所で、やすらぎ達と一の姫として三日夜を迎えて

もらう。その夜の宴の時にまた入れ替わってもらつ手筈にしようと思つ。礼はどんなことでもする。これはぜひ、引き受けてもらいたい」

「ここでやすらぎが口をはさんだ。

「待つて下さい。花房さんの身の安全は守られるのですか？」

「警備は今まで以上に厳しくする。もちろん花房は寢所の奥から動いてはならない。出来うる限り家人にも姿を見せずにいるほしい。やすらぎ、お前は姫の事に一番詳しい。いかにも姫がそこにいるようにふるまつてほしい」

姫様は寢所の奥で結婚を待つ身。確かに黙っていればやすらぎの演技次第でごまかすことは可能だろう。しかし、私としては問題がもう一つある。

「三日夜の宴までの身代わりとおっしゃいましたが、その前の二日間に大将様は御寢所に通われる訳ですよ」

それがどういうことを意味するのかは、知っているの依頼なのだろうが。

「結婚には三日間、通うのがしきたり。当然大将殿も通われるが、事情はすべて知っておられる。大将殿はお前の顔を見知っているのだし、勘違いなさることはない。大将殿なら決してお前を悪いようにはなさらないだろう」

やっぱり。中納言様は私をかなり軽んじてらっしゃる。命は守つ

て下さるだろうが、あとは大将様の御心次第か。身分のいやしい私
が顔を見られている以上文句は言えないという訳だ。

私だって、ここまでされればこんなお話はお断りしたい。身分は
低くても低いなりに、女人としての自尊心はある。

でも、ここで私が断つても、他にこの役を引き受ける女房がいると
は思えない。こんなことまでするということは、本当に姫様の身に
危険があるということなのだろう。

やすらぎが心配そうな視線を私に向けてくれている。姫様がいな
ければ、私はここにすることは無かった。

「分かりました。お引き受けいたします」

「あなたは昨夜、公達を見かけたのではなく、大将様にお会いにな
ったのね」

姫様の部屋に戻る道々、やすらぎは私に問いかけて来た。

「やすらぎ、私、大将様とは」

「分かってるわよ。なにもないんでしょう？ あなたは琴を弾いて
いて、引っ込み損ねただけ。それに女の部屋の前に忍び込んでこら
れたのは大将様のほう。あなたは何も悪くないわ」

「ありがとう。信じてくれて」

中納言様に軽んじられたあとだけに、やすらぎの気持ちが身にし
みる。

「あなたのような人が姫様を裏切るような真似が出来る訳が無いわ。夜がれ（夫が通わなくなる）の心配がある夫婦ならともかく、これからご結婚なさるうという方に、あなたの方から声をかける訳が無いじゃないの。こういう時は身分を気にしてはだめよ。あなたは堂々としている時が一番輝いているんだから」

こんな風にやすらぎに励まされると、郷里に吹く、一陣の風を思い出す。向かい風に向かって何かに立ち向かっていく時の、湧きあがるような心を取り戻すことが出来た。

「でも、本当に良かったの？　こんなことを引き受けてしまってやすらぎは心配してくれる。」

「ええ、大丈夫よ。両家とも面子をかけて私を守ってくれるはずだし、大将様も、昨夜お話した限りでは少し軽々しいところはあっても、いい加減な方とも思えなかったし。私がしっかりしてさえいれば、事はうまく運ぶはずよ」

私は取り戻した自信を支えに、心がすっと立ち上がったように感じていた。

侵入者

その夜のうちに私と姫様の入れ代わり計画は準備を整える事が出来た。

勿論、姫様は私を心配して反対なさってくれたけれども、私ももう、腹を固めてしまっていた。

こんなこと、叔母や父に言う訳にはいかないので、私は宿下がり（休暇）をいただいて、女房仲間と都でも有名な清水の観音様におこもり（寺に数日間の宿泊をして祈願を立てること）に行くという事にしておいた。これなら私と連絡が取れなくなっても心配されることはない。

万が一のことを考えて、私達は姫様がどちらに身を隠されるのかは聞かないことにした。余計なことは知らない方が安全かもしれないし、最悪、私達の身に何かがあっても姫様の身だけは守られることだろう。

翌朝には新しい寢所に姫様は入られ、その一番奥の、塗籠と呼ばれる四方をふすまに囲まれた、外から全く見えない小部屋の中で、私と姫様は衣装を取り替えて入れ代わった。

姫様は乳母の君と上？達に守られながら、そっと牛車に乗り、いずこかへと姿を消される。

私はしばらくの間、やすらぎと寢所の奥で、声も立てずにひっそりと暮らさなければならぬ。

その時間を利用して、やすらぎは姫様のしぐさや癖、お好み、さらにはお小さい頃の思い出話などを教えてくれた。

やすらぎの思い出話は、姫様の今の性格が作られた理由を知る手がかりになった。

帝が変わられ、中納言様に非難が集中していた頃、邸の外の噂話などを幼い姫様にお聞かせしないようにと、誰もが相当気を使っていたため、姫様は自分の周りの人々が冷たく感じられたらしい。腫れ物に触るような扱いに日々鬱憤も溜まっていく。そのうちにお顔の色も悪くなり、食欲まで無くされて、もののけでもついた様になってしまわれた。御心配された中納言様は、姫様を吉野のお寺へと連れて行かれた。御祈祷を受けるのは勿論のこと、ちょうど桜の時期でもあったので、お気が晴れるだろうとの御配慮でもあった。

その行きがけにお寺に向かう親子の姿があったのだが、幼い子供が足をくじいてしまったらしく、親は懸命に子供の足に濡らした布を当てている。それを牛車の中から見ただけ姫様は子供を哀れに思い、従者に腫れを引かせる薬を親子に分け与えるように言った。薬を受け取った親は大変感激し、

「このようにお優しいお姫様の御父上である中納言様が悪い方であるはずはない。世間のうわさなど当てにはならない。素晴らしい方々だ。もったいない、もったいない」

そう言って、いつまでも頭を地面にこすりつけていた。そうしてたどり着いたお寺で、姫様は御仏の慈愛について説法を聞くうちに、父上の評判や、周りの人間の接し方などに振り回されるよりも、自らの心を穏やかにする事が、巡り巡って、家の幸せにつながっていくのだとお考えになるようになったのだという。

それ以来、姫様は大きなお声を立てて人を威嚇したり、叱りつけるような事のないように、優しく、穏やかに日々を過ごすことに専念されるようになったのだとか。

私などは金持ちの娘であっても、身分の低さを色々言う者は正面切って言って来るものばかりで、腫れ物に触る扱いも、あてこすりで白い目にさらされたこともない。田舎の人間は噂も嘘も真つ直ぐなものだ。

私は父に甘やかされて我がまま放題だったし、人の評判で、家の命運が決められてしまう心配もしたことが無い。しかし、高貴な方々ともなればそんな幼い頃から、人の目と家の名誉を意識して暮らし続けなければならぬのだ。それは一生逃れられない宿命だ。

生涯連れ添うかもしれない結婚のお相手さえも、選ぶ事が出来ない。すべてが決められた人生。

それならばせめて、せめて、召し使える女房達の誠意や、友情だけは本物でありたい。

恋のときめきや、自由は無くとも、穏健で穏やかな結婚生活であっていただきたい。

やすらぎの話を聞くうちに、私は本気で姫君様の健やかな幸せを祈る気持ちになってしまっていた。

その夜私は早くに床についてしまった。おとといからあまりにも

色々な事があり過ぎたし、緊張もつづいていた。なにも身体を動かしていた訳でもないのに（むしろ動けない！）心も身体もくたくたになってしまっていた。

だから綿のたつぷりと入った、真新しいふつくらとした夜具の着物を引きかぶって身体を横たえたとたん、ぐっすりと眠りこんでしまったようであった。

真夜中過ぎの頃、小さな物音に続いて冷たい隙間風を肩口に感じて私は目を覚ました。

早春の都はまだまだ寒い。田舎の寒さとは違う、ぞっとするような冷気が特有の地形から襲ってくる。だから屋敷の建物は床が高く、御格子と呼ばれる戸を閉めて冷気を防いでいるのだが、何処からか冷たい風が入りこんでいるようだ。私は着物をかぶり直そうと寝がえりをうった。

突然人の気配を感じた。声を立てようとして口をふさがれる。

賊は一人ではない。なぜなら私は二人がかりで担ぎあげられていた。一人はふさいだ手を放そうとはしない。息が苦しくなった。必死にあがくが二人掛かりではどうすることもできない。

内部に裏切り者がいるわ。

こんな時だというのに、真っ先にその事が頭に浮かんだ。私達がここに移ったその夜に、警備を一層厳しくした中で、二人もの人間が忍びこんでくるなんて、誰か内通者がいなくては不可能なことに

違いない。

息がとにかく苦しくなる。私は口をふさいでいる手に思いつきりかみついた。その手が緩み、声を上げる。

「誰か！」

助けてといい終えない内にまた口がふさがれる。いつの間にか開けられていた御格子をくぐって外へと連れ出される。風が冷たい。月もない夜なので辺りは真の闇夜だ。

もう一度かみついてやろうともがいていると、タツタと足音が聞こえて来た。

「御免！」

そう、男の叫び声が聞こえたかと思うと、別の男のうめき声が出て、私の体が自由になった。

しかしすぐに誰かに抱えられて、屋敷の方へと引き返す。縁に下るされて、その前に誰かが立ちはだかり、賊に斬りかかっていく。人の逃げ出す気配と足音がして、やがて辺りは静けさを取り戻した。

「失礼を承知で乱暴な真似を致しました。申し訳ありませんでしたが、場合が場合でしたので。お怪我は御座いませんでしたか？ 姫君」

声を聞いて私は慌てていた。そこに、騒ぎに気付いたやすらぎが火を持ってやってきた。

私達の姿に光が当たる。康行が呆然と私の顔を見ていた。

「お前は……お前は一体何をやっているんだ？」

康行にかいつまんで説明をすると、いきなり質問された。今、説明したじゃないの。

「若君の前で顔を晒して琴をひいただけでは飽き足らず、姫君になり変わって大立ち回りをする女なんて、下女でも聞いた事は無いぞ」

「失礼ね。普通の下女だったら、こんな事に巻き込まれたりはしないわよ。それに大立ち回りをしたのは康行で私じゃないわ」

「そんな話をしているんじゃない。これは女房としての役目を越えている。超え過ぎているだろう。まして三日夜の宴まで入れ代わったままでいるだなんて、いくら身分が低いとはいえあんまりだ。なぜ、断らないんだ」

「私が断れば姫様の身が危険なまま、御結婚の邪魔をされてしまうじゃないの。それではお可哀そうよ」

「お可哀そう？ お前今、自分がどんな目に会ったのか分かってるのか？ 姫君の代わりに連れ去られそうになったんだぞ。お前がニセモノだと知れたとたんに、殺されていたかもしれない。人に同情をかけている場合じゃ無いはずだ。こんなこと今すぐ断るんだ」

「それは無理よ。姫様はどちらにいらっしやるか分からないし、急に呼び戻すことも出来ないわ。ここに姫様がいらっしやらないと知

られたら、それこそ、どんなことになるか。もう、後戻りはできないの」

「自分の身をさらしてまで、姫君を守りたいと本気で思っているのか？」

あまりそんな深いところまでは考えていなかったが、康行に問いかけて、私は本気で姫様を守りたいと覚悟を決めた。

「そうよ」

私の覚悟が伝わったのか、康行は黙り込んだ。やすらぎはずっと黙ったまま、私達のやり取りを聞いていた。

「お前も都の人間になってしまっただな」
康行はさびしそうに言った。

そうよ、私はずっとそれを望んできた。ただ、それが今、思っていたほど楽しいことではなくなってしまったけれど。

「今日は俺がここから離れずに見張っていてやる。明日には増員されるはずだ。お前は安心して眠っていていい。ただし、日中は注意しろ。きつと内部に密通者がある筈だ。それも下女や下人ではなく、お前達女房の中にもいるかもしれない。十分に気をつける」

それは私も連れ去られかけた時から考えていた。私も真剣にうなずいた。

「今夜は安心して眠っていていい。ゆっくり休め」

康行は珍しく私をいたわる言葉を言って、私とやすらぎを御格子の開いた所へと連れて行ってくれた。

部屋へ戻るとやすらぎが私の手を握ってきた。

「ありがとう。命懸けで姫様を守ると言ってくれて。私もあなたと姫様を命懸けで守るわ」

やすらぎは涙ぐんでいた。やすらぎにとって姫様は生まれた時からお仕えして来た、姉妹以上の大切な方なのだろう。彼女の必死さが手から伝わってくる。

「一緒に姫様を守り切りましょうね」

私もやすらぎの手を心をこめて握り返していた。

身代わりの初夜

翌朝、姫君様の部屋に侵入者があったことは、屋敷中の話題になつてしまつていた。警備の人数は増員され、庭先にまで、侍や下人達の姿が見られるようになっていゝらしい。

私はこれを幸いに連れ去られかけた衝撃で、気分を悪くしてして寢所の奥に伏せつてゐる事にしてゐた。女房達への対応はやすらぎが一手に引き受けてくれる。夜具をかぶつて寝た振りをしなから、私は考えにふけてゐた。

屋敷内に内通者がゐる事は疑いようがない。でなければ昨日の鮮やかな手口の説明がつかない。

昨夜の時点で康行は侵入者に気付かなかつた。他の侍や下人達もそつだ。それなのに賊は姫君の寢所にやすやすと侵入してきた。これは身分の低い者が手引きをしたぐらいでは、出来ることではない。

私がゐる姫君様のお休みになる場所は、寢所の建物の中でも一層奥まつた所に用意されてゐる。縁に近い庭先の周辺の片方は女房達の宿泊する局が取り囲んでゐるし、もう一方は高い堀から林の様な木々に囲まれた奥の庭に面してゐるので、外部からはかなりの距離がある。しかも今はそのいたるところに侍達が見回つてゐるのだ。

昨夜御格子が開けられてゐたのは女房達の局の近くだつた。女人とはいへ、大勢の人が休んでゐる目の前を、まして定期的に見回りがある中を、間隙を突いて寢所の奥まで入つてきたのだ。

御格子はうちから掛金をかける仕組みになつてゐる。それが外さ

れて開けられていた。これは普通に考えて、下男、下女には入れない、寝所の姫君の部屋の内側から、女房の誰かが掛金を外し、賊を招き入れた可能性が高い。

そうなると自分の同僚である女房達が、全て疑いの対象になってしまう。やすらぎが相手にしている、普段見知った女房達の声聞きながら、裏切り者はあの人だろうか？ この人だろうか？ と考えるのは気分の良い物ではない。

当然女房達も同じように思っているらしく、寝所の中には重苦しい空気が流れている。

中には私がいれば真っ先に疑うところだったが、宿下がりしているのでは疑う事が出来ないと、やすらぎにこぼす人までいた。私がない時にはこんな風に噂をしているのかと、腹が立つやら、あきれやらである。

それを聞き咎めた桜子が私をかばってくれたりして、ああ、こんな時に人柄というのは分かるものだなあ、なんて思ったりする。

結局その日は何事も起こらず、夜も一晩中警備の侍達の気配とたいまつの明かりの絶える事のないまま夜明けを迎えた。

夜が明けるといよいよ姫君様のご結婚の日を迎えた。入れ代っている私としては、朝から緊張の真っ只中にいた。

まず、偽物だとバレないように気を使わなくてはならない。さすがに結婚当日となると、姿は見せないとはいえ様子をうかがう女房達に気取られないように姫様のしぐさや癖を真似ながら気配を漂わ

せなければならぬ。

中納言様のご挨拶は奥でじつとしたままやすらぎに任せておけばよかつた。しかし、北の方が見えられると、母子としての振る舞いに気を配らなくてはならぬ。

出来るだけの演技はしたつもりだが、御簾の向こうではどのような気配に感じられたのかヒヤヒヤものだった。姫の妹君もおこしになり、声を立てずにそつと談笑しているふりをする。二の姫とは初対面だというのに。

二の姫はおん年十二歳になる少女なので、今度の件は事情を理解できている。だから不安を隠しきることはできず、心細そうな表情をしながらも、姉の無事をしきりに案じ私にお礼を言ってくださっていた。

私はかしこまることもできずに、ただ、うなずきを繰り返すしかなかった。

そして日が落ちると大将様は約束の時間通りにお見えになられた。当然、そつと忍んでこられることになるので、この部屋の周辺は人払いが行われて、警備も人の気配も薄くなってしまう。

賊が狙うには絶好の機会だろうし、大将様がどんな心積りでおこしになるのかも分からない。さすがの私もここへきて身代わりになった事をちよつとだけ後悔してしまう。

こうなつたらせめて大将様に言いたい事だけは言わせてもらおう。

身分が低い者にも、それ相応の誇りがある事を知っていただこう。これだけ大将様の思惑どおりに振り回されたのだから、これ以上いになりになる必要はないはずだ。何が起ころうとも自分の意思だけはきちんと伝えたい。狙われた邸に通うのだからあちらも命懸けかもしれないが、こつちだつて一生がかかっているんだから。

忍びやかな人の気配がして、こつちに近付いてきた。大将様だ。私は頭を低くしてかしまる。

「これはこれは。そんなにかしまることはありませんよ。今宵、私はあなたの夫としてここに伺ったのですから」

大将様は楽しげにおっしゃるが、こつちはそれどころじゃない。

「おとといの晩、私は姫様の代わりに連れ去られそうになりました。おそらくこの屋敷の中に内通者がいると思われれます。大将様も狙われているかもしれません」

「それはあなたもですね。よく、こんな無理な事を引き受けて下さいました。まして恐ろしい目にあわれたというのに、あなたは逃げ出しもせずにきちんと身代わりの役目を勤めて下さっている。心から感謝していますよ」

「大将様のためではありません。申し訳ございませんが、私は姫君様のために今ここにいます。姫様と大将様が無事に結ばれる事を願って、この役目を引き受けているのでございます。姫様に見出していただけなければ私は下働きの下女として、この屋敷の庭先を駆け回っていたことでしょう。ひよつとしたら田舎につき返されて、成り上がり者の娘が馬鹿な夢を見た、と、笑い者になっていたかもしれませぬ。姫様あつての私なのです。私は姫様が好き

で、このお邸が好きで、だからこそ、こんな役目を引き受けているのでございます」

大将様に顔を見られて、中納言様に見下げられて、仕方なくここにいるのではない。私は自分の意思と、姫様への感謝、もつと言えば、この邸に勤める事が出来て、色々な人達と友情を育む事が出来ている事に感謝しているからこそ、ここにいるのだという事を大将様に知って頂きたかった。それさえ知っていて頂ければ、この先世間がどう言っても自分が自分の心のうちの誇りは守られるような気がしたのだ。

大将様は私の顔を上げさせ、深くうなずいて下さった。

「あなたには、初めに私が考えていた以上に色々な難題を強いてしまったようです。初め、私が姫の身代わりを考えた時は、妹姫の二の姫や、やすらぎの事を考えました。しかし二の姫では万が一連れ去られてもすれば、今度は中納言家の人質にされてしまう。中納言殿は今、検非違使（現在の警察の様な組織）の強化に積極的で、前の帝に煙たがられている。今度の件もその流れで起こっている事なのです。やすらぎは姫の事を誰よりも思っている乳姉妹だから口外される心配が無い。だからお付きの女房として偽物の姫を守る役目に回ってもらった方がいい。そんな時に康行からあなたが夜、局の近くで琴を弾いている話を聞いたのです。あなたの人となりは康行から聞いていましたし、裕福な環境で育ったあなたは下手な貧窮した貴人の娘よりも精神的に余裕がある。いささか粗忽な所はありのようですが」

ここで大将様はクスリと笑みを漏らされる。私が扇を落とした事を思い出したのだろう。

「このような方なら、うろたえることなく、事情を呑み込んで下さると私は思ったのです。本来なら昨日で本物の姫と入れ替わっていただくつもりだったのですが、何故か増築の進捗状況が外部に漏れ出して、前帝の動きが怪しくなってきた。仕方なくあなたには三日夜の宴までここに残っていただく事になってしまったのです」

成程。私が今日、ここにいないではならなくなったのは、突発的な事情からだったのか。それに実際に私は襲われている。大将様のご判断は正しかったのだろう。

中納言様は私に対して軽侮の念があった。これは疑いようがない。しかし、大将様の今の様子に私を軽んじられているような気配は感じられない。

「あなたが襲われたと聞いた時は本当に申し訳ないと思いました。てつきり私はあなたが康行やあなたの父親を頼って逃げていくものと思っていましたし、それも仕方がないと思いました。しかしあなたはそうしなかった。それどころか私の妻になる人のために命を張ると言って下さったそうですね。私はどれほどあなたに感謝しているか」

大将様が頭を下げられる。

「そんな、もつたいない」

私は本当に恐縮してしまう。正直なところ、この場だけ手をつけられて、御結婚後は捨て置かれるか、最悪、適当な理由をつけられて郷里に返されるかと内心ハラハラしていたのだ。

「これはあなた次第なのですが、こういうことになったのも何かの縁。もしよかつたら私の感謝の気持ちとして、私の妻になっていただけませんか？ あなたのご一族の事は一生面倒見させていただきますよ」

私は目を丸くする。ちょっと待った。話しがこういう方へ行くとは思っていなかった。

男君は何人の妻をめとつてもかまわない。もちろん主流の本妻はお一人になるが、社会的地位はどの妻も平等に与えられる。正式にお披露目のない愛人や、手近な女房に情けをかける情人とは訳が違う。妻はあくまでも妻なのだ。

だから全ての妻に同じ格式が与えられるので、他の妻の家が良くなり、どうしても足を運べなくなると離婚ということもありえる。そうなつては困るので、夫を通わせる妻の家は邸中を上げて夫をもてなし、世話をするのである。

ただ、それだけの経済力をかけて夫の世話をするのだから、夫になる人の身分や出世はそれ相応の物が求められる。身分が低く、出世の目が出ない男君は妻を一人持つのも大変だし、逆に家柄もよく出世街道まっしぐらな殿方は、各家から引く手あまたの申し出がある。

大将様はまぎれもなく後者で、都中の権門の家が狙っている方だ。それに私と大将様とでは身分に大きな開きがある。この場合、たとえ私の家が裕福だといつても、大将様が私の家から経済的援助を求めめることは無いだろう。その上で社会的、政治的援助は受ける事が

出来るのだ。

大将様は一族を一生面倒見ると言った。額面通りに受け取るのなら、たとえ夜がれる事になっても、離婚はせずに私の一族の面倒を見続けて下さるといふ事になる。女人なら一度は夢見る、大変な名誉だ。

普通なら断らない。一族の事を思うなら、断れない。女の身の大出世だ。私はぼーっとなってしまった。

大将様の感謝の念は本物だ。でなければ口が裂けても言っていない言葉じゃない。けれど。

私は大将様から視線をそらした。姫君様の調度品が目に入る。そうだ、ここは姫様の寝所なんだ。

「その感謝は姫君様に捧げて下さいませんか？ さつきも申しあげたとおり、私は姫君様のためにここにいます。自分の出世のためではありません。そのお気持ちだけで結構です」

私はあらためて頭を深く下げた。さつきは自らの矜持から出た色合いの濃い言葉だったが、今は姫様への想いが言わせた言葉だった。

「姫君には実は了解を得ている。あなたがどれほど命をかけているのか姫君は知っておられる。私は身分がらまだまだ妻が増えていくそれならば人柄の分からぬ姫よりも、あなたの様な方に感謝の気持ち伝えたい。それを姫君も理解してくれている。その上での申し出なのです。受けて下さいますか？」

勝手に話をすすめられても困る！ 私が妻になれば姫君様は私と友情を結んで下さるのが難しくなる。いや、あの姫様なら自分のお苦しみを胸におさめて、私を暖かく見守って下さるかもしれないが、私は姫様をそんな立ち場に追いやりたくない！ やすらぎにだって顔を合わせる事が出来ない！

大将様は物慣れた様子で私ににじり寄ってこられる。私の袴の裾を膝で押さえている。普段女房や女君の相手で、この手のしぐさには慣れていらっしやるのだろう。私は思わず身を引いてしまった。それを見た大将様が膝から袴を放す。その拍子に私の懐からころりと何かが落ちた。櫛だ。康行が縁に置いて行った櫛。

お文

私は姫様の御櫛を使うのが申し訳なくて、この櫛を懐に入れていたのだ。中将様はそれをじつとご覧になった。

「康行。どこに隠れている？」

大将様がどこへともなくそう、お声をかけられた。

すると塗籠の中から何と康行が現れた。なんでここにいるのだろう？

「今日の私は振られたようだ。夜が明けるまで部屋を出ることはできないが、ここにいる事もはばかれる。お前はここで姫君を守っていなさい。私は塗籠で休ませてもらおう」

そう言つて大将様は少し微笑まれながら塗籠の中にこもられてしまった。

「やすらぎさんが俺を通してくれた。若君に言われていたらしい。さすがに今夜は人すくなくなってしまふから、寢所の中で賊が侵入しないか、見張つているように言われていたんだ」

康行はうつむいたままそういつた。

私は顔も上げられずに「そう」とだけ言つた。

「俺は御格子のそばにいる。御簾の中には入らないから、安心してくれ」

安心？ 何が安心だというの？ こんなやり取りの後で、康行に全部聞かれてしまっていて、何処をどう安心しろって言うのよ。私は何故だか泣きたい様な気持ちを抑えるだけで精いっぱいだった。

塗籠の中から時々衣擦れの音が聞こえる。大将様は起きていらっしやるようだ。康行は私に背を向けて御格子の方を見ているらしい。固まったようにピクリともしない。緊張しているのだろう。

その夜は三人三様が、まんじりともせず夜を明かした。賊が侵入した気配はないようだった。

夜が明ける頃、大将様は塗籠からお出になられて、康行に寢所から出るように促した。侍が建物の中にいたと知れたら厄介だからだ。中将様ご自身も帰り支度をなされる。康行はやすらぎに掛金を外してもらった御格子から外へと出ていった。帰り際に大将様がおっしゃった。

「あの櫛は康行からもらったものですね？」

「……はい」

康行はこの櫛を大将様にお見せして、良いものだといわれたと言っていた。大将様もすぐにお気づきになった。

「あの男は優しい男です。あなた達は真つ直ぐに目を見て話してお互いを知る事が出来るのですね。私などは女人と目を見かわせれば、そこですべてが決まってしまう。そうできなかったのは、あなたが初めてです」

公達に顔を見せて目を合わせれば、それは互いに関係を結ぶ条件の様なもの。女人は顔を隠すか、全てを受け入れるか二つに一つしか道が無い。それはどれほど不自由な事なんだろう。

「たしかに彼の身分は低いが、彼には馬を育てる才能が飛びぬけている。地元でも馬を売ってそれなりの生活が出来ているはずですよ。彼もあなたと同じように私のために身体を張って警護を務めてくれている。彼なら馬の世話だけで、十分暮らせるはずなのだが。彼もあなたと同じなのですよ」

「私と、ですか？」

「ええ、彼も五年ほど前に大納言家に初めて勤めに来ました。馬の事だけでも十分なのに、彼は気の合う私のために、懸命に使えて、性に合わぬであろう侍者となって私を守ってくれています。彼はあなたを昔の自分に重ねてしまい、放ってはおけないのですよ」

「そうか。だからここでの手当てをまるきり私の櫛につき込んだり出来たんだわ。康行は決して経済的に苦しい立場ではないんだ。何度も都に訪れるのは、お金のためだけではなく大將様への友情があるんだわ。私が姫様を気に留めているように、康行は大將様を気に留めているんだ。」

「正直、あなたの方が私は羨ましくなる事があります。真っ直ぐに見つめあって、真っ直ぐな言葉をかけあう。私には望めない事です」
大將様は軽くため息をおつきになった。

「後で後朝の文を差し上げますが、あなたは読んで下さるでしょうか？」

後朝の文とは、男女が契りを交わした後に贈りあう手紙の事である。本来なら新婚の朝には、当然送りあうのだが、私達はどうすればよいのだろう。勿論、姫様が書き残していかれた儀礼的な文は用意してある。表面上はこれを贈りあわない訳にはいかない。今、大將様がおっしゃっているのは、結婚を示唆された私に対してのお文の話だろう。私はこのお話に一言もお返事を差し上げていないのだ。

「返事を急ぐのはやめましょう。私もあせるつもりはない。では、今宵、またお会いしましょう」

そう言って大將様は朝霧の立ち込める中に姿を消してしまわれた。

その日、私はぼんやりとしたままため息がちに過ごしていた。やすらぎも私に声をかけてはこない。

康行や大將様が出ていく時の様子から、何か察するところがあったのだろう。私も口を開く気にはとてもなれない。

朝食もろくに取らずにいると、大將様から後朝の文が来た。開くと姫様宛のきちんとしたお文の中から、小さく折りたたまれた、もう一つの文が出て来た。私宛のお文だろう。

「藤なみのまだ咲かぬ夜ほととぎす鳴くべき時を今だ知るらむ」

万葉の古歌にかけていらっしやる、歌だった。

元の歌は「藤なみの咲きゆく見ればほととぎす鳴くべき時に近づ

きにけり」という、古くからの有名な歌だ。藤は「花房」という私の名前を現している。実際私の名前は藤にちなんでつけられている。生まれた時には満開だったそうだ。

ほととぎすは藤に寄り添って鳴くもの。遠い昔からの取り合わせで、中将様が私に言い寄る様子を現している。しかし、恋の花は昨夜咲くことは無かった。そもそも藤は夏の花。今はまだ春の初めだが、ほととぎすはいつ鳴けばよいのですか？ そんな意味あいの歌だ。

流石に手なれた読みぶり、私の名にかけ、季節をわざとずらしたお歌。筆跡も墨の濃さ、淡さ、かすれ加減まで良く整えられた美しい文字だ。全体に品格が漂っている。私などが太刀打ちできるお歌ではない。

それでもこれだけきちんとしたお歌を大将様は送って下された。昨夜の言葉はその場の勢いではないとおっしゃっているのだ。これに返事をしないのは、あまりに失礼だろう。仕方なく私も返事を書いた。

「わがやどのいけのふじなみ」

女のかな文字、しかも決して筆跡は美しくない。まして芸術的品位を添えるなんて逆立ちしたって私にはできない。

だから、せめてやわらかい文字で丁寧に、女の最低限の教養と言われる「古今集」の歌の、はじめりの部分だけを書いた。この後には藤の花が咲いた、いつかは山からほととぎすが鳴きにくるだろう。という意味が続く。あくまでも花が咲けば、という意味も込めて私はその部分をわざと書かずに表現をぼかしたのだ。歌は苦手でもそ

の程度のたしなみはある。大将様ほどの方なら、これで通じるだろう。

この文を私も大将様のように姫君の御手紙の中に小さく畳んで添える。奇妙なやり取りだ。

朝食をあまり食べなかつたので、やすらぎが「体によくはないから」と、暖かい甘蔓の湯（甘い飲み物）と柑子みかんを用意するように言ってくれた。暖かい物は心を落ち着けてくれる。

ところが柑子を口にしようとする、指先が思うように動かない。良く見るとやすらぎや他の女房も様子がおかしい。ここに来て私は甘蔓の湯に何かが混ぜられた事に気がついた。身体はすでに軽くしびれていて動かせない。どうやら隙を狙うには警護が厳しくなりすぎて、内通者が思い切って一服盛ったらしい。油断した。

白昼堂々と、こんな荒っぽい手口に出るとは思っていなかった。私は前のめりに伏せつたまま動けなくなってしまう、誰かに大きな布をかぶせられた。どうやら、袋のようだ。そのまましばらくは引きずられ、途中から担ぎあげられる。

外がだんだん騒がしくなる。どうやら下人達が出入りするところまで来たらしい。助けを呼びたいが声が出ない。身体のしびれもひどくなる一方だ。ついには外に連れ出されてしまったようで、物売りの声なども聞こえる。私はしびれる身体を必死に動かし、懐から康行の櫛を出した。

袋の隙間を探り、思い切って外に放り投げる。地面にカラリとモノの落ちた音がした。私は牛車か何かに荷物のように放りこまれ、だんだん意識が遠くなっていった。

康行。落とした櫛に気付いてくれたら、あんたを少しは見直すわ。

最後にそんな事を思った。

目が覚めるとひどく頭が痛かった。身体もまだ少ししびれているようだ。薬の影響があるのだろう。身体を起こし、回りを見回すと農作業の小屋の様な所にいる事に気がついた。都からは大分離れてしまったのだろうか？

反対側に振り向くと、そこに桜子がいた。

「気がついた？ 大丈夫？」

「大丈夫。少し頭が痛むけど。桜子さんも連れてこられたの？」

「そうみたい。気が付いたらここにいたの。ねえ、何故あなたがお屋敷にいたの？ 姫君様はどうしたの？」

そうか、桜子は事情を知らないんだっけ。

「実は中納言様に頼まれて姫様と私は入れ代っていたのよ。姫様が何処にいらっしやるのかは私も知らないの。知らなくて良かったわ。こんな事になるのなら」

私は痛む頭を押さえながら答えた。まだ少しぼんやりとしている。

「そうだったの。あの、とても申し訳なかつたんだけど、これがあなたの懐から出てきていたの。私、つい読んでしまつて」

桜子は大将様のお歌のお文を手にしてた。櫛を落とそうとした時に出て来てしまつたのだらう。

「このお手つて、もしかして大将様のものじゃないの？ あなた大將様と何かあつたの？」

この状況で隠しても仕方がないだらう。

「私に結婚を申し込まれたの。感謝の気持ちだと言つて下さつて」

桜子が驚いた表情で私を見つめる。そりゃあそうだらう。私だつて実感がなくらいだ。

「じゃあ、まだあなたには利用価値があるのね」

桜子の様子が変わった。利用価値？ どういうことだらう？

そう思つて桜子の手紙を持つ手を見てみると、その手のひらの傷に気がついた。何かにかみつかれたような……。

私ははっとした。前に連れ去られかけた時に、私は思いつきり相手にかみついた。一人はうめき声で男と分かつたが、あの時もう一人いたはずだ。あの、闇の中にいたのは桜子だったのか？

「あなたが内通者だったの？」 私は驚いて桜子を見つめていた。

人質

桜子はとっさに手の傷を隠そうとしたが、私の目を見ると「ふつ」とあきらめたような表情をして、私に文を返してきた。

「ついにお気づきになったのね」

まるでため息のように言う。

「何故あなたが姫様を裏切るような事を……」

私はまだ信じられない。こんなに人が良くて優しい人柄の人が、自分の主人を裏切るとは思えなかった。

「あなたには分からないわ。豊かな国で自由に育った人に私の気持ちには」

桜子は私の前で胸を張るしぐさをする。

私には薬の影響が残っていて、身体が利かなくなった。どうしてもうつむきがちになる。

姿勢は人の心に影響する。こんな状況では受ける影響も大きい。

私は桜子に支配されてしまったような錯覚を起こしていた。これも薬の作用なのだろうか？

「あなたは武蔵の国の出だったわね。山があり、広い平野があり、温暖な気候に恵まれた国。私の暮らした越後とは大違いだわ。一年の半分近くは雪に閉ざされ、その雪が時には人の暮らす家さえも押しつぶしてしまう。豊作に恵まれればよいけれど、夏の実に恵まれないければ長い冬に閉ざされてどうすることもできなくなる国。私の父はそんな国の国司になった」

桜子は遠い目をして自分の暮らした国を語る。

「本来なら父は若狭のようなもつと豊かな国の国司になれるはずだった。それなのにあの、帝の急な退位がきっかけで任地が越後に変更されたわ。武蔵や相模、東もあらえびすの国といわれているけれども、それより越後はもつと遠い国。そんな国の国司に父は突然据えられてしまったのよ。それでも父は国司としての務めに励んだわ。けれども運が悪いのか、父が赴任した後の越後は凶作が続いてしまった。そして冬には雪に閉じ込められる。私達はどれほど都を恋しく思い、苦しい思いをしたか、あなたには分からない」

桜子は立ち上がり、まだ体の自由が戻りきらない私を見降ろしている。

「私は父の任地が変わったら、都に戻って結婚することになっていった。しかし父は凶作の影響と、その対策に追われてなかなか都には戻れなかった。その時の越後は飢えと寒さで餓死する者も多かったから」

桜子は私に意地の悪い視線を送る。

「あなた、知ってる？ 京の街にもたくさんの餓死者がいる事を。あなたは牛車に乗って都大路を眺めるだけでしょうけれども、その路地を一步入れば道端にはたくさんの子供の死骸が転がっているのよ。そして何日かすると役人達が死骸を集めて烏野辺で、まとめて焼くの。それも茶毘に伏すんじゃなくて疫病が起こって高貴な方々にうつつたりしないように、まるで物のように焼かれるのよ」

桜子は私の顔色が変わるのを楽しむように眺めている。普段とは別人の様な顔つき。

「父が私に選んだ結婚の相手は、そんな仕事をしている役人だった。それでもその男はさる高貴なお方にお仕えしていて、前途は有望だったから父は私にその男との結婚を望んでいたの。ところが父が都に戻れなくなつた事をいい事に、向こうは私よりも家柄のいい姫と結婚してしまつた」

桜子の表情に、一瞬の陰りが浮かぶ。しかしその影はすぐに消え、私を見下す表情に戻る。

「幼い姫様が吉野で子供に情けをかけた話しなんて、私から見れば偽善もいいところ。虫唾が走るわ。たまたま姫様の目にとまつただけのその子が良い目を一時見ただけで、日常の中でどれほどの貧しい人たちが死んで行っているか、誰も気に留めずにいるのよ。あなた、誰にも振り返られず、打ち捨てられる気持ち分かる？ 越後に放っておかれてしまつた、私達のような者の気持ちか。なのに役人は威張りかえり、人々は見えて見ぬふりをするばかり。中納言様達は、その役人の力をより強くしようとしている。検非違使を増員したり、彼らの地位を上げようとしていたりしているの」

桜子の目の色が変わる。私に対してねたみと憎しみをぶつけて来る目だ。

「私が中納言家に勤めに出たのはあなたの様な行儀見習いと違うわ。親に迷惑をかけないように、結婚相手が決まるまで、自分が自立をする為に勤めに出たの。あなた達は都見物の延長の様なものだろうけれど、私は違う。自分で身を立て、自らの夫となる人を得るために勤めに出たの。それなのにまあ」

桜子は私に返した手紙を睨みつける。

「人によって、運つてこども違うものなのね。自分の力で生きる他にない、私のような者には誇りを踏みにじられるような事ばかりが起るのに、身分はずつと下でも恵まれて甘やかされてきたあなたのような人に、大将様からのそんなお文が来るなんて。本当に不公平だわ」

「でも、それでも姫君様達には何の罪もないじゃないの。お二人ともご自分が与えられた中で、精いっぱい生きようとしているだけじゃないの」

私は喘ぐように言う。今や薬の毒毛よりも、桜子の言葉の毒に私は苦しめられていた。

「そうね。姫様達には関係ないことかもしれない。それでも私は大納言家と中納言家がこれ以上繋がり深くして、力をつけていくことが許せないの。彼らが下々の者を見る時はいつも傲慢だわ。前の帝の味方をしたい訳ではないけれど、今の帝や貴族の人たちの鼻を一度は明かしてみたいのよ。この結婚を失敗させて両家に溝を作り、役人ばかりが威張りかえる今の状態を壊してみたい」

思い出す、中納言様が私に入れ替わりを依頼した時の見下した態度。言葉は丁寧であったが、そこにはインギン無礼な匂いがあった。きつと下々の誰もが大きなり小なり一度はこんな思いを味わっているだけだ

「それは世間へのやつあたりだね。あなたや前の帝がやっているような事で世の中が変わるとは思えない。もし変わったとしても、今度は帝の首を挿げ替えられるだけで、また、誰かの思うがままの世の中になるだけ。こんなことしても誰も幸せにならないわ。あなたは姫様が不幸になってもいいというの？」

桜子は私にじっと視線を向ける。そして挑戦的に言う。

「私は姫様やあなたの不幸を心から望んでいるの。私と同じ苦しみを味わうことをね。あなた、少し言葉に気をつけた方がいいわよ。あなたの命運は、今、私達の手の中に有るんだから」

桜子の目は何処までも冷たい。あの、人の良い笑顔の下にこんな目の色を今まで隠していたのだろうか？

「良かったわね。あなたにはまだ利用価値があるわ。殺されずには済みそうじゃない？ 大将様のお気持ちの本物なら、あなたをこのまま捨て置くことはできないはず。でも、やっぱり初瀬の観音様くらいには祈っておいた方がいいかもしれないわ。高貴な方って気まぐれな方が多いから」

「私を大将様への人質にするつもり？」

「すぐに殺されなかっただけでもありがたいと思ってね。二セの姫君様」

桜子はそう言って小屋の戸をあけて出て行ってしまふ。私は何とか体を引きずるようにしてその戸に向かって行くが、当然戸には鍵がかけられていた。私はその場に横たわった。これ以上無駄に体力を消耗できない。

身体のしびれは残っているが、頭はかなりはつきりしてきた。もうしばらく待てばしびれも治まるに違いない。薬の効果は間違いなく薄れてきている。

やすらぎ達も同じ薬に苦しめられているはず。屋敷の中とはいえ、薬の効き方にも個人差があるだろうし。やすらぎは大丈夫かしら？

桜子の考え方は間違っている。これは世の中への仕返しなんかじゃない。自らの不運を嘆き、幸せをつかもうとする努力をあきらめただけの泣きごとでしかない。ただのやつあたりだ。

そうは思う一方で、私は北国の厳しい暮らしを知らない。南国の激しい疫病の襲ってくるさまも、恐ろしい海辺の嵐も、深い雪に閉じ込められる息苦しさも経験したことはない。桜子のような人の、苦しみを理解することは出来ない。

桜子の様な不満を持つ者が、この国にはどれほど多くいるのだろうか？その考え方を弱いと切捨て捨ててよいのだろうか？ 私は気が弱くなつていく。

いけない。桜子の言葉に吞まれてしまっている。

だんだん身体に力が戻ってきた。しびれも感じなくなっていく。身体の内を取り戻すと、心の強さも取り戻す事が出来るようだ。そうよ、こんな理不尽な憎しみなんかには負けちゃいけない。

姫様は周りがどうあるうが、優しく生きていく覚悟を決めてらっしゃる。世の中にはこんな憎しみの感情が渦巻いている事も、きつと知っていらっしゃるのだらう。その姫様を守り続けることをやすらぎは覚悟している。大将様だって自分の出来うる限りの生き方をしてらっしゃる。私に感謝もしてくれている。

父は私に愛情を持って育ててくれた。康行だって私を気に掛け続けてくれている。桜子にだってこうした身近な愛情や友情があったはずなのだ。憎しみでその目を曇らせてしまったただけ。

私は負けない。私を愛してくれる人々がいる限り、つまらない憎しみの悪意になんか負けていられない。

このまま人質として利用されたくない。何とかしてここを抜けだすことは出来ないだらうか？

高い所に小さな窓がある。私はやっと動くようになった身体を精いっぱい伸ばして、外の様子を見ようとす。

外には見張りがいた。侍崩れのような郎党が二人、扉とこの窓を見張っている。普通の手段では逃げ出せそうにない。周りは広い田園で、外に出てもすぐに身を隠せそうなところは無い。どうしようか？

すると何処からか、ごく小さなささやき声が聞こえて来た。

「花房、花房」

私の名前を呼んでいる。

声のする方にそっと近付いて見る。板張りの小屋の、木目の小さ

な節穴から聞こえてくるらしい。

「薬を盛られたそうだな。大丈夫か？」

康行だ。康行の音がする。私は心から安堵した。

「大丈夫よ。よく、ここが解ったわね？」

私も小声でささやき返す。

「あの櫛はお前がわざと落としたんだろう？流石はじゃじゃ馬、こ
ういう時に、はすっこい奴だ。良くやった。櫛の先に車のあとがあ
った。それを馬で追って来たんだ。お前何とかここから出られない
か？」

「馬があるの？ 私も乗せられる？」

「この向こうに小さな林がある。馬はそこにつないであるんだ。二
人なら十分に乗れるさ」

逃げ切れるかもしれない。心の中に一気に希望が湧いてきた。

「何とかするわ。でも反対側に見張りが二人いるの。一人は気をそ
らすわ。もう一人は康行で何とかできない？」

「やってみよう。なるべく騒ぎを起こしたくない。外に出たら林に
向かって全力で走るんだ。俺もすぐに追いつくから振り返らずにま
っすぐ走るんだぞ」

康行はそういつと、じつと息を殺していた。

約束

私はまた戸口に向かって行った。その戸を両手でトントンと叩く。

「誰か、誰かいますか？」

なるべくしおらしい声を立てる。少しでも油断を誘わないといけない。

「どうした？」

男の野太い声が返って来た。

「ひどく気分が悪いんです。お水を飲ませていただけませんか？」

「ここを開ける訳にはいかない。そのくらい我慢しろ」

男はすげなく答える。

「でも、私、薬を盛られてからずっと気分が悪いんです。のどが渴いて、胸もつかえているの。私はまだ人質としての価値があるんでしょう？ 私の身に何かあったらあなたも困るんじゃないの？ お願いします。お水を一杯だけ……」

私はわざと消え入るような声を立てた。

「ちょっと待っている」

そう言っただけで男はその場から離れたようだ。代わりにもう一人の男が窓辺から戸口へと移っていく気配がする。女相手でもなかなか油断はしてくれないようだ。

しばらく待っていると戸が開けられて男が木の椀に入った水を差

しだしてきた。

「今、ここで飲め」

どうやら二人掛かりで見張るつもりらしい。私はゆっくりと水を口に含んだ。

私は途中で腕から口を放すと、着物のひもを緩めて下着と袴だけの姿になる。

「すこし、向こうを向いてもらえませんか？ 胸が苦しいので」

「それはできない。こんなところに連れてこられたのが不運と思っ
てあきらめるんだな」

男二人はかえってニヤニヤと薄笑いを浮かべている。私はもう一度水を口に含む。

私は顔をあげて男の目に水を吹きかけた。もう一人の男に腕を投げつけると、全力で駆け出した。

私を追いかけようとする男に、康行が飛び出して来てみぞおちに宛て身を食らわすのが見えた。私は林がある方角を確認しようとする。そこにもう一人の男が刀を持って私に斬りかかるうとする。殺しさえしなければ、腕の一本くらい斬り落としても良い気であるの
だろう。

康行も刀を抜いて男に斬りかかる。私は必死に逃げていく。向こうに林がある事によろやく気がついた。

刀を合わせる音がして思わず振り返る。次の瞬間康行が男に斬りかかっていた。私は目をつむって走り続ける。下着と袴だけなので

身体はだいぶ動かしやすいが、全力で走ることなど普段は無いので、すぐに息が切れて来る。それでも懸命に走るとどうにか林の中にとどり着く事が出来た。康行も追いついてきた。

「無事か？」

康行が聞いてきた。

「ええ、無事よ。……斬ったの？」

私は戸惑った。康行が人を斬るのをはじめて見てしまった。

「斬った。仕方なかったんだ。あのままではこっちが危なかった」

見ると康行は少し震えていた。全身の気が立ったような気配を感じさせている。

「大丈夫なの？ 康行」

「人を斬れば平気じゃいられないさ。俺は度胸がないんでね。しかしこれが俺の仕事だ。大丈夫、心配するな」

そう言っつて康行は林の奥から馬を引いてきた。私を抱き上げて乗るのを手伝ってくれる。

「暖かいのね。馬って」

こんな時に間が抜けた言葉だとは思ったが、思わず口に登った。

「生きているんだから当然だ。生き物のぬくもりは心を安らげてくれる。だが、今は気を張っていてくれ。大納言家に辿り着かなければならない」

康行も私の後ろに乗り込んだ。すこし、血の匂いがする。返り血だろう。

「子供の頃の願いが叶ったんだ。少し揺れがきついかもしれないが、しっかり掴まっていてくれよ」

そういつが早いか、康行が足を動かしたとたんに、馬は矢のように駆け出していた。

激しく揺れる馬の背で、康行に半ば抱えられるようにしながら私は馬の首にしがみついていた。そして康行が言った言葉を考える。子供の頃？ 願い？ 昔、何かあったっけ？

馬、厩。そうだ、私がほんの小さな頃に子馬の出産を見せてもらった事があった。

私が幼女の頃、子馬が生まれると聞いて私は父にせがんで厩を覗かせてもらった。ところが腹の子は逆子だったらしく、母馬は大変な難産になってしまった。私は父の腕にしがみついて脅えながら様子を見ていた。

そうだ、そこに確か少年がいた。その子は馬の世話をしている下男の子だったと思う。

「大丈夫だ。父ちゃんは必ず無事に産ませるよ。こつこつことには慣れているんだ」

そういいながら父親の手伝いをしていたっけ。少年は母馬の腹を

さすつてやり、父親は出て来た子馬の足を懸命に引つ張っていた。

子馬は無事に生まれ落ち、必死に立ち上がった。母馬は子馬をずっと舐め続けていた。可愛い子馬だった。

私はその子馬が欲しいと父にせがんだが、この馬は後に都の若君に買われていくのだといわれた。

「こんなによろよろしているのに」
「なんだかわいそうに見えた。」

「父ちゃんが育てる馬はみんな立派に育つんだ。この子馬だって二年もすれば大きくて立派な馬になる。それにお前のお父様はお前が馬に乗るよりも、都のお姫様みたいになる方が喜ぶ」

「都のお姫様？ 亡くなったお母様みたいに？ でも私は馬に乗ってみたいわ」

けんもほろろな父をあきらめ、私は少年にせがんだ。

「お前は小さすぎて危ないよ。それならお前が大きくなってお姫様の様になつたら、俺が馬に乗せてやるよ」

「本当？ それなら私も都のお姫様になる。そうしたら私に馬を頂戴。この子馬みたいな可愛い馬を」

「お姫様に馬は似合わないよ。その代わりにもっと綺麗なものをやるよ」

「それなら私に櫛を頂戴。お母様の櫛はとっても綺麗なよ。漆で

綺麗な時絵が書いてあるの。あんな櫛なら私も欲しいわ」

「分かったよ。俺が大人になったら櫛を買ってやる。馬にも乗せてやる。だからこの子馬は若君に譲ってくれ」

「ええ、我慢するわ。でも、櫛も馬に乗せてくれるのも忘れないでね。約束よ」

約束。そうだ、その時少年とかわした約束。今思えば、あの少年は康行ではなかったか？

そして私は都人になる事を夢見て暮らし、厩に近付くことは無くなった。少年の事も忘れてしまった。もうあれから十年ほど経つだろう。

康行は私に櫛を買ってくれた。馬にも乗せてくれた。私がすっかり忘れていた約束を、康行は果してくれた。

私はお姫様のようにではなく、薄汚れた下着姿で、康行は返り血を浴びて異様な状態になっているけれど、それでも遠い日の約束は今、果たされたんだわ。

馬の首にしがみつきながら、私は康行を仰ぎ見る。真剣な顔で馬を操っている。もう、震えてはいなかった。

馬はまるで飛ぶように田園の中を駆け抜けていく……

しばらく走り続けると目の前に桂川が見えて来た。意外と都は近かったようだ。橋を渡ると向こうに馬の集団が見えた。奥には男車の牛車もある。私達の姿を見ると、牛車の中から大将様が顔を出した。

「康行！ 花房は無事か？」

大将様がお声をかける。

康行は慌てて馬から降り、私を抱き下ろしてくれた。そのまま地面にかしこまる。大将様は私の姿を見ると

「おお、無事であったか。康行、よくやった。花房はこちらの車に乗りなさい。その姿では身体が冷える」

そう言って私にご自分の着物をはおらせて下さる。

「大丈夫です。それよりも、検非違使の役人に、以前越後の守の娘と結婚話の持ちあがった方はおられませんか？ 鳥辺野送りにかわる方で」

私は大将様にお聞きした。

「ああ、そういえば以前そんな話があったな。たしか私の叔父の元につかえている男だったと思うが」

「越後の守の娘が内通者でした。彼女の父君が都に戻れなくなり、彼女の結婚もその役人に一方的に流されてしまったようです。そういった事が重なって、大納言家や中納言家に恨みを抱いていたようです」

「そうでしたか。これから康行に場所を聞き、あなたをさらった者

達を取り押さえに行かせます。もう、大丈夫なのですよ。安心なさい」

「違うんです。越後の守の娘は、桜子さんは、ただ、捕まえて処罰を受けるだけではダメなんです。父君が都に戻れなかった苦しみ、結婚を裏切られ、誇りを踏みにじられた苦しみを、中納言様やその役人に知っていただかなければ、何らかの遺恨をまた誰かにつなげてしまうと思うのです。彼女を処罰しただけでは解決しないのです。彼女のような苦しみを持った人が、きつとほかにもいるんです……」

話しの途中で、私は足元が怪しくなるのを感じた。薬を飲まされ、寒い中を下着姿で走りまわり、馬の背にゆられ続けていた緊張が、緩んできたに違いなかった。私はそのまま気を失ってしまった。

気が付くと私は中納言家の局の自分の部屋に寝かされていた。そばでやすらぎが見守っていてくれたようだ。

「ご気分はどう？ 顔色は随分良くなったみたいだけど」
やすらぎが私のひたいに手を当てて聞いてくれた。

弱っていた身体を寒風にさらしていた私は、あの後ひどい熱を出して、一晩中眠っていたらしい。

「姫様の典薬の助（医師と薬剤師を兼ねた役目）が、皆に解毒のお薬を調合して下さったの。あなたには熱さましの薬も用意して下さったのよ。今夜には姫様もお戻りになれるわ。何か召しあがる事が出来る？ あなたはあまりお食事もとらずに薬を飲んでしまったから、一層深く影響を受けてしまっていたの。何か食べれば回復が早まるそうよ」

そういえば空腹感が襲って来た。昨日から殆んど物を食べてはいなかった。私は用意されていた食事をありがたく頂いた。確かに身体は回復しているのが分かる。

「桜子さんは？ 他の一味とともに取り押さえられたのかしら？」

やすらぎの表情が曇る。

「桜子さんは……。自害なさったそうよ」

自害！

「検非違使の役人が駆け付けた時にはすでに自分の喉を刺してこときれていたそうよ。彼女は自分の誇りだけは守り通したかったみたい」

やすらぎの伏せた眼にはうっすらとした涙が光っていた。

自由

桜子以外の一味は、侍崩れの郎党達と、京わらんべと呼ばれる、ならず者ばかりが捕まった。

彼らは私の脱ぎ棄てていった衣を持って、「女房の衣装目当てに誘拐した」と言っているそうだ。検非違使も取りたてて尋問を強いたりはしていないらしい。康行が賊を切り捨てた事さえ、もみ消されていた。

裏では前帝やそれに群がる不遇な貴族達が暗躍しているに違いないのだが、朝廷内の複雑な勢力関係を皆が気にしているので（それは表面から見通すことはできない）そういった貴族達に役人が深くかかわることは無い。

ましてや前の帝であらせられた方に、ただ人の役人達が何をできるといふのか。結局、真実が世の中に露呈することは無いのだ。桜子は何のために大胆な事を企てた挙句、死なねばならなかったのだらう？

桜子の自害は私にとって十分衝撃だったが、同時に桜子への悔しさがかみ上げてもきた。

もう私が何を思おうとも桜子の心に届くことは無い。

桜子さん。あなたは死ぬべきではなかった。死んではいけないかったわ。本当にこの世に恨みがあるのなら。私へのねたみと、憎しみがあるのなら。これじゃ、なにも世の中に届いていないじゃないの。

何故、命あるうちに私にもつとこの世の不幸を知らしめなかったの？ 大納言様達にはつきりとおっしゃらなかったの？

しかし私は考え直す。私達女人が、本当に男君の方々に物を伝える事なんて出来るのだろうか？

もしも本当に桜子さんが、あの検非違使の役人に心の内をぶつけるのなら、越後国司の娘として彼の邸に乗り込むしかないだろう。そうすれば気のふれた愚かな女が男君の元へ乗り込んだと都中の笑いものになり、彼女も彼女の一族も、誇りの欠片も失うような事になるのかもしれない。

まして大納言家にいたつては、彼女の一族の存在すら、もみ消してしまいかねない。彼らの傲慢な耳には、どんなに私達が声を立てても届くことは無いだろう。彼女の胸につかえた心を吐き出すにはあまりにも犠牲が大きすぎるだろう。

御仏は女人は生まれた時から罪を背負っているのだという。その罪ゆえに自らの心のままに生きることができないのだとか。そんなにも罪深い女人を、何故男君は求め、利用しようとするのだろうか？

桜子さん。あなたは結局この世で自分の心を誰にも伝えることはできなかった。私を除いては。

私はあの時のあなたを決して忘れない。憎しみをたたえて立ち上がったあなたを。私だけはあなたを理解するわ。

それでいいでしょう？

「やすらぎ。今日の合奏の他に、私に独奏で琴を弾かせてもらえな
いかしら？」

私はやすらぎに頼んだ。

熱の下がった私は縁に出て康行と会った。康行はだまりがちでそ
れでも私に櫛を返してくる。

「ありがとう。昔の約束を守ってくれて」

私は自然に礼が言えた。

「この後若君に会うそうだな」

康行はさびしげな表情で言った。

「ええ。異例な事だけれど、大将様は今朝、こちらに残られたの。
体裁を取り繕うために空の牛車は返したけれど。このあと私と会っ
て、夜には三日夜の宴にお出になられるわ」

「若君の妻になるのか？」

康行は直接的に聞いてきた。その方が康行らしい。

「いいえ。その話はお断りするわ」

私は言い切った。

「無理をする事はないんだぞ。越後の国司の娘に何を言われたかは
知らないが、お前が若君に認められたのは他でもない。お前の心根
が若君や姫君に通じたからだ。お前は周りに流されるだけの女じゃ
ない。自分の意思で都に入り、自分の言葉で姫君の心を動かし、女
房になった。そして姫君のために命をかけて、若君の心さえも慮っ

て、敵の手から逃れたんだ。お前は胸を張っていい。これはお前がつかんだ当然の権利だ」

康行はそういった。そう言ってくれた。私の行動を間違いでなかったと認めてくれた。その気持ちが嬉しい。

「そうかもしれないわね。でも、私は妻の座はいらないわ」

「どうせ、世間はお前を若君の情人として見るようになる。お前は若君と密接に関係したし、昨日は若君も隠し立てすることなく、お前をあつかった。車に乗るように指示を出し、御自分の着物を着せかけた。あれですでお前は若君の恋人としてみなされる。お前が何を言おうと世間の目は決まってしまうんだ。だったら妻として認められる方がずっといいはずだ」

それは分かっている。おそらく大将様もそれを承知で私をそうあつかったのだ。やはり女の扱いが巧みでいらっしやる。まるで詰め暮の様に女人達のいきつく先を決め、追い込んでしまう。

しかしそこに悪意は無いのだろう。むしろ自分の誠意を女人に与える手段だと信じて疑わずにいるに違いないのだ。それが女人にとっては時として傲慢に見えたとしても。

「いいえ、違うの。私は根っからのじゃじゃ馬なの。世間の言うとおりになんて生きられないの。身分が低いといわれれば、女房になりたくなるし、田舎者と言われれば都で暮らしたくなる。

大将様の妻になるのが荣誉だといわれれば、そうはなりたくなくなるの。私は誰の物にもならないわ。私は私。この都で、私は自分の力を試したいのよ。姫様のもとで、どこまで世間に逆らって生きら

れるのか力を出しつくしてみたいの」

「本気で若君の申し出を断る気か？」

「本気も本気。私には高い身分もない。でも、卑屈になつて誰かの世話にすぎろつとも思わない。私は都で一番自由な女になるの」

「そんなか弱い女人の身で、どんな自由が得られるつていうんだ」
康行はあきれ顔だ。

「心の自由よ。本当なら誰もが持っている自由よ。きっと桜子さんが一番手にしたかつたものよ。彼女はあきらめてしまったけど、私はあきらめない。この心だけは手放さないわ」

「まさか、お前、尼になる気か？」

尼になれば男女の交わりは禁止される。勿論結婚もできないし、親子の情も、友情さえも否定されてしまう。生きながらにしてこの世の人々と縁を切ってしまう。それは確かに心が自由かもしれない。そして孤独だ。

「違うわ。私は俗世に生きたまま、この世を愛したまま、自由に生きるの。私だけの生き方よ」

私は桜子さんとは違うやり方で、この世の中に逆らつて見せる。あらためて、そう、決心した。

私は大將様と会つた。扇を使わないのは勿論、几帳を隔てる事さ

えしなかった。それは私には必要がない。正面から面と向かって大将様の目を見ていった。

「結婚のお申し込みは、この場でお断りさせて頂きます」

私に歌は似合わない。はしたなくてもいい。田舎くさくてもかまわない。私は自由だ。

「大将様のお気持ちはともうれしいけれど、私は妻にはなれませんが。たとえ姫様がいらっしやらなかったとしても」

大将様は少し微笑まれながら

「そう、おっしゃるんじゃないかと思いましたよ」

と言って、私に文を差し出した。良く見ると私が大将様にお送りした文だった。

「これはあなたにお返ししましょう。ほととぎすは藤に鳴く時を聞いたりしてはいけなかった。しかし私はあなたをあきらめませんよ。あなたの心の池を波立たせるまで、気長に構える事にしましょう。それまでは私達には美しい友情が一番似つかわしい。しかし康行には負けません。薄衣一枚のあなたを抱きかかえるような真似は二度と彼にはさせませんから」

そう言うてにっこりなさる。

「私もあのお文をお返しします」

私は懐から文を出そうとしたが

「それには及びません。いつか私はあなたの花を開かせることが出来るかもしれない。それまで楽しみにとっておいてください」

大将様は強気な、少しいたずらっぽい笑顔をお見せになった。

「今宵の琴は、お二人のために心をこめて引かせて頂きます」
私はそう、はぐらかした。

寢所のひさしの方が騒がしくなってきた。男車がお着きになるといのである。どなただろうか？

「ああ、お着きになったようですね」

そう言つて大将様は立ち上がる。皆がひさしへと向かつて行く。何故か中納言様や、北の方までもがお車を出迎えた。

良く見ると、それは大将様のお車だった。見慣れたお車の中から現れたのは、見知つた上？達と姫様だった。今朝お返しになった車に姫様がお乗りになっていたということとは……。

「そうですよ。姫君は大納言家にいらしたのです。変な所にかくまわれるよりは、よほど安全だろうと思つてね」

大将様は私に説明なされた。

ああ、お二人はすでに真の御夫婦でいられたのか。だから大将様は私の事を姫様に御相談出来たんだ。姫様も今までの一部始終を全て知つてらっしゃるんだわ。

大将様はお車に近づくと、姫様を両手で抱きあげて差し上げた。これは本来、帝の御皇女様が貴族の家に御降嫁される時に行うことである。大将様は姫様をそれほど特別にあつかつて下さつたのだ。中納言様などは「おお」と声を洩らされたし北の方にいたつては涙をこぼしていらつしやつた。

私は頭を下げながらも思ってしまう。まったく大将様は女人の扱いに長けていらっしやるんだから。

一心地つくと姫様が、私をお呼びになった。

「あなたには本当につらい思いをさせましたね。桜子はあなたと同室だったのでしょうか？」

やはり全てを存じているようだ。

「桜子さんは、私たち女人の水鏡だったのでしょう」私は答えた。

「あの人は、私達の不満や苦惱、戸惑いを映してみせる水のような人でした。そして私はそれを覗いてしまいました。でもそれは決して真実だけではありませんでした。彼女の心は波打っていて、その姿は歪んでいましたから」

「あなたにはそれが分かるのね。あなたは素晴らしい人だわ。私はあなたに何をして差し上げればいいのかしら？」

私はただ一つ、本当に欲しい物を答えた。

「私が欲しい物は、一つだけ。心の自由で御座います」
姫様には伝わるのであろうか？この思いが。

三日夜（前書き）

「身代わり編」ここまでです。

三日夜

三日夜の宴は華やかに行われた。数々のご馳走が用意され、女房達は華やかに着飾り、従者や、下男、下女にいたるまでが振る舞い酒に酔っていた。

室内は美しく飾られ、大勢の貴人たちが酒を酌み交わしている。この場にふさわしい晴れの歌や詩が詠まれ、それに合わせて管弦の調べが奏でられる。宴もたけなわだ。

続いて女人の琵琶や琴が合奏され、私も皆と音を合わせていく。そしてやすらぎとの合奏が続いた。

そして私の独奏となる。大将様と姫君様の許可を貰ったの演奏だ。私はこのためにここにいるのだ。

初めの音には自分の心を乗せた。軽やかに、一つ調子に。都への憧れ、様々な出会いがもたらしたときめき、都のにぎわい。

だんだん音は穏やかになる。姫様の優雅な御様子、結ばれる友情、穏やかな日々。優しい調べのうちに時折入る穏やかならざる音。桜子の隠された心。

音が変わる。激しく、強く。桜子の苦しみ、悲しみ、怒り、そして、求め続けた思い。琴の弦が切れんばかりに私は奏でる。私に向けられた憎しみを奏で続ける。

人々が息をのむのが分かる。衣はずれ、髪が乱れようと私は全

身で弾き続ける。誰もが耳を傾けている。

やがて音は清浄なものに変わる。弱く、たどたどしいが、細やかな調べ。何かを切々と求める調べだ。

そして音はたおやかに初めの音へと帰っていく。軽やかで一つ調子な音。だが、初めとは明らかに違った印象を与えているであろう音。私はそつと、最後の弦をはじいて演奏を終えた。

誰もがため息をつき、さざめくような声を漏らしていた。きつと伝わった。桜子の心は今ここで蘇り、終息を迎えたのだ。私が出れることはここまで。後はそれぞれの心の中にこの音は生き続けられるだろう。

宴はまた晴れやかな華やかさに満ちていく。桜子の憎しみはそこにはもうない。

宴の終わりに私は姫様に呼びとめられた。

「花房。私はあなたに何をすればよいのか分かりました。あなたはすばらしい演奏家ね。奏で続けなさい。続けなくてはならないわ。あなたの琴は百の言葉に勝るとも劣らないわ。あなたは私達の大切な何かを伝える事が出来る。あなたの心は自由でなくてはならない。あなたの琴は自由なままに奏でられなくてはならない。私はそれを守り続けましょう。あなたは奏で続けるのよ」

伝わった。少なくとも、姫様には私の思いが今はつきりと伝えられた。これこそが私の願うところだった。

「奏で続けましょう。一人でも多くの人の心に届くように」

女人の言葉は世の人々に届けることは難しい。だから、心揺さぶられる歌は流行歌として伝え続けられていく。

私は琴の音でそれを伝えよう。それを伝えられる心を待ち続けていよう。いつでも奏でられるように。

宴が済むと自分の局へと私は戻った。桜子がいなくなったので今では一人部屋になってしまった。何だか部屋ががらんとして見える。

ふと足元を見ると、戸口に近くに手折られた咲いたばかりの白い梅と、折りたたまれたみちのく紙があった。手紙だろうか？

普通、女人に贈られる手紙はうすよつと呼ばれる、薄く、淡い色の付いた美しい和紙が使われる。真っ白な厚手のごわごわしたみちのく紙で手紙がよこされることは無い。開いて見ると力が入り過ぎて、やたら太いばかりの文字が飛び込んできた。こんな手紙をよこすのは康行しか思い浮かばない。

中には歌が書かれていた。あんなに苦手なはずの歌が。

「我が駒が足を止めたる琴の音は初花よりも深く匂へり」
いい演奏だった。良くやった。

真つ直ぐでひねりのない、康行らしい歌だと思った。私の琴はこの梅の香よりも深みがあるらしい。

おそらく康行の居る所にまで琴の音は届いていたのだろう。私の演奏はよほど良かったらしい。私は一人、笑みをこぼした。一人部屋の虚無感が少し和らいだ気がする。康行なりに気を使ったのだろう。私も返歌を書いた。

「みちのくの ゆきとみまがう しらうめの かおりたつよに ころなくさむ」

今度の手紙はうすように書いてね。

みちのく紙なんかには和歌を書いてしまふ康行に、ちよつぴり皮肉を込めたのは照れ隠し。康行はこれからも私に手紙を書いてくれるだろうか？ 会った方が早いと、また縁に近寄って、私を呼びとめるだろうか？

散々な目にも会ったけれど、都暮らしも悪くは無いわ。私は梅の花を眺めながらそう思っていた。

翌日、康行はご機嫌斜めだった。彼にしてみれば歌に花を添えて人に贈るなんて、一世一代の決心がいる事だったようだ。

「お前は本当に何にも分かつちやいなんだな。俺みたいな男が雅やかな真似なんか出来る訳がないんだ。もう二度と歌なんか送るもんか。どうせ若君と比べられるのがオチだ」

そう言っつてすっかりむくれてしまっつ。

それを見て私は逆にご機嫌になっつてしまっつ。知っつてるわ、そのく
らい。私が大將様からお歌を送られてるのが気になっつて、わざわざ
慣れな歌を読んだのよね。だから私は嬉しくて、次の手紙も書
いてほしいと暗にほのめかしたのだけれど、康行は気付いてるの
かどうか？

「ニヤニヤして、何を考えてる？」

そんな事言える訳ないじゃないの。

「別に。あんたの歌の読みぶりをちよっと思ひ出ただけよ」

「もう絶対に歌なんか送らないからな！」

「怒らないでよ康行。あの歌はいい歌だっつたわ。ありがとう、私の
琴を褒めてくれて」

「ふん、歌なんか書かなくてもこうやっつて言葉でかわした方がずっ
と手っ取り早いや。都のやり方は性に合わない」

そうね。本当にそうだと思っつ。でも、都で暮らす女人には、自分
の意思を伝えるためには、こんな方法しかないんだわ。歌を歌い、
琴を奏で、しぐさ一つでものを伝える。私はそんな世界で、琴の音
一つで立ち向かおうとしてるんだわ。それは苦しいことかもしれ
ないけれど、康行や、姫様、やすらぎ、大將様が見守っつていてくれ
れば、勇気を出してやっつていけそうなきがする。

「康行。私、都で生きるわ。どこまで頑張れるか分からないけれど、

姫君様のもとで、粘れるだけ粘ってみる。当分郷里には帰れないわ。あんたはもうすぐ馬の世話に戻るんでしょう？お父様達に伝えてね。私はここで生きていけるって」

康行はむくれ顔を少しだけゆるめて、こつくりとうなずいた。

「俺もすぐに都に戻るさ。こんなじゃじゃ馬危なっかしくてほっとけるもんか。若君にだって気をつける。あれでなかなかお人の悪いところもあるんだからな」

そう言って康行は侍所へと帰っていく。

今度会う時、私は、都に染まらずにいられるだろうか？

染まらぬように精いっぱい逆らって生きていきたいと思うけど。

私はそう思いながら康行の背中を見送った。

三日夜（後書き）

次はちょっと無理やりだけど「御所編です」

噂

姫様の三日夜の宴からふた月。私の事は、すでに都中の話題になっ
てしまっている。

中納言家のとんでもない、やんちゃ女房と言えば、私の事。ある
いはこの春の除目で近衛の大将に御出世されたばかりの、大納言家
のご長男にまわりついた、たちの悪い女君、と言ったところか。

そう言われても仕方がない。この三カ月は、御世辞にも平穩無事
な日々だったとは言えなかったのだから。

大将様との事だつて、世間が言うような仲になった事なんてない。
たった一度、お歌をいただいただけだ。

それにしてもこのふた月の間、都人の口さがのない事と言ったら
！噂話の質でいったら、故郷の武蔵の国の方がよっぽどマシだった。

初め、私はかの、悪評高い前帝一派にさらわれた悲劇の女房とし
て持ち上げられたらしい。実際、それは事実だし。

問題はその後だ。私は大将様と、姫君様のご婚礼の三日夜の宴で
琴を弾いたのだが、かなり、斬新で、独創的な弾き方をした。全身
で、感情をこめて、髪が乱れようと、裳が、ずれ落ちようとま
まわず弾いた。

これに都人の意見は真つ二つに分かれたらしい。

これまでに誰も聞いた事のない、初めての調子、初めての音色。

天女が弾く虹の琴のようだと云う、称賛の声。

そして、心を乱す、乱暴で、独りよがりで、もののけがついて人を惑わしているようだという、非難の声。

そんな声が渦巻く中で、私は思い切った行動に出た。わが身を隠す事をやめたのだ。

貴人に仕える女房と言うものは、屋根の下で暮らし、邸の外の者にはなるべく姿を見せず、御簾の中に几帳を立てて、その影に扇で顔を隠して暮らすのが、しとやかで恥じらいのある生き方だと世間では言われている。特に都では。

しかし私はそれを良しとしなくなかった。その考え方を否定して生きる覚悟を決めた。堂々と顔をさらけ出した。

当然それは、あっという間に噂となって広まった。私のそれまでの行動にも尾ひれがついた。

実は私はさらわれたのではなく、自ら前帝達に近づき、薄衣一枚の姿で誘惑して金品をだまし取っていたとか、本当は姫様を恨んでいて、しびれ薬を盛ろうとしたとか、大将様に姫君様の悪口を吹きこんでいるとか。

しまいには、あの、宴で琴を弾いた時は、天岩戸にこもったアマテラスを誘うのに、胸元を広げて踊り狂った浮かれた女神のように、半裸になって弾いていたとまで言われてしまっている。

なんでこんなに言いたい放題言われるのかと言えば、なんてことはない、私の父の身分が低いからだろ。

人の噂をある程度信じるなら、私なんかよりも凄い事をしている女房なんていっぱいいる。

実家に金銭的な余裕がなければ、自ら儲け話を振りまいて、貧乏公家に金を貸して蓄えを増やしている人もいるらしいし、地方の受領に情を通じて経済的に援助を受けている人もいるらしい。現実問題として、女房暮らしは華やかな分手当もいいが、支出も結構かかるのだ。

それまで私は身分は低いが、金には困らない父のおかげで、そういうことにはまるで疎かったのだが、都暮らしが長くなるにつれ、そういう裏事情も理解できるようになってきた。

そんな都で、上京したての小娘が、親の金の力で女房に成り上がり、雲の上人であるはずの姫君様のそばにお仕えし、その、背の君である大将様を恋人にして（これは誤解なのだが）二人の後ろ盾をいい事に、好き勝手にふるまっているのだから、そりゃあ、恨みもねたみも買って当然なんだろう。

だから私の噂が、都中に広がっても仕方のないことだと思っただし、姫君様と大将様の後ろ盾も私は大いに利用させてもらって、堂々と顔をさらしたまま、姫様のお世話をし、暮らしを整えて差し上げ、琴を弾きならしていた。

ところが、まさかその噂が、今上の帝のおられる、九重の宮中のかなた、御所の奥深い御簾のうちにまで届いていようとは思っても

みないでいたのだ。

その夜、大納言の長男である近衛の大将は、久しぶりに御所の宿直をしていた。

中納言家の一の姫と結婚したばかりの新婚と言う事で、しばらくの間は日を開けずに中納言家に通っていたため、帝の身をお守りする近衛の大将と言う身分に出世したばかりだったにもかかわらず、ふた月の間ほど宿直は免除してもらっていたのだ。

大将はしばらく、私的な時間に主上とお目にかかる事もなかったので、その大将が宿直していると聞きになると、主上（帝）は早速、大将を暮のお相手にとお呼びになられた。

前帝は「訳あり」で失脚なされているので、今上の帝はまだ十九とお若くていらっしやった。

だから、年の近い一つ下の大将などは、御公務から離れられると良い話し相手になるらしく、管弦の遊びのお相手や、宿直の夜の話し相手などには、よくお呼びつけになるのだ。今夜は久しぶりの暮のお相手らしい。

大将の方でも、主上からのお誘いは嬉しかった。暮のお相手も楽しみである。

大将は幼い時から主上の元に童殿上して、主上とともに手習いを受けて育っていた。

おそらく父である大納言が、前帝よりも当時東宮だった主上に目をつけて、自分を親しい位置に据えたに違いない。実際、そのおかげで大將は今の地位を手に入れている。

それはさておき、幼い頃からまるで乳兄弟か、幼馴染のように育った主上と過ごす時間は、大將にとっても楽しいものがある。身分は違えど、腹を割った親友に会うような心地さえするのだ。

貴族たちの世界はとてせまい。まして上流ともなれば、付き合いのある人間は、皆、血縁が誰かに突き当たってしまうほど世間が狭い。その中でさまざまに接するのは、むしろ召し使う身分の下の人間たちだ。

貴族の生活とは昼夜問わず、人々に囲まれた生活でもあるのだから。人がいなければ成り立たないのだから。

彼らは自分達の地位を守るためにも、長年慣れ親しんでしまう心情的にも、召し使う者たちを懸命に養っていく。

召し使われる者たちも、そんな彼らに心を寄せるし、まさに手足となつて働いている。

実生活ではあまり顔も合わせる事もなく、関係も希薄になりがちな親類縁者や、離れて暮らす父、母、兄弟など、政治的な風向き一つでいつ、心が変化するか分からない同じ血筋の人間よりも、時として、より深いきずなが生まれることだつて少なくは無い。

恋や友情だつて当然生まれる。主従関係とは奥の深い物なのだ。

それはたとえ、帝と臣下であつても変わりはないらしく、主上と大将の関係は、まさにそうだったものであるらしかつた。要するに二人は気が合うのだ。

そんな気の合う主上と、大将は久しぶりの暮で主上に押し気味の展開をしていた。遊びで花は持たせない。それが主上との、昔からの約束事である。

「うづむ。腕をあげたな。ここの隅を取られたのは痛かつた。ここの地を取られまいとムキになり過ぎたかな？」

「婿入り先の中納言殿は暮の名手でいらつしやいますから。お相手をしているうちに、私の腕も上がったようでございます」

「なんだ。宿直もせずに暮の特訓をしていたのか？ これではかなわぬはずだ。それでは夫の務めも果たしているか分からないな」

主上は負けを認めて暮石を器に戻しながら笑つた。

「新婚と申しましても、妻はまだ、十五で御座います。まだまだ形ばかりで、子供の遊びのようなものですので、中納言殿と暮を打ちましたり、女房達に話し相手になつてもらつて居るのですよ」

大将がそういうと、主上がまるで待ち構えてでもいたかのように視線を合わせて来た。なんだ？

「そうそう、中納言家の女房と言えば、大将は早速、お気に入りのお房を見つけたそうじゃないか。まだ新婚だというのに、偉く手回しが早い事だ」

主上はそうからかつて笑われる。

花房の事か。これはちょっと厄介だ。普通の女房を落とした後なら戯れ話を主上と楽しくできるところだが、花房は事情が違う。こんなところはまだ噂が広まっているとは思わなかった。

「別に手などまわしていませんよ。実務的なやり取りなどを言付かってもらっている、普通の女房の一人です」

「普通かな？ 何でも大変なやんちゃぶりで、顔も隠さずに歩くそうではないか。しかもたいそう面白い琴の弾き方をするのだろうか？」

噂ほどの辺までねじれて伝わっているのだろうか？ あまり品のない事もいいかねる。

「それほどでもありませんでしたよ。やや、斬新ではありましたが、美しい、良い音色で御座いました」

「良い音色か。本当は大将が手とり足とり教えたのではないかい？ 衣を着せかけた仲だそうじゃないか」

大将は返事もせず、曖昧な笑い方をした。自分は宮中では名うての色事師、女人相手ならそんじょそこらの男達には負けないという自信がある。そういう自分が結婚まで持ち出したのに、身分の低い、わずか十六の娘に袖にされたとは絶対に知られたくない。あまり突っ込まれたくない話だ。

「お前は笛が得意だが、その琴の音と合わせた事はあるのか？」

「いいえ、そのような機会がありませんので」

大将はなるべくそっけなく答えた。

「それはもつたいないな。私はその琴の音と、お前の笛を合わせた演奏を、ぜひ、聞いて見たくなつた。今度、後宮で女雅楽の演奏をしたいと思つているのだ。その、中納言家の女房も殿上させて、お前の笛と合わせてみよう」

主上は好奇心丸出しで、面白そうにおっしゃつた。

これは厄介な事になつたと、大將は心の中で齒がみする。

好奇心

主上のお戯れに、大將はややうつとうしさを感じた。本当のところ、花房を宮中に連れて来たくはないのだ。

まさか花房が自分の顔を潰すような事は無いのだろうが、小娘に気を回す姿を主上に勘づかれたくもない。

それに自分が花房に興味を持ったのは、主上と同じくもともとただの好奇心からだった。

金持ちとはいえ極端に身分が低い父を持つ娘が、大胆にも中納言家に入り込んで、一の姫の最もそばに仕える身となっている。しかも姫のお気に入り。さらには琴の名手だという。これだけでも好奇心をそそられた。

さらに、馬の世話を任せている朴念仁な康行が、その少女の行動に振り回されている。目が離せず、気がそらせず、わずかな事でもうるたえているのが分かった。これは面白そうな娘だ。

実際に会ってみると、田舎者らしく、粗忽で無遠慮で気が強い、そのくせ、おおらかで、慕わしそうな、明るく人を引き付ける、意志の強さを持った娘だった。

女君と呼ぶには、まだ幼さが残るような娘なのに、明るい何かを一つ信じ、それを真っ直ぐに貫こうとする強い輝きが感じられる。そこには不思議な信頼感があった。

役目がら、宮中にいると、沢山の女房達に囲まれている大将としては、ちょっとした恋のやり取りは日常生活のうちだった。

若い女君には自分の寛容さと大胆さを見せつけて、華麗な歌を送っては時に冷たく、時に情熱的にふるまって見せる。年上には少し背伸びをしているように見せ、そのくせただどしい歌を細やかに、まめまめしく送っては、丁寧な気遣いを見せたり、甘えてみたりする。

そうすると女君たちは、自分との程よい距離感を旨く見つけ出して、自分をくつろがせてくれたり、勇気づけてくれたりする。目上の方々のいる席で、さりげなく褒めてくれたり、話がまとまりやすいように助けてくれる事もある。

朝廷では正論を交わして、自らの意見を通さなくては潰されてしまう恐れがあるが、後宮の行事や、私的な宴の席では、若い自分あまり強くものを言う訳にもいかない。そんな時に自分に有利な雰囲気を作り出してくれる女君たちの存在は、大将にとっては必要不可欠だった。

そんな暮らし方をして来た大将に、信頼感を寄せられそうだと思わせる少女。その真っ直ぐな気性は都の女君には無いものだった。

何もかもに恵まれて見える大将にも、苦悩はある。父親の作り上げた地位に対する重圧だ。

自分は長男である以上、父の作り上げて来た現在の権力を、受け継がなくてはならない。自分達の一族で、都を牛耳続けるのが、我々の悲願だ。自分はその中心とならなくてはいけない。

そのために、幼い頃から努力はして来た。人に認められるように、遠い大国の最新の政事を学び、これまでの朝廷の出来事を学び、季節の行事や、管弦の遊びにすら、手を抜かなかった。

そうやって自分を固めた大将が、何よりも必要としているのは信頼して話す事が出来る、身近な人物だ。

主上は御信頼申し上げている。身分から御自分の思うようにならぬ事も多いだろうが、それでも大将の事を全力で守ろうとして下さるに違いないと、大将は信じている。

父もおそらくはそうであろう。長男の自分への信頼は、他の兄弟や役人たちよりは持って下さっているようだ。当然、生みの母からの愛も感じてはいる。

では他に？ と、考えると、乳兄弟と、康行ぐらいしか思い当たらない。他の家来たちもそれなりには信用しているが、安心して信頼できるかと言えば、物騒な今時のこと、多少の不安が付きまわってしまう。

それなのに、花房には信頼できそうだという勘が働いたのだ。

花房を妻にしても良いと思ったのには、勿論、一の姫を守ろうとする心根に対する礼の気持ちもあったが、これからも信頼を寄せられそうな女君と言う、心づもりがあったからだ。だから、彼女には自分が与える、最大限の条件を告げたのだが、何と、断られてしまった。そんな予感はあったのだが。

容姿にも、恋の手管にも自信はあった。まして、最良の条件を告げたはずだった。

やはりこれは普通の女君ではなかった。しかも、我々の顔を立て、一の姫の命を守ろうとする、物怖じをしない女人。

まだ年若いというのに、何という手ごたえだろう。身分はいやしなくても、この真っ直ぐさ、この自尊心の高さは、宮中の女官たちにも、決して引けを取ることはあるまい。

これほどの手ごたえ、これほどの矜持。これは強引には奪えない。そんな事をすれば、彼女の最も素晴らしい部分を失ってしまうだろう。

しかも彼女は康行を意識している。彼が送った櫛をその身から離さずにいる。悔しいが、彼女にとって私は康行と同列、いや、もしかしたらその下に位置しているのかもしれない。彼女の心のはかりにかげられれば、身分など何の役にも立たない。花房とはそういう女君なのだ。

その花房に、主上は好奇心を向けられた。お会いになれば、彼女の持つ、独特の何かに気付かれるかもしれない。自分がそこに太刀打ちできずにいることにも。ましてあの琴の音を聞けば……。

大将は気が気ではなかったのだ。

「その女房は身内を頼って上京しているのか？」

主上は脇息に持たれながら、のんびりと聞いてきた。

「母親の妹が、御所勤めをしているそうでございます。梅壺の更衣につかえる女房で、命婦と呼ばれているそうです」

「梅壺か。しばらく足を運んでいなかったな。女官に言つて、その命婦とやらに話を通しておこつ。女雅楽まではまだ、十日あまりある。その女房にはそれまで梅壺に滞在させるがいい」

「本当にお呼びになるおつもりですか？」

大将は未練がましく聞いた。

「なんだ？ 大将はいくらでも聞ける琴だろうが、私はこうでもしなければ聞けないというのに、嫌がるのか？ これは余計に聞きたくなるな」

「彼女の身分では、役人の許可が下りないのでは？」

「親はともあれ、本人は今、中納言家の女房だ。お前の後ろ盾もある。そういうことはお前の方が得意だろう。その、命婦の身の回りを世話する者として、宮中にあげればよい。雅楽の日には私が呼ぶ」

そういつて主上はすっかりその気になつてしまわれた。こうなると、大将は花房を宮中に上げない訳にはいかない。

「お前も笛の練習をしておけよ。女君の前で恥はかきたくあるまい
そういつて主上は楽しげに笑われた。

いつものように大将様が姫君様の寝所にいらっしやった晩に、私は姫様がたの御前に呼ばれた。いつものようにお二人お世話をしようとしたが、大将様がお話があるとおっしゃった。

「実はお前に宮中へ上がって欲しいのだ」

あまりの急な話には私はピンとこなかった。宮中？ あ、御所の？ そばにいたやすらぎさえもが動きを止めた。

大将様は事の次第をかいつまんで説明された。私の噂が、そんなところにまで伝わっているとは思わなかったので、私もびっくりしてしまう。

「お前の叔母には明日、宿下がりさせろから、お前の叔母のもとで支度を整えろといい。後宮の中の事は叔母が教えてくれるだろう。私も決して詳しくは無いのでね」

大将様は淡々とおっしゃるが、私にとっては一大事だ。ただ人中でもいやしい私が、後宮へ上がって琴を弾く？

私のような者にとっては御所は天の上にも等しい場所だ。ましてその奥深くの後宮なんて、いくら身内が勤めているとはいえ、まるで別世界だとばかり思っていた。上がるどころか、門前に近づく事も恐れ多いとっているのに。

「私と中納言殿が後ろ盾になっているのだ。お前は余計な事は気にせずに、と言っても、お前が人目を気にしないのはいつもの事だが、思うがままに琴を弾いてくれ。主上もお喜びになるだろう」

そういう噂を耳にしてのご所望じゃ、どのくらい真面目に聞いてもらえるか分からないけれど、まさか帝の命を断る訳にもいかない。あんまり恐れ多すぎる。

そんな訳で私は全くの突然に、御所に上がる事になってしまった。これで世の人々は、一層私の噂を面白おかしく広めてくれるんだろうなあ。

「あなたのお父様に、雅楽の日のご衣裳と身の回りの物をお願いしなければなりませんね」

叔母は突然の事にうるたえながらも、私の仕度を手伝ってくれた。

「ご衣裳は前日までに役人の手元に届くように手配しましょう。お化粧道具は今の物で事足りると思いますよ。あなたの身元を証明する書面は、明日、御所で、役人に渡しますから、忘れないようにね」

さすがに普段御所に勤めているだけの事はあつって、速やかに支度が整って行く。

「こんな突然の事に、色々手をまわしていただいて」

私は叔母に礼を言おうとしたが、叔母がさえぎった。

「いいえ、とんでもないわ。これは私がお仕えする、更衣様にとつても、大切な機会になるの。ここ最近では中宮様（皇后）のご威勢がとても強くて、他の女御様は皆、かすみがちだったし、まして更衣でしかないうちのお姫様には、長らくお渡りもなかったのよ。あな

たの事がきつかけになって主上が梅壺にも、こまめに通われるようになったら下されば、こんな目出たい事は無いわ。あなたには是非、頑張ってもらわないと」

頑張れって、言われたって、あちらは噂話の好奇心で、私を見せものように考えてるっていつのに、私が何を頑張ればいいのか。そんな期待を背負わされても困るんだけど。

そうは思ったが、お世話になってる以上口にも出せず、私は叔母に言われるがままにあれこれと準備を整えていった。

正直、話を聞いた時は「御所ってどんなところだろう?」と、こちの好奇心も掻き立てられたが、叔母にいきなり妍を競う話を聞かされて、ああ、またそういう世界が見えてしまうのかと、夢が一つ壊れた気分がしている。

果して私は御所で、いったい何を見せつけられるのだろうか?

御所

叔母に連れられて初めて訪れた御所は、ただただ、広いところだった。新参者が一人で入ったりしたら、間違いなく迷って出られなくなってしまうそう。

中納言家も大きなお屋敷だし、大納言家も外から見ると、塀がどこまでも果てなく続くような、広大なお屋敷だ。

ところが御所となると、もうこれは町が一つ、いや、三つ四つはあるのと同じで、そういう部分では大納言家にも似ているのだが、中に、古木がたくさん見受けられて、まるで森のようなところが沢山ある。

庭の一つ一つも大きく広くて、その中に巨大な建物が、いくつも連なっているのだ。女車の中で叔母が指さす。

「紫宸殿は、国の政事が行われている場所よ。帝の詔もここで下されるの」

牛車は奥へと入っていく。

「ほら、ここが主上がお住まいになられている清涼殿よ。向こうに女御様方が暮らすそれぞれの御殿が見えるでしょう？それから梨壺、桐壺、梅壺」

叔母は次々と案内してくれるが、私は御所の巨大さに呑まれて、まるで耳には入っていない。

それにここはすべてが古めかしい。京の都が作られてから、ここ

は国の中枢だった。その歴史が脈々と生きている事が感じられる建物だ。御所の中には鬼が済むという世間の噂も、成程これならば、と、思わせるものがある。古めかしい建物に巨大な森。夜、とても一人では出歩けまい。

私達は真つ先に梅壺の主である、梅壺の更衣様にご挨拶に上がった。

更衣様は小柄できゃしゃで、おとなしやかな、いや、もっとはつきり言えば、気の弱そうな方だった。何と云うか、覇気がない。こんな広大で古めかしい御所の中で、ひっそりと隠れるように生きている感じがする。

多数の女御、更衣が妍を競っている後宮に暮らしているのだから、もっと、堂々と、きらびやかにしている方かと思っただら、随分地味な印象がある。中納言家の一の姫様もおとなしい方ではあるが、ずっと明るく、生き生きとしておいでだ。お歳はこちらの方の方がずっと上だろっけど、性格は正反対なようだ。

申し訳ないけれど、私は最初の印象で「うっとうしい方だなあ」と思ってしまった。これじゃ、主上の足も遠のくわ。

ただ、私を基準にしたら、すべての女人がおとなしい人になっちゃうんだろっけど。

かけていただいたお言葉も

「雅楽まで日がないけれど、よろしくお願いするわ」

と、言っただきりで、たいして表情も変わらない。そっけない方だなあ。私の噂のせいかしら？

そういえば他の女房達も、何となく身を固くして、ひっそりと暮らそうとしているように見える。のびのびとしたところがない。ここで十日以上も暮らすのか。私はうんざりしてきた。

ところが私の気を引きつけるものがあつた。庭だ。梅壺の庭はその名の通り、美しい梅が咲き乱れていた。

パツと目につく紅梅は勿論、清廉な白さが光る白梅も今が盛りとばかりに咲き乱れている。

室内には梅花香の香りがたかれているが、この香はそれだけではない、きつと外には自然な梅の香りがいっぱい広がっているに違いない。私は嬉しくなって挨拶がすむと御簾から出て、御格子をあげ、縁に出ると思う存分庭の様子を満喫した。

紅白それぞれに幾本も咲き乱れる梅、広がる香、美しいやり水と池。そよぐ風と暖かな日の光。池の周りには、苔むす岩が彩りを添え、水仙が咲いている。私は庭に出ようと足をのばしかけた。

「まあ、何をなさるんです！」
何処からか厳しい声が飛んできた。

見れば白髪の、年老いたいかにも古長けた古参の女房と言った感じの女人が、私を睨みつけていた。叔母の顔色には、はつきりと「

まずい」という字が書かれたような表情が浮かんでいる。

「何って。ちょっと庭に出てみようかと思ったんですけど」

「今時の人は、平気で端近によって、困る困ると思っていました。がよもや、縁に出て庭にまで出ようとする方がいよつと思いませんでした。世の中乱れるにもほどがあります。あなたのご両親はどんなご教育をなされたのやら」

私はかなり、むつとした。女人の教育は、乳母めのや、召し使う者よりも、両親の人格が現れやすいものと世間では言われている。だから両親の育て方を非難されてむつとしない女人がいたら、私は顔を見たい。

「お見かけしない方ですが、あなたが新参の方ですか？」

「本日から、この叔母の使い走りに使われることになっている、花房と申します。女雅楽の琴を弾くことにもなっていますので、よろしく願います」

私の挨拶を聞いて、古参の女房は、ますます嫌な顔をした。

「ああ、あなたが。お噂はかねがね伺っております。あなたは運がよろしいわ」

「は？」

「この私の居る、梅壺につかえる事が出来るのですから。私は梅壺の更衣の乳母で、小侍従と呼ばれています」

「乳母？ あなたが？」

言ってしまったから失礼だと気が付いた。が、もう遅い。だって、白髪の彼女がまさか若い更衣様の乳母だなんて想像が出来ない。じやあ、更衣様の乳兄弟の方は、この方のおいくつの時の子なんだろう？ そんな私の顔を見て、小侍従も察しがついたらしく、すかさず言う。

「これでも私は姫様と、そのお母さま、自分の子供も六人を育て上げた、乳母の中の乳母です。乳の出も、それは豊かなものでした。今でも女人として現役です。慎み深い女人というのは、いつまでも現役でいられるものなのです。あなたにも、女人としての生き方をじっくりと教えて差し上げましょう」

これは相当うるさそうな方だ。人に小言を言うのを生きがいにもしていいそう。それにしても

「現役、現役って、要は男君が切らさずにいたって事じゃない。どこがつつしみなんだか」と、口に出してしまう。

勿論、小侍従は聞き咎めて

「あなたには、目上の人間への言葉の使い方から、お教えする必要がありそうね」と、私を睨みつける。

「良いですか？ この梅壺は、古式ゆかしい暮らしぶりこそが似合うのです。あの、麗景殿とは違うのです。あなたは御所の事などにもご存じではないでしょうから、私が一から教えて差し上げます。女雅楽の時までには、あなたも素晴らしい貴婦人となられますよう」

麗景殿とは女御様の住まれる御殿の一つで、今は、大納言様のご長女が、中宮としてお住まいになられている、現在の後宮の中心となっているはずのところだ。

中宮様は半年ほど前に男御子を無事、お産みになられ、今度の女雅楽の折に、宿下がりがりされている御実家の大納言家から、御所に戻られることになっていた。でも、なんでここに、麗景殿の話が出て来るんだらう？

「あの、花房はまだ、こちらに着いたばかりで、私の局に案内もしておりませんので、この辺で失礼させて頂きたいのですが」

叔母がいつまでも小言が止まらなくなっではいけないと思ったのか、小侍従の話に割って入ってきた。

「そうでしたね。では、一旦下がってよろしい。夜にはまた、参上するように。一度、その琴を聞かせてもらわないと」
そういつて小侍従は私達を解放してくれた。

でも、私は小侍従がさつき言った言葉の方が耳に引つ掛った。私を貴婦人に仕立てようなんて、以外に大胆な事を言う人だ。

私の噂が届いている以上、私の父の身分がどれほど低いかは、真つ先に伝わっているはず。

つまり、私をどんなにしつけた所で、所詮は下司の子。誰に感謝される訳でもないだろう。むしろ、私にはあまり表に出ずに、おとなしく引つ込んでいてほしいとは思っても、自分が恥をかかない程

度のしつけさえすれば、そんなにかかわりたくないというのが、本音のはず。でも、小侍従は（あれが嫌みでなければ）本気で私をしつける気持ちがあるようだ。

「どうやら彼女は貴族としてはかなり珍しく、身分で人を判断しない人らしい。案外悪い人じゃなさそうだ。」

私と気が合うかどうかは、全然別の話だろうけど。

叔母の局に着いて一心地つくと、私は早速尋ねてみた。

「ね、なぜ、小侍従さんは急に麗景殿の話を持ち出したりしたの？」

「こちらの更衣様に長らく主上のお渡りが無かった話はしたわよね？ 実はお渡りが途絶えたのは主上が中宮をお迎えになってからなの。小侍従の君はそれをとても気にしてらっしゃるのよ。」

「それは、主上と中宮様の気があったからじゃないの？ 御夫婦なんだから、相性ってあるもんでしょ？」

「違うわよ。もちろんお二人の御相性もあるのでしょけど、主上は大納言家の大将様と、大変仲の良い御学友なの。中宮様はその大将様の姉上に当たられる方なので、主上は一層、中宮様へのお渡りが多くなるみたい。それに大納言様のご威勢も大変強い物があるから、他の女御様もお父様方の事を気遣って御遠慮気味になるのよ。ましてうちのお姫様は更衣でいらっしゃるから、女御様方を差し置くような真似はできないしね。それに」

「それに？」

「こう言っちゃ失礼だけど、梅壺の更衣様の御実家は、あまり経済的に恵まれている方じゃないわ。お母上は皇族の出だから女御様でいらしてもいいくらい血筋は申し分ないけど、御父上は先の帝にかかわっていらつしやった方だったから、今では政治的権力は無いに等しいし、財力だつて……。実はあなたのお父様の援助に頼つてらつしやる所も大きいのよ。表には出せないけどね。だからせめて、きらびやかで華々しい、中宮様に負けないように、つつましかで品のいい、皇族らしいお暮らしを小侍従の君は更衣様にお求めになつているの。私達にもね」

それで、みんな、あんなに縮こまるように暮らしているのか。ああ、うつとおしい。

「だから、大将様とゆかりのあるあなたの事を、みんな、どこかで気にかけているの。あなたによくない噂がある事は知ってはいてもあなたの存在が、更衣様のお立場を強くしてくれるんじゃないかと心の中では期待しているのよ。あなたには飛んだ災難でしょうけど、あなたが梅壺の切り札になつてもらえる事を私も期待しているわ。どうかあなたも大将様の気を引いて頂戴ね。無理なお願いをしているのは分かっているけど」

無理を承知のお願いが、どうやら私には付きまとうものらしい。私は自然にため息が出てしまった。

更衣の涙

夜の参上まではまだ時があると、叔母の局で私達はくつろいでいたが、突然、役人が来て

「今夜は梅壺に主上がお渡りになります。命婦の方にお付きになられている方にも、お琴のご所望があるうかと思われまますので、そのおつもりでお支度下さい」と告げていった。

早速に主上のお渡しとは。帝はなかなか好奇心旺盛な方らしい。

私達は大急ぎで、失礼のないように身支度をした。おかげで琴の調子を見る暇さえなかった。

暇がないのは小侍従も一緒に、久しぶりの主上のお渡しという事で、人に言っただけを片づけさせたり、自ら更衣様の身支度を整えて差し上げたりしている。私に声をかける暇など無さそうだった。

間もなく先づれの声が出て、お使者が帝の到来を告げる。そして主上が古式ゆかしくお渡りになられた。

さすがの私も、主上をお相手に、顔をあげていられるほどの肝は無く、おとなしく深く頭を下げていた。

「こちらでは素晴らしい琴の名手を迎えられたようですね。楽しみにして、公務も手に着かず、うつけたようになってしまいました」
そう言って笑われているのは、おそらく主上だろう。

「ま、そのような諧謔（かいぎやく）、冗談（じゆたん）をおっしゃって」
そう答えている声は小侍従。

「本当の事ですよ。私は梅壺の方のように、聞きわけの良い人間ではありませんから。年下の大将などにいつも諫められているのです」

「大将様もご一緒でいらっしやられるなんて、お久しゅうございますわ」

これを聞いて私はぎくりとした。大将様まで来ているの？

「少し、宿直が無かつただけで、久しいとは大げさだな。あなた方も、時には御簾の外に出てきて下されば、もっと、お話もできるんだが」

確かに快活な声をあげているのは大将様だ。

「女人の身でそのような訳にはいきませんの」

小侍従らしく、冗談にもそのまま真つ直ぐに答えている。固いなあ。

「私は梅壺にはめつたに用がありませんからね。今日も主上に引つ張り回されてしまつて。後で大納言家に宿下がりしている姉上の所にも顔を出さないと、ひんしゆくを買いそつですよ」

そうか。大将様は姉君が中宮になられているんだから、後宮には仕事でなくても頻繁にいらっしやっているんだ。知り人もいっぱいいるだろうし、これじゃ、梅壺から出て歩いたら、いつ、ばったり会つてもおかしくないわ。大将様も、結構型破りな方だから。

「いやいや、こちらの名手の琴と大将の笛を、どうしても合わせて聞いて見たかったんですよ。それが叶わぬうちは私は仕事を呆けたままになりそうでしたから」

大将様の笛と合わせる。それも即興で。やはり、主上は好奇心がお強そうだ。

帝と聞いて、ついつい天上かなたの方と恐れ入ってしまったが、考えてみれば、主上も聴衆の方のおひとり。果してこの方は楽の音から何かを導き出そうとしている、心ざまの深い方か？ それとも好奇心に駆られただけのただの男君か？

「大将が女君と合奏する顔も眺めてみたかったものだし」

きまり。ただの男君。私はそう、判断した。

「して、その琴弾きは、どちらにいますか？」

主上はそういって女房達を見渡した。

「私です。私が命婦に付きしたがっている、琴弾きです」

私は真つ直ぐ、顔をあげた。たとえ主上と言えど、私は扇を使わない。主上が私の演奏をご所望なら、主上は聞き手。他の聴衆の方と一緒にしろ。私は琴弾きである時にはへりくだる必要はないと考えた。

「花房。扇はどうされました？」

たまりかねたのだらう。小侍従が聞いた。

「私、琴を弾く時には、扇は使いません。たとえ聞いて下さる方が、どなたであろうとも」

私ははつきり言った。

私の噂通りの態度に、主上は一層好奇心むき出しの顔をされる。そのお顔は明らかにこの状況を楽しんでいらっしやる。

「私の琴を、大将様の笛と合わせてお聞きになりたいとのことですが、さっそく演奏させてもらってもよろしいでしょうか？」

「勿論です。今夜はそのためはこちらに伺ったのですから
主上は何心もなく、明るくおっしゃる。」

すぐそばの御簾のうちには、長らくお渡りが無かった、更衣様がおられる。そんな事は一向にかまっていらっしやらない。私への好奇心が勝ってしまったれている。

よおし、それなら。

「では、大将様。この曲は御存じですか？」

そういいながら、私は大将様の隣に行つて、そつと耳打ちをする。大将様は、一瞬、驚いたお顔をしたが、私の顔を見て、にっこりとうなずかれた。

私達は早速演奏を始めた。曲は「想夫恋」。妻が夫を慕う物語の伝えられる曲だ。

私は以前のような大胆な弾き方などしない。あくまでも優しく、そつと、妻が夫に寄せる心はこんなものであるうかと、たおやかな響きが人の耳に残るように弾いていく。大将様は、私の琴の音を煩わせないように、静かに笛の音を添えて下さった。私も琴に、悲しみの哀切を添えて演奏する。

すると、演奏に聞き入っていた更衣様のすすり泣くお声が聞こえて来た。御簾の内側に居られるので、私達にはお顔は見えないが、更衣様は明らかに泣いていらっしやる。

主上の角度からなら、そのお涙はおそらく見えておられるはずだ。啞然とその姿に見入られているようだ。

やがて、演奏が終わると、主上は御簾のうちに入られた。更衣様の元に寄り添われる気配がする。

「今宵は梅壺の方と、積もる話がありそうです。二人でゆっくりしたい。大将には下がってもらっていいか？」

御簾のうちから、主上のお声だけが聞こえた。

「勿論でございます。私も、帰りまして姉上のご機嫌伺いに参りますので」

大将様も、そう、御答えになった。

それを合図に、皆、そつとその場を離れていく。私も叔母につき従って、その場を離れた。

そのまま叔母について、局に戻ろうとしたが、行く手に大将様が

立っていた。

「先ほどは失礼いたしました」

そういつて頭を下げて、私は叔母とともに通り過ぎようとしたが、大将様が、袖で私の行く手をさえぎってしまう。叔母は目くばせをして、そのまま行ってしまった。いや、それじゃ、困るんだけど。

「先ほどは、良い機転を利かせて下さいましたね。これで梅壺の方の面目も、おおいに立ったことでしょう」

「たまたまです。主上がおおらかなお人柄でいらしたから。もし、御怒りを買っていたら、面目どころではありませんでした」

私はそう言つて、するりと身をかわしてその場を離れた。

それでも私は軽く振りかえり、大将様にそつと会釈をする。大将様が私の考えを察して下さらなければ、さっきの演奏は成り立たなかつたのだから、感謝はしているのだ。大将様も会釈を返して下さいました。

大将様も急ぎ足でその場を離れて行く。きつと、姉上の中宮様への御報告に、大納言家に戻られるのだろう。

その夜、寢床に着いてから、私は眠れなくなってしまった。急に自分のしたことの大胆さに気が付いたので。

本当に主上がおおらかな方でよかつた。良く考えてみれば、顔も隠さず、あんな皮肉な選曲をした私は、あの場で御不興を買つてつまみ出されてもおかしくなかつたのだ。

そうならば、梅壺の更衣にも害が及んだかもしれないし、叔母の立つ瀬もなくなってしまっていたに違いない。

あの場では、主上がちょっと無神経な方に思えたし、あんな風に無視されて咎め立てもしない更衣様も、情けないような気がした。おまけに大将様がいらっしゃったから、私もつつい、強気になっていた。

でも、相手はこの国の帝。お言葉一つで、私はどう扱われても仕方がなかったはずなのに、主上はお咎めにはならなかった。主上も一見、無神経に見えたけれど、きっと、御心のうちはお優しい、素直な人柄の方なのだわ。

そういう方にあんな態度をとってしまうなんて、浅はかだった。

私は一晩中後悔して、良く眠れぬまま朝を迎えていた。早く支度をして、更衣様に謝らなければ。

ところがそんな朝早い時間に、叔母の局に女官が訪れた。叔母は大いに慌てていた。その女官は主上に直接仕えている、尚侍といないしのかみう大層位の高い女官が、召し使ってらっしゃる方なのだそうだ。その方から叔母あてに、美しい桂（うちぎ、女性の衣装）が贈られた。

「これは。主上から花房に下賜されたものだわ。まあ、まあ、大変。こんな名誉な事があるなんて」

叔母はうるたえながらも、私にお礼の手紙を書かせ、こういう時にちょうどいい、儀礼的な歌をつけて、女官に散々へりくだりながら手紙を渡していた。私は呆然としている。

「表面上は尚侍から、私への贈り物に、あなたがお礼をしたことにしているけれど、彼女は主上のお使い役よ。彼女があなたにお渡し下さいと言ったのだから、間違いなく、これは主上からあなたに贈られたもの。これは大変な名誉だわ。あなたのお父様に、さっそくお知らせしなくては」

何だか、叔母の方が舞い上がっていた。

この話は宮中にパツと広がった。私は初日の緊張で気付かずにいたのだが、私の事は後宮に住む人全てが注目をしていたらしく、昨日からの一連の話が、宮中の話題をすっかりさらって行ったらしかった。

そんな注目を一身に浴びたまま、私は更衣様の元に参上した。

小侍従は苦虫をかみつぶしたような顔をしていたが、更衣様は昨日とは打って変わった晴れ晴れとした面持ちで、私に近くに来るようつと言った。

「昨夜はあなたのおかげで、主上と本当に久しぶりに、ゆつくりとお話が出来ました。主上は、中宮や、大納言様に気をお使いになって、麗景殿にばかり足をお運びになっていたのではなく、最近はず世の中の乱れが激しく、御公務でも、お気を回さなければならぬ事が多いので、つい、お親しい大将様がよくいらっしゃる、麗景殿の方に足が向かいがちになるのだと、おっしゃってくださいました。決してあちらの華やかさにひかれるのではなく、心をくつろがれる

時間が欲しくて、同じ方にはかり通いがちになっていらつしやうた
そうです」

ふうん。男心と言うか、主上の様なお立場の方のお心と言うか、
そういうものは分らないけれど、やっぱり精神的なお疲れがある
時って、立場的な気遣いをしなくてすむ所に自然と足が向いてしま
うんだろうな。特に、中宮様の弟の大將様は、主上とお親しくなさ
っているみたいだし。

「でも、梅壺にも、華やかさとは違う、落ち着いた静けさと、丁寧
な心づかいがあるとおっしゃってくださいました。私は自分と、
この梅壺が地味であることを気にしすぎていたようです。あなたの
琴のおかげで、私は素直な自分を主上に知っていただけました。本
当にありがとう。主上もあなたには感謝しているそうですよ」

更衣様はそうおっしゃって、ご満足そうな頬笑みを私に向けて下
された。

昨夜は、完全に勢いに任せてしまっていて、浅はかな行動をとっ
ていた私としては、こう、臆面もなく褒められても、居心地の悪い
物がある。

でも、更衣様が御満足して下さっているなら、これでよかったの
かな？

人気者

更衣様が御満足なようなので私は胸をなでおろしていたが、小侍従はそうはいかないようで、

「更衣様はああおっしゃったけど、あなたの身が無事でいらっしやるのは、主上の温情あつてのこと。昨日のあなたのお振る舞いが正しかったとは私には思えません。一つ間違えれば大変な事になっていた事を、あなたには分かっていたただかないと」と、さっそくお小言が始まった。

「それは、私も反省しています。今朝は更衣様にお詫びに上がるつもりでしたから。正直に言つと、後から怖くなりました。何事もなくて良かった」

つまらぬ意地を張つてもしょうがないので、私は本音を伝えた。

「まあ、無駄に舞い上がつてはいないようですね。あなたには大将様の後ろ盾がおりになるから、一層大胆になつておられるのでしようが、そこに頼るのはお辞めになるべきです」

「別に頼っているつもりは」

「いいえ。あなたはやっぱりお若い。相手に悪意がないと感じると比較的すぐに安心してしまふ。まだおわかりにはならないでしょうけど、公達（公家の男性）というのは悪意は無くても気まぐれで時に残酷なものなのです。あなたのように無防備な方は、いつ、面食らうような思いをすとも限りません。女人がつつましやかに生きることにはそれなりの先人の知恵があるのです。女人には女人の知恵がある。それを生かせる方こそが、本当の貴婦人となられるので

す

へえ。やっぱり小侍従は、世の人々とは少し違うみたい。女人は早く位の高い良い男君に恵まれて、屋根の奥で子供のしつけにいそしむのが一番幸せだといわれているけど、この方は長い乳母勤めのせいか、御所に勤めているせいか、もう少し、理に勝っているところがあるみたい。

でも、私にも言い分はあるわ。

「私の事を心配して下さるお気持ちは嬉しいですけど、私は、世の人々に、伝えたい事があるのです。女人にだって言いたい事、伝えたい事があるというのを、色々な人に知って欲しいのです。他の方々が歌や、しぐさに込める思いを、私は自らの言葉や、琴の音、この姿で堂々と伝えたいのです。女人の名は役職は残されても、名前そのものは記憶にも、記録にも残してはもらえませんか？ 名を隠し、姿を隠し、わずかな歌と、人の口に登った容姿だけを残してあとは誰とも知られることなく消えてしまふなんて、なんだかさみしい。私は悪口でもいいから、この都に思いつきり、爪痕を残してみたいんです」

「先人の方々が、女人が傷つかず、他の方々も傷つけずに済む知恵を授けて下さっているにも関わらず、あえてそれをしないというのですか？」

小侍従は、あきれた顔で私を見ていた。

「だって、心を閉じ込めて、なにも伝えられずにいれば、やっぱり傷ついてしまうもの。表面が穏やかでも、物言えぬ自分が、自分を傷つけるんなら、意味は無いわ。私が琴を弾く時は、誰かに何かを

伝えたい。そのためなら、中納言様や、大将様の後ろ盾だつて、利用するわ」

小侍従は軽くため息をついた。

「あなたは大人や、男君を利用してはいるつもりでしょうけど、人は利用するものでもされるものでもありません。若い女人のあなたは必ず情が上回ってしまう時が来るでしょう。その思い上りが大切なものを失うことにつながるかもしれないよ。あなたが姿を隠さない事をとがめるのは控えましょう。けれど、もつと良く考えて行動できなければ、あなたが私に何を言つてこようと、私はあなたを認めませんからね」

そう言つて小侍従は、私に自分の扇を渡してよこした。これだけは使えということなのだろう。

小侍従にはお冠を受けた私だったが、宮中では、私はすっかり有名人名人になつてしまつていた。

もうすぐ御所に麗景殿の女御がお帰りになると他の女御、更衣様方が、戦々恐々となさつてゐる所に、宮中に着いたその日に主上の関心を惹き、大将様と合奏をし、主上と更衣様の御夫婦仲を深めて、主上から桂を下賜された。

そんな私の大胆な行動で梅壺の更衣様のご注目度が、いっぺんに上がることとなつた。

他の女御様方は、うらやむやら妬むやらで、梅壺の琴弾きはなか

なか機転の利く、はしっこい女人。主人を立てるのがうまい、やり手の女人。そんな評判が立っているらしい。

梅壺の女房達は、皆、私をほめそやしてくれたし、他の御殿の女房方も、私に注目しているという。

人に褒められて悪い気はしないが、今朝方まで「やり過ぎた」と後悔していた私は、ほっとした気持ちに先に立っていて、それほどしてやったりという気分にはなれなかった。

それがかえって誤解を生んだらしく、私は世間の噂よりは奥ゆかしさがある女人、ということにもなったらしい。

おかげで私は宮中で、ちょっとした人気者になる事が出来た。

皆に受け入れられてみると、宮中はとてもおもしろおかしいところだった。

大きな邸で深窓の令嬢や、北の方様などに使えるのは、情緒あふれる「もののあわれ」が感じられる暮らしだ。

それも勿論、素敵な事なのだけれど、宮中はもっと刺激的で、社交的な場所。「おかし」を感じる暮らしだ。

御簾のうちからそうそう出られないのはここも同じなのだが、何せ御殿の広さが違う。召し使えられている女房も数が多いので、それだけでも華やかだ。

それぞれの御殿が妍を競っているだけあって、女房の衣装も華がある。宮中は流行りごとの発信源でもあるから、みな、それぞれに工夫を凝らしているのだろう。

確かに梅壺はそういう意味からすると少し地味なところはあるが、古風な梅を基調とした統一感があつて、落ち着いたたたずまいが感じられる。寄せ集めた華やかさとは違う、しっとりとした趣があつた。

そして、主上につかえる女官たちが、清涼殿に彩りを添えている。何をするにも御所に伝わる、古式ゆかしい習わしがあつて、普通のお屋敷とは違う雰囲気がある。

そういつ、女房や女官、彼女たちに使われる、私達のような少女たち。それだけの女人達が活発に仕事をこなすのだから、そこに生まれる社交も華があつた。

互いの衣の重ね方を指摘し合つたり、刺し色の話に興じたり、流行情の和歌を教え合つたり、恋の話にも花が咲く。何よりも噂話やおしゃべりに興じるのには、最適だった。

そう、誰それは恋仲と噂も立つはずだ。ここには殿上人の公達達も集まってくるのだから。

お邸では公達達は邸の主として君臨するか、客人としておもてなしを受ける人々だが、ここは彼らの職場でもある。そして後宮は社交の場所でもあるのだ。

御簾を一枚挟むとはいえ、共に物語を楽しみ、歌を詠み、楽を奏で、諧謔を楽しむ。扇で顔を隠してはいるが、御簾の外へ出て事務的なやり取りだってする。こんな世界は初めてだ。

その公達達が、噂の私と一言言葉を交わしてみようと、叔母の局や、ひさしの近くを訪れて、私を待ちうける。

彼らは私にお世辞を言ったり、嬉しがらせたり、からかって見せたりする。何とか私の顔を、外にさらけ出させようと、あれこれ言っっては持ちあげて来る。

私も楽しくて、つい、乗せられそうになるのだけれど、小侍従の扇を目にすると、何となく心配してくれている彼女に申し訳ないような気がして、なんの意味もない時に顔を晒すのはやめようと思いなおす。

そのせいで、初めほどには「噂ほど大胆な女人という訳でもない」と、口の端にのぼる事も少なくなった私だったが、彼らと物怖じすることなく冗談を言い合ったりする私に、別の面白みを感じるらしく、公達達は私に声をかけるのをやめずにいたので、結局私は宮中暮らしを十分に満喫した日々を送る事が出来ていた。

それでも私の身分の低さを陰であれこれいう人たちもいたけれど、ここまで身分が低ければ、かえってもの数には入らないので、誰も私に干渉する人などいない。唯一苦言を言うのは小侍従だけだ。

女雅楽の練習も、それぞれの御殿から腕自慢の人たちが集められているだけあって、とてもやりがいのあるものだった。

田舎育ちの私は、もともと都で女房勤めをしていて、大変琴が得意だったのだが、結婚して夫につき従って武蔵の国に来ていた女人に、琴を一から教わった。

でも、あまり他の方の演奏を見聞きする機会が多くは無かったので、どうしても彼女の癖がうつってしまい、さらに私の性格からか自己流になってしまっていたので、こうして大勢の方々と練習するだけでも、いろんな事が解って楽しかった。

女雅楽はお帰りになる中宮様をお慰めするためのものでもあるので、麗景殿で行われる。

そのため、取り仕切っていらっしやるのは、あの、大将様だ。ばったり出会うどころか、毎日顔を見る羽目になった。

そこは少々ばつの悪い物ではあるけれども、大将様が笛を合わせを試みたり、童殿上している子供達も一緒に、太鼓をたたいたり、笙を吹いたり、大きな琵琶を懸命に支えながら弾いたりするのも、賑やかでかわいらしかった。

大将様は後宮の人気者らしく、どこに行っても誰かしらからお声がかかってくる。

特に美しい女房の方などが、大将様にお声をかけると、大将様もわざと私に見せつけようとなさっているのが分かる。この方にそういうかわいらしいところがあるとは思わなかったので、そんな事も私には楽しかった。

しかも、私と梅壺の更衣様を大将様が常に気にかけているという

ので、更衣様も自然と皆に注目されていた。

決して華やかな、活発な方とは言えない更衣様だが、さすがは皇族の血をひかれるだけあって、どこか気品がおりになる。昨日今日の日付け焼刃ではない、奥ゆかしさがあつた。

初めにお会いした時は、心を閉ざされていたせいか、小さく固まっ
っているような印象を受ける方だったが、それは主上のお渡りがな
くなつたにもかかわらず、中宮様に対抗しなければならぬという
重圧から来るものだったらしく、そこさえ和らげば、この方も、お
優しい、控えめで落ち着きのある方のような。

このような方に華やかな暮らしはかえって肩がこるんだろうな。
注目されるのはいいけど、かえってご負担にならなければいいんだ
けどな。

そうは思いながらも、私は御所暮らしの楽しさに、すっかり浮か
れてしまっていた。ここが妍を競うのは、男君たちの思惑が絡んで
いるのだという事を、すっかり忘れてしまっていた。

そう、ここはあくまでも、後宮政治という、政治の世界だったの
だ。

後宮政治

女雅楽の日まであと二日と迫った日に、梅壺の更衣様の御父上様がお役目をしばらく謹慎することになったとの知らせが入った。誰もが寝耳に水の事だったので、驚き慌てていた。

梅壺の女房達は、皆、知らせを伝えに来た役人に詰め寄った。役人も小さくなりながら答える。

「ですから、先日、ある権門のお屋敷に押し入った強盗が、前帝とつながりがあつたようなんです」

「でも、更衣様のお父様は、今は前帝とは何の御関係もないんですよ。それなのに、なんで今更、御謹慎をしなくてはならないんです？」

小侍従が役人に一層詰め寄る。

「今は御関係がないとはいえ、強盗の一味には、更衣様の御父上が昔召し使っていた者がおりましたので、やはりここは御責任を果たす意味での御謹慎ではないかと思われませんが」

「そんな！ もう、何年も前に勝手に行方をくらました者のために、責任を取れとおっしゃるんですか？」

「しかし、これはもう決まってしまったことですので。ですから、こちらの更衣様にも、今度の女雅楽が済みましたら一旦、お里下がりなさせていただくようにと、大納言様の仰せです」

「大納言様の……」

誰もがこれでピンときたに違いない。

最近、更衣様の注目が後宮内で上がって来ている上に、ここ数日、主上のお渡りも続いている。

女雅楽の日は、当然主上は中宮と過ごされるだろうから、その翌日に更衣様を御所から遠ざければ、梅壺の勢いは明らかにそがれるだろう。ましてあちらには、東宮となられるであろう生まれたばかりの男御子をお連れしての御所入り。梅壺の作りだした雰囲気など、あつという間に掻き消されてしまふに違いない。

所詮は後宮政治。やはり陣の座の権力は大きい。結局は力がものを言う世界なのだろうか？

大納言様もこういう時には人も無げな事を容赦なくやってくるよ
うだ。

殿方達の世界はそういうものなのかもしれない。追うも追われるも、勝つも敗れるも、当人達の時流の読み次第。いうなれば本人の実力なのだろう。

しかしそのために送り込まれて、一生を決められてしまった、更衣様はどうなるのだろうか？

このまま御所の奥深くで、ひっそりとお暮らしになれというのだろうか？

そうでなくても更衣様は御父様の後ろ盾がおぼつかないお立場だ

った。自らのお血筋と主上のご寵愛だけに頼るほかにない状況に追い込まれている。それなのに肝心の主上との御愛情にまでこんな政治的圧力がかかって来たんじゃない、立ち打ちのしようがないじゃない。

私は頭にきた。

癪だけど。本当に悔しいけれど、私は大将様に手紙を書いた。本来なら女人は手紙を待つもので、先にこうして手紙を送るのはかなり関係が深くなってからの事だ。こうやって、事実上の親しい関係を裏付けていくのは、女人の私には不利なのは分かつてはいても、一言文句を言わずにはいられなかった。大将様は大納言家のご長男。今度の事をどう思っているんだろう？

前帝が怪しい者たちと付き合いがあつて、色々と利用しているのは前から分かつていた事。私がさらわれた時などは、事情を知っていた女房が自害して、直接かかわった男が一人、斬り殺されたのをいい事に、その時の陰謀も、前帝達の存在も、大納言様方にもみ消されてしまったはず。

それなのに今回は、更衣様の御父上様からとくに手元を離れて行方知れずになっていた男が、前帝を頼って強盗を働いていたという、まるで筋の遠い罪で御父上様を謹慎させてまで、更衣様を主上から遠ざけようとしている。これって職権乱用じゃないの。いくら都の安寧のためとはいえ、更衣様に対して思いやりがなさすぎる。

お立場についてはともかく、主上との絆まで断とうとするやり方はひどいじゃないの。

私の手紙は無事大将様に届いたらしく、返事を待つまでもなく大

将様自らが、叔母の局へとやってきた。

「大納言様はひどいじゃないの。なんでこんな無法な事がまかり通るのよ」

「あなたのお怒りはもつともですが、今は仕方がないのですよ」

「何が仕方ないんですか？ 大将様だって、この間の合奏の時には更衣様の面目が立ったと言って下さったじゃないの。ようやくお二人のお心が繋がりがかけたというのに、どうしてこんな真似をなさるんです？」

「それは、更衣様が皇族の血を継いでらっしゃるからです」

大将様は説明した。

「今、都は大納言家の力によって、ようやく人心が一つにまとまっているところです。前帝の世では、人々の心が落ち着かず、政事は滞ってばかりでした。今はそれに取って代わって大納言家が都を統率しています。それでも、世には盗賊や人さらいがはびこり、さらに、前帝の悪事に人々は脅えている。それが今度は大納言家への不満となって現れ始めているのです。それを抑えるためには、大納言家は絶大な権力を維持しなければなりません」

「それと、更衣様と、どう関係があるのよ？」

「更衣様のお母様は皇族のご出身。御父上も今は権力を失ってはいませんが、もともと身分は低くありません。そんなお血筋の更衣様の元へ、主上が頻繁にお渡りになるようになった。これが続いて、今、更衣様に男御子がお生まれにでもなったら、どうなると思いますか？」

「あ……」

ここまで言われて頭に血が上っていた私にもようやく理解できた。

中宮様は大納言家のご長女。権力は絶大だし、御身分も悪くはないが、皇族の方との血筋は近いとは言えない。女御様の下のお立場とは言え、純粹に血筋の良さを比べれば更衣様の方が上になってしまふ。

それにお生まれになった男御子もまだほんの赤ん坊。更衣様が男御子をお産みになれば、これはお歳の近い東宮候補がお二人になってしまう。まとまりかけた人心が、また二手に分かれなとも限らない。

「更衣様のお立場は分かります。本来そのために後宮に上げられたのですから。世が前帝の時世のままなら、華やかにときめかれて、もしかしたら東宮の一方のお立場であられたのかもしれない。もともと更衣様も主上ともお歳が近く、後宮に居られる年数も長いのですから、主上とも幼馴染のように親しみ合っておられたはず。ですから主上も本来は更衣様と睦まじくなさりたい気持ちは持っております。それだけに、中宮の男御様のご成長なさるまでは、我々は油断できないのです」

「では、では、更衣様はどうなるのです？ お父様の後ろ盾も頼りなく、やむなく更衣の身に甘んじて、その上肝心の主上との絆まで断たれてしまったら」

「ご夫婦の絆はそう簡単に断たれてしまうものではありませんよ。我々も主上がたまさかのお慰みにお渡りになるのをお止しようとは思いませんが、頻繁にお渡りになるには今は時が悪いのです」

「そんなの勝手だわ！ お二人のお気持ちはどうなるのよ！」

「姫、ここはそういう場所なのですよ。後宮とは、時流に合わせて調整しながら、次の世代を育成する場所なのです。世の中を安定させるために」

私はこの方に姫などと呼ばれる身分ではない。その私に大将様がそう言ってくるときは、私を説き伏せようとする時だ。まるで幼い子供に諭すような口調になる。

「身分が高くなればなるほど、これは仕方のない運命でしょう。情けを通じると、結婚は、意味が違います。ましてや後宮では世の流れをも変えてしまう。我々は政治家なのです」

政治家。

そういう目で大将様を、ううん。殿上人や公達を見た事は無かった。彼らはただただ憧れの人たちで、本来なら口もきいてもらえないような人たちと、思いがけずこうして言葉を交わせるようになって、私はなんて幸運なんだろうと思っていた。

でも、彼らは確かにこの国を動かしている。彼らが帝に色々な提案をし、意見を交わし、人々の暮らし方や、国のありようを定めて、それを帝が詔として発するからこそ、この国は成り立っている。その意見を通すためなら、殿方達は多少の強引な手立てもためらわず

に使う物らしい。

後宮なんて、世の流れを最も象徴する場所なのかも知れない。

私は大将様を今まで見たことのない、全くの別人を見るような思いで見ていた。

もしも私がそれなりの家柄の姫で、大将様の政敵になる立場に陥れば、大将様は多少のためらいはあるうとも、私を切り捨てるなり、利用するなり、なされるに違いない。それは男君の情としてではなく、冷たい政治家の顔でなされるのだろう。

大将様が何心なく私にお話をされ、親しみを感じて、結婚まで持ち出したのは、私がそう言った事に巻き込まれることのない、身分の低さの気楽さもあつたに違いない。そう考えると何だか裏切られたような気分になる。

「公達というのは、時に気まぐれで残酷なもの」

小侍従の言葉が蘇る。確かに大将様に悪意はない。それでも彼らの政治家としての顔に、傷つけられる女人は多いかもしれない。更衣様のように。

でも、人は人を利用するものでも、されるものでもないと言った、小侍従の言葉はきれいごとすぎるわ。男君はこうして女人を利用しているじゃないの。

何だか私は愕然としてしまい、沈み込んでしまった。

「すいませんが、少し休みたいのでこれで失礼していただけますか？」

私は沈みながら言った。

「分かりました。夕方の琴の練習にはお越しく下さい」

大将様はそういつてその場を離れようとする。

立ち去ろうとして、大将様は足を止めた。そして振り返っていう。

「私は主上と幼い頃から親しくしてきました。主上はそれほど情け知らずな方ではありませんよ。あなたはあまり心配なさらない事です。きつとお二人は、姉上とは違う絆をお持ちだと思いますよ」

大将様が私を慰めようとしてくれているのは分かったが、私はつい、聞いてしまった。

「その絆は更衣様の苦しいお立場を救ってくださるのでしょうか？」

私は沈んだ気持ちのまま、大将様に尋ねた。

「……」

大将様はお返事を下さることなく、衣擦れの音だけを残して、立ち去られてしまった。

視線

「大将はあの琴弾きに、随分責められたようだね」

主上は大将の顔色をうかがいながら言った。

「いえ、どうという事は無いのですが、身分から後宮の事は良く分かってはおりませんし、何しろ気の強い女人ですので」

大将は気を張って、笑顔で答えて見せる。

本当は気の強い花房が沈んでいた事を気に病んではいるのだが、今度の事をもつと気にしているのは当事者の主上のはずだ。

「主上の方こそ、梅壺の方をお里下がりさせられるのは、不本意な事でしょう。心中をお察し申し上げます」

「いや、父親の謹慎中に更衣をなまじ宮中に残しても、私の通いもないままに、心ない視線にさらされるよりは良いのかもしれない。私も更衣には、少し情が傾き過ぎたようだ」

主上も、中宮が不在の間は出来るだけそれぞれの女御方の元へ一通りにお通いにはなられていたが、どうしても更衣様にまで足を向ける機会はそう、多い物ではなかった。

更衣様は主上と最も長く連れ添われている方なので、主上も本当のところはもつとお通いになりたい方ではある。

しかし、今では主上には、中宮の他にお二人の女御様がおられる。お立場から言ったら女御様方を軽んじられる訳にはいかない。更衣

様が女御様を差し置いて、主上のご寵愛を多く受けたとなれば、どんな所から、人のねたみを更衣様が受けるとも限らないし、その父親も難しい立場に追い込まれるやもしれない。

そうになると、それぞれの方のお立場や、様々な人の思惑を考慮しながら通わなくてはならない。中宮様が不在の時は向こうも待つているだろうとは思ってはいても、色々な事情を気にしなければならぬ。

更衣様もそこを気にかけていて、いつも控えめに、一步引いた態度でいらっしやるが、やはり寂しさは現れてしまう。その姿を見ると主上も哀れに思われて、つい、情が傾き過ぎて通いつめたり、それを反省して全く足が遠のかれたりしてしまうようであった。それがかえって更衣様を苦しめるのではあるうが。

「梅壺の方は長く私を理解しているので、私もつい、あの方には甘えてしまった。多少通う事が途絶えても、あの方なら我慢して下さるだろうと思っていた。あの涙を見るまでは。だから、あの方へのお詫びのつもりで、通いつめてしまったんだ。私はかえってあの方を追い詰めたようだ」

「主上のせいでは御座いません。ここはそういう場所です。お二人のお立場ではこういう事が起こるのも仕方のない事でございます。お里下がりまではまだ二日あります。お二人でこゆっくり話し合われるのがよろしいでしょう」

大将もそう言って主上をお慰めするが、生涯を縛られた女人の立場からすれば、このような事に耐えるのは、やはり苦しい事に違いない。同じ女人の花房に理解しろというのも、無理があるのかもしれない。

こういう事で主上が出来る事は殆んどないと言っている。あるとすれば主上のお優しい温情ぐらいのものだろう。

その主上の優しさが、更衣様をお救いする事は出来るのだろうか？

こればかりはお二人の心のうちの問題だ。大將は花房に尋ねられた答えを見つけられぬまま、主上の心情に思いをさせていた。

夕方の琴の練習の前に、私は梅壺を覗いて見たが、やはり皆、元気がない。更衣様の御父上が御謹慎中なのだから静かにふるまっているせいもあるのだろうが、ようやくはなやぎが戻ったところに冷や水を浴びせられたような事態に、皆が沈んでいるのだろう。

私が余計な事をしなければ、こんなに急に更衣様のお立場が追い込まれるような事は無かったかもしれない。私はすっかり後ろめたくなってしまうた。

今日は公達達が、叔母の局を冷やかに来る事もなかった。公達だけではない、誰もが梅壺を遠巻きに眺めているような気配がする。昨日とは打って変わって、手のひらを返したような空気が流れている。

これが後宮というところの本質か。私は梅壺に注がれる痛いまでの視線を感じていた。

更衣様のお立場では、ちょっとした事が起こるたびに、こんな視

線が集まったのだろうか？ これでは最初に更衣様にお会いした時の梅壺の雰囲気もうなずける。皆、普段から慎重にならざるを得なかったのだらう。

初めて梅壺に来た日は、ここをうつとおしいと感じたが、本当にうつとおしいのは、後宮にかかわる政治的思惑と、それに左右されている人々の視線だったんだ。

麗景殿に入ると、その視線はさらにあからさまになった。同情と悪意が私に向けられる視線の中に入り混じっている。皆、私から顔をそむけながらも目でちらちらと様子をうかがっているようだ。

こんな態度を取られたら、いつもだったら黙っていられないところだが、私はすでに更衣様にご迷惑をかけてしまっている身だ。ここで下手な騒ぎを起こすわけにもいかない。我慢のしどころだらう。

おかげで私は大将様に、かなり八つ当たり気味な視線を送ってしまった。これもそれも、大納言家が更衣様を追い詰めているせいなんだからね！ 私は一言も大将様と言葉を交わすことなく、その日の練習を終えた。

「姫、花房の姫。藤花の君」

大将様が私にお声をかけているのに、無視して梅壺に戻ろうとしていると、さらに追いかけてこられた。

「どなたをお呼びですか？ 藤花の君なんて、聞いたことのない名ですこと」

仕方なく私は足を止めて、嫌みたっぷりに返事をした。

「そんなおっしゃり方をしないでください。前に言ったでしょう？
私はあなたのほととぎすだと」

大将様は「やれやれ」といった様子で私の前に立ちふさがった。

確かに以前、大将様は御自分を花房という名の私に寄り添って鳴くほととぎすにたとえられた事があった。

「梅」には「うぐいす」。「紅葉」には「鹿」。「藤の花」には「ほととぎす」。遠い昔からの決った組み合わせ。

そこにたとえて大将様は私に言い寄られてこられたのだ。

「私は自分の蔓枝にほととぎすを泊らせた覚えはありませんけど？」

「まあ、そうおっしゃらずに。二人の時は私はあなたにお気楽に、ほととぎす、とでも呼んでいたきたいのですよ。ですからそんなに怒らないでください。更衣様の事は、私にも主上にも、どうする事も出来ない事なんですから」

なーにが「ほととぎす」よ。一国の帝と、国一番の権力者の息子が、か弱い更衣様一人お助け出来ない癖に。

「どうにもできないのでしたら、私達の事はほつといってもらえませんか？ こうして大将様とお話している事も、ひよつとしたら更衣様の「ご迷惑になるかもしれせんから」

「そう、苛めないでくださいよ。困ったな。実は私はあなたにお願い

いがあるんですよ」

「大将様が、私にですか？」

「私が、あなたにです。あなたにぜひ、琴を弾いていただきたいのですよ。更衣様と、主上のために」

梅壺に戻ると、皆の元気がない中で、小侍従が一人、気を吐いていた。

「こういう時こそ、更衣様のお憤み深さ、気品のあるお過ごし方が物を言うのです。人の目を引くことだけが、女人の価値ではありません。皆、もっと胸を張って、恭しく主上をお迎えしなくてはなりません」

そう言って、逗子の置き方、几帳の下ろし方一つにまで、こまごまを指図をしたりしている。

「けれども、女雅楽が終わればすぐに御所を離れなければならないんですよ。今更気を張ったところで、こちらの更衣様はかすまれてしまっんじゃないでしょうか？」

女房の一人が、そんな愚痴を吐く。言葉にはしないものの、そう思っている人は他にもいるに違いない。

「何をおっしゃるんですか！ 今度の御退出は一時的な事。更衣様はすぐにお戻りになられます。その時に主上に更衣様の事をおなつかしく思われるように、精いっぱい努めるのが私達の役目ではあり

ませんか。ここは麗景殿とは違います。主上を面白おかしく過ごさせ給う場所ではありません。たとえたまさかでも、おなつかしく、心安らかに過ごしていただくところなのです。そこを私達は忘れてはいけません」

小侍従は扇を開いた中からも、目を鋭く光らせて、私達をしつかり見据えながらきっぱりと言った。

ああ、やはりこの方は、心から更衣様の事を思ってお仕えしてらっしゃるんだわ。更衣様の良い所を良く御存じの上で、決して他の方々に劣ることのない方だと信じていらっしゃるのだろう。

でも今宵はこの方から、私の思うがままに弾く琴を、認めていただかなければならない。先日を通り一遍の弾き方ではない、私が魂を込める時の琴の音をお二人にお聞かせしなくてはならない。

そのためなら私はどんな弾き方もする。小侍従はそれを認めて下さるだろうか？

「小侍従さん。今夜は私はお二人のために琴を弾かせて頂きたいと思いますが、私がどんな弾き方をして黙って見届けていただけないでしょうか？ 几帳を立てて、決してそこから姿をあらわしたりはしませんから」

私は真剣にお願いをした。心からお二人のために弾きたいのだという思いを込めた。

小侍従は頷いて、私の願いを受け入れてくれた。

主上が梅壺にお渡りになる。

「こんな時に梅壺にお渡りなんて」と言った、無言の視線が他の御殿から突き刺さってくる中を、主上はかまうことなく訪れて下さる。私達もそれに応えなければならぬ。落ち込んでいる暇など無いはずだ。

まして私は女雅楽が終わったなら、ここを去らねばならない身。この迷惑をかけた更衣様のために、精いっぱい事をしなくてはならない。

私は几帳の陰に用意された琴の横で、主上と更衣様に深々と頭を下げていた。

「私などの、つたない琴の音ではありますが、今宵は是非、更衣様にお聞きになっていただきたく存じます」

「私に、ですか？」

「そうです。僭越では御座いますが、大将様から主上が今度の事で、どれほどお心を痛めておいでか、お聞かせいただきましたので、その御心をつたない私の琴の音に乗せて見たく存じます。どうか、お聞き届けいただきますよう」

更衣様も、主上も、しばらく無言でいらしたが、やがて

「その演奏を聞かせてもらいましょう。あなたが語りたという、主上のお心を」

そう、更衣様がおっしゃられて、主上もつなずかれたご様子だった。

「ありがとうございます」

私はお礼を申し上げると、さっそく几帳のうちに回り、琴の音を奏で始めた。

疑惑の目

私の演奏が終わると、お二人とも感慨深げに私にお言葉をかけて下さったが、実は私は演奏に納得はできてはいなかった。

確かに私は大将様から、主上の心情を教えては貰った。そのお気持ちのありようも分からないでもなかった。

でも、やっぱり私には男君であり、この国の帝であらせられる主上の本当のお気持ちは分からない。

以前の更衣様のお気持ちを表す気持ちで弾いた時は、そこに自分だったら、という思いを重ねる事が出来たが、今度はそう言う訳にはいかなかった。思いをはせるにも限界がある。所詮は自己流の解釈だという、納得のいかない部分が残っていた。まるで自分の心に嘘をついたような気持ちがあつて、すつきりしない。

それでもお二人は、私への気遣いだけではなく、本当に何かを感じられて、お二人の心を寄せる事が出来たようなのだ。そこも私には釈然とは出来なかった。

居心地の悪さに、私は一人で先にその場を下がってしまった。

叔母の局に戻ると、局の前に大将様が待ち構えていた。私が先に戻る事を読んでいたようで、私は面白くない。

「女人の部屋の前でどうされたんです？」

「そろそろお戻りになる頃かと思ったので。演奏はいかがでしたか？」

「こちらにも聞こえていたんじゃないやありませんか？ 主上にも更衣様にも、ご満足いただけたようです。お約束は果たしました」

琴の音というものは意外と良く響く物なので、同じ梅壺の敷地にいれば聞こえていたはずである。

「そのようですね。ただ、ご自分では満足されてはいないようだ。大将様は私の顔色を見ていった。」

「私などには主上のお心など、図れるはずもありませんから」

「そう、おっしゃると思いました。姫」

大将様が、私をまっすぐに見つめられる。

「物事を表現するという事は、決して自分の心をさらけ出す事ではありません。勿論心をこめる以上はそういう部分もありますが、それだけになってしまつては決して人に受け入れてはもらえないのです。私は人に歌を送る時は、その人の事を思います。どんなに儀礼的な歌であつてもです。それが私が歌詠みである時の心のありようなのです。そこには当然私の思いも込められます。しかし、歌とはそれだけではありません」

大将様は、あの、諭すような態度で私に話しかけられる。

「歌とは歌を詠む者と、それを受け取る者がいて初めて成り立つものです。一方的に詠み捨てた歌は歌とは言えない。それはただの独

りよがりでしかありません。こちらがどう思おうが、受け取った側がどう感じるかによって、歌の解釈など変わってしまうのです。こちらが喜びを歌ったつもりでも、相手には悲しみに受取られるかもしれません。しかし、それこそが本当に生きた歌なのです。受取ってくれた人が、何らかの感動を覚える。それこそが歌の価値です。これは雅楽にも言えることではないのでしょうか？」

「受け取った人の感動……」

「そうです。自らの一方的な感情を相手に押し付けて、分かってもらうことだけを目的にしては、そこに本当の感動は生まれません。受け取る人が、自らの人生観や、心情に合わせて感じ入って下さる。そのことこそが大切なのです。あなたは物言えぬ女人の心を伝えるつもりでいるかもしれませんが、それではただのおごりになってしまふ。人の心というのはもっともっと深い物なのです」

「大将様は、私が間違っているとおっしゃるんですか？」

「そこまでは言いませんが、あなたはもっと、視野を大きく持つ必要があるでしょう。それが難しいのであれば、中納言家の姫のお世話だけに明け暮れるか、郷里に帰って父上のそばで暮されるか、さもなければ私の庇護の下で暮らされるのがよろしいでしょう。そうでなければどこかできっと、人の心につまづく時が来るでしょう」

「ご自分は人の心につまづかれた事があるようにおっしゃるんですね」

わたしはついつい、皮肉で返してしまふ。大将様のような方にそんなご経験があるとも思われなかった。

「ありますよ。政事も恋の道も人とかかわらなければ成り立ちません。人の心に流れる感情とはどうにもできぬもの。現に、あなたは私をそでになさったじゃありませんか」

大将様は笑いながらそう言われる。まるで幼子をあやすような口ぶりだ。

そんな風に言われると、私も意地を張ってはいられなくなる。何よりも和歌の道ではこの方は一流の歌人。その方の言葉には重みがあった。

やはり私にはどこかにおごり心があったらしい。さっきの私の琴の音も、お二人がご自分達の立場に重ねられることが出来たのなら、それで十分な価値があったのだろう。

「ですからあなたは、今度の事を後ろめたく感じてはいけません。こう言う事が起こるのが後宮の定め。気後れしたり、強気に出過ぎた態度では、かえって人に付け込まれますよ。堂々としていらつしゃい」

言われて私は気が付いた。大将様は私をお諭しになるだけではなく励ましに来て下さったんだ。

やっぱりこの方は悪い方ではないわ。たとえ公達として私を戸惑わせることがあったとしても。

事が起こったのは、その夜も遅くなつてからの事だった。

「火事だ！」

役人のそう騒ぐ声に皆が驚いて飛び出してくる。

「火元はどこです！ 主上は？ 更衣様はご無事ですか？」

小侍従が役人に叫んで聞いていた。

「お二人は御無事です。他の女御様方にも害は御座いません。火元は麗景殿の一部のようでございます！」

問われた役人も叫び返して、麗景殿の方へと走り去って行ってしまった。

御所中が騒然としている。どうやら人が出ていないらしいが、その騒ぎは結局夜が明けるまで続いてしまっていた。

京の街で火事は決して珍しい物ではない。むしろ、田舎よりも可燃物に囲まれた暮らしをしているので、ちょっとしたボヤから、邸を舐めつくす大火まで、火事は日常茶飯事だった。

勿論御所と言えども例外ではない。幾度となくボヤや火事騒ぎは繰り返されている。時には他の邸に御所の機能を移したことであった。役人たちの速やかな処理により、大した大事にならずに済んでいるというだけの事だ。

しかし、御所での火事は色々な思惑をかきたてられてしまう。今回の火事もそうだった。

なにせ、中宮様がお帰りになる直前に、そのお住まいになるべき麗景殿で起こった火事である。しかも梅壺の更衣様の御父上の御謹慎中という、最悪の時。当然、一層冷たい視線が梅壺へと注がれた。

しかもその視線は、私への疑惑という形で現れたのだ。

私が梅壺の更衣様に心を寄せているのは一目瞭然だった。しかも、私は大将様と関係が深いという事になっている。その大将様の御父上である大納言様が、更衣様に圧力をかけられ、私が面白く思っていない事も、大将様に反抗的な視線を送っていた事も、皆が知っている。さらには言い争う声を聞いたという者までいた。昨日の話に尾ひれがついたに違いない。

その夜のうちに起こった火事。しかも私は他の女房よりも、先に退出しているのだ。

麗景殿では私が大将様との痴話げんかの果てに、麗景殿に火をつけたという話が持ち上がってしまったらしい。

私が更衣様に後ろめたさを持っていた事や、大将様に気強い態度を取っていた事が、さっそくあだになってしまった。大将様の氣遣いが当たってしまった訳だ。当然麗景殿から私への苦情が来た。

「命婦に使われている、花房とかいう方を女雅楽から外していただけませんか？」

しかしこれは、小侍従がきつぱりと断ってしまわれた。私の琴は、主上も、更衣様もご所望だからと。

「何の証拠もないのに、言いがかりで主上のご所望を無視する訳には参りません。女雅楽は予定通りに行われますので、そちらもつまらない噂に浮足立つのはおやめ下さい。中宮様への御威光にかかわりますよ」

ドンと構えた小侍従にこんな事を言われたら、あちらもぐずぐずとは言えないらしい。やはり小侍従は優れた女房らしく、向こうもしぶしぶ承諾した。

こんな風の後宮での身の振り方を身につけ、周りの意見に振り回されず、更衣様の行く末にいつまでも心を傾けられ続ける。

これは思った以上に大変な、そして素晴らしい生き方だ。小侍従の姿を見て私は本当に恐れ入ってしまった。

小侍従は御自分の事を「今もって現役」と、胸を張っていた。私は下世話な皮肉で返したけれど、そんな事をして良いような言葉ではなかったんじゃないか？ 主人と定めた方を愛し、守り、お育てし、我が子も育て、さらに男君にも愛される。その男君たちにどんな態度を取られようと、女人の知恵とやらで乗り切ってきたのだろう。

小侍従は家庭に入らずに今だに御所勤めをしている。おそらく男君とも色々あったに違いない。それでも自己を通しながら、他人の事も認めて生きている。これこそ、女人らしい、真心のある生き方

なのかもしれない。

私は挑み心で凝り固まっていた自分を反省せずにはいられなかった。我を張ってばかりでは琴の音で人の心など表しようもない。大将様も、小侍従も、ここまでして私に琴を弾かせようとして下さっている。私の琴の音は、私ひとりの武器なんかじゃなかったんだ。

現実的な私への疑惑は、大将様が役人へ証言して下さったことで晴れたらしい。でも、火が出たのは私と大将様が会った後のことだし、証人が大将様という事で、人の目は一層厳しくなってしまったけれど。

それでも私は胸を張って麗景殿へと向かう。大将様とのお約束通り、自分の琴の音を信じるために。

大勢の好奇の目の中で琴を据えて練習を始める。

正直、お父様や、お義母さま、康行と言った故郷の顔が懐かしい。私はここで何をしているのだろうと思う。

でも、ここで私を認めて下さる方が一人でもいる限り、私は演奏をやめたくない。やめられない。

私は明日の雅楽で、琴の音に何を込めようか？ そう迷いながら、ただひたすらに琴の稽古に励む。

外野の声に心を惑わせないようにと、集中をしながら、私は一心に琴を弾いていた。

窮地

そんな練習の真つ只中に、叔母の姿が躍り出たのは最後の合奏曲の仕上げに入ろうかという頃だった。

女雅楽は明日に迫っていたので大がかりな合奏を合わせて稽古できるのがこれが最後。皆が気を引き締めたところだったので、叔母の姿は一層目立ってしまった。

しかし、叔母の顔色は芳しい物ではなかったので、私はすぐさま叔母のもとへ駆け寄った。

「どうしたの？ また、何かあったの？」
すぐさま叔母に聞く。

「それが、こんな時間になってもあなたのご衣裳が届かないから役人に問い合わせたら、あなたの衣裳が行方不明になっていたの。どちらの御殿に問い合わせても出てこないのよ。こんなこと一度もなかったのに」

宮中での催し物は、それなりの格式が要求される。表立った晴れの儀式は勿論だが、今回のような後宮の女人達による私的な催しであっても、そこに主上や、様々な公達達が居並び、それぞれの才を競う場であれば最低限の格は守られなければならない。それは当然衣裳にも及ぶ。用意出来なければそれぞれの女御、更衣様方の顔がつぶれてしまう。勿論後ろ盾をしている高貴な方々もだ。

「役人の手落ちにも程があるわ。こちらの更衣様のお立場を甘く見て、舐められてしまっているのかしら？ 上の役人に言って、責任

を取らせないと」

役人の責任となれば、手落ちのあった役人には出世の機会が遠のくだけでなく、彼の家族、一族郎党にまで影響が及ぶはず。

後宮勤めの上？（身分の高い女房）である叔母には下つ端の庶民の役人が、そう言う責任を負わされる事がどれほど大変な事か分かってはいないだろう。そのあたりの感覚は私の方が見当をつけやすかった。それに、

「今は役人の責任を問題にしている時じゃないわ。明日の衣装の事を考えないと」

私達は小声で話していたが、状況を察したのだろうか？ 何処からともなく忍び笑いが漏れている。私達をチラチラと窺う視線も不愉快だ。だが今はそんな事を気に留めている場合ではなかった。

「桂は主上にいただいた桂があるわ。これ以上の礼装は無いはずよ。あとは持っている中で一番いい物を着る他にないでしょう」

「桂以外は私の持っている中で一番良い物を着ればいいわ。あなたには少し地味かもしれないけれど」

確かに叔母はとても質の良い、鮮やかな浅縹（あさはなだ、藍色）の唐絹を持っていた。まだ腰結（女性の成人の儀式）を済ませて間もない私には多少地味ではあるが、格式は守られる。

「でも、裳をどうしよう？」

裳というのは腰から下に身につける女人の装束で、格式の高い場

では自らより上の方々にかしこまって見せるための、正式な礼装に欠かせない物である。勿論御所に上がっている以上、今も身につけている物はあるが、華やかな場で年不相応な唐衣と合わせて着るのは、不自然さが目立ってしまう。

本来、十二単と言われる女房衣装はすべてが統一された合わせによる、総合的な美を競う衣装だ。

だから、今回のような催し物があれば、誰もかれもが早いうちから衣装の織り、染め、重ね目、焚き締める香にいたるまで統一された物を用意する。

しかも私はまだ成人して間もないために、あまり衣装の用意も多くは無い。仕える者の姿や容姿はその主人の威厳にかかわる。本当なら年若い私などは精一杯めかしこんで、梅壺の服飾感覚をお見せすべきところなのだ。

「しかたがないわ。こうなったら更衣様にご相談申し上げます。黙っていても更衣様にご迷惑をかけてしまうのだから」
そう言っただけは私を更衣様のところへと引っ張っていく。

これは役所の手落ちなどではない。おそらく誰かが仕組んだ事に違いない。更衣様の後ろ盾の父上は只今ご謹慎中の身。とつさに動きがとれない事を知った上で、あわよくば私が女雅楽から外されるように仕組み、私を窮地に立たせようとしている者がいるのだろう。

私達が更衣様に事情を説明すると、更衣様はしばらく考え深げな顔をなさった後、小侍従に手紙を書く用意をさせた。そして、何

事がご決心された表情でお手紙をお書きになると、それを小侍従に渡す。

「よろしいのでございますか？」

小侍従が手紙を見て更衣様に確かめると

「ええ、これで分かっていただけると思うの。もし、断られた時には私の裳を花房にお貸ししましょう。大丈夫よ、心配いらぬわ」

そう言つて更衣様は私にほほ笑まれる。一体どなたにお手紙を書いたのだろうか？

「あなたは早く戻つて、琴の稽古をしなさい。私達はあなたの琴を楽しみにしているのだから」

更衣様にそう言われて私は後ろ髪を引かれながらも琴の稽古に戻つて行つた。

私に裳をお貸し下さるといつても、私と更衣様とはあまりにも格が違うすぎる。お気持ちは嬉しいが叔母の古い裳を借りた方がましだろう。

衣装で琴を弾くんじやないわ。私の琴の音で、皆に衣装の事など忘れさせて見せるわ。

気強くそう思い込もうとしても、やはりちぐはぐな衣装を着た自分の姿を想像すると気が重くなる。大将様が心配そうな視線を下さつてはいるが、今、大将様と言葉を交わせば、また何を言われるか分かつたものではない。

もうこれで何度目の我慢だろう？ そう思いながらも、私は口を真一文字に結んで、黙って琴を弾き続けた。

その後、一晚中私の衣装についてあちこち訪ね回ったが、結局気の毒がられたり、意地の悪い視線を投げかけられるだけで、衣装は出てこなかった。あまり赤い目で御前に出る訳にも行かず、明け方は叔母の局でうつらうつらしていたが、叔母の声で起こされてしまった。

「ご衣裳よ！ あなたのご衣裳が届きましたよ！」

「衣装が届いたって、何処から？」
私は寝ぼけていた。

「中納言家の一の姫様からですよ。あなたのお仕えするご主人さまから、お祝いの品として届けられたんです！」

私はいつぺんに目が醒めて飛び起きた。見ればそこには見事な紅梅色の唐絹と、それに合わせた裳がとりそろえられている。主上から頂いた海老茶色の袴とも色を合わせてあり、梅壺の代表として琴を弾く私にはピッタリの衣装だ。

私はとても姫様にこういうお願いが出来る立場ではない。と、言うことは。

「昨日の更衣様のお手紙は、一の姫様に宛てられたものだったんだわ」

中納言家の一の姫様は大将様とご結婚なさる前には、女御として御所に上がられるお話のあった方だ。

つまり、もしかすると、ここで更衣様方と妍を競わっていたかもしれない、競争相手だったかもしれないお方。しかも更衣様は主上に一番古くから寄り添っておられる。その更衣様が私などのためにその身を下げられて、一の姫様にお願いのお手紙を書いて下さったのだ。そして姫君様も、その意をお汲み取りになって私に衣装を送って下されたのだ。

衣装にはお手紙が添えられてあった。しかも御真筆で。

「あなたは弾き続けるのよ。そうするだけの価値があるわ。決して迷われたりしないように」

形式的には使いの女房が私に送った手紙になっているが、私が姫様のご筆跡を見間違える筈は無かった。

本当なら一生私などは姫様から直筆のお手紙などももらえる身ではないのに。

私はどれほど多くの人に恵まれているのだろう。身分が低い？ 育ちがいやしい？ そんなのなんだって言うの？ 私はどこに行っても、こんなにも大勢の人に愛されているじゃないの。郷里にいた時も、都に出てからも。

今夜、私が奏でる琴に込める思いは決まったわ。私を愛し、心寄せて下さるすべての方々のために。人は人を利用出来たりはしない。

人の心はこうした思いだけが動かせる。

つまらない張りあいなど、真心や友情の思いの前では足元にも及ばないという事を、この、琴の音に寄せて演奏しよう。

私は体の内から充実した思いが沸き上がってくることを感じた。今日はいい演奏が出来そうだ。

取り急ぎ姫様へのお返事を書き終えると、私は早速装束にそでを通した。重い礼装に身を包み、しっかりと化粧を施すと、いつもとは違う私が鏡の中にあった。

衣装は女人の心を引き立たせるものだが、今日の衣装は特別だ。

主上が贈って下さった、私なんかを認めて下さった桂を身にまとい、更衣様と姫様が私のために心を尽くして下さった唐絹と裳を身につけて、私はいま、誰よりも守られていると思う。幸せ者だと思ふ。

もう、卑屈になったりなんかしない。誰にも後ろめたさなんて感じない。少なくともこの衣装を身につけている間は、誰よりも強くありたいと思う。

私はお礼を申し上げるために、更衣様の御膳に向った。小侍従から渡された扇を広げて、深々と頭を下げた。

「顔をあげなさい」

更衣様にそう言われて、私は顔をあげる。

「美しいわ。女人が最も美しく映える時って、こういう時なのね。自信と誇りを持って、まさに全力を出し切ろうとする姿。綺麗ですよ。花房」

あまりの讃辞に私はお礼を言うつもりが言葉を失ってしまった。

「お礼の言葉はいらないわ。あなたは琴の音で十分、その言葉を聞かせてくれるから。あなたを見てみると、私はこれからここまでのように生きていくべきかが見えるような気がするの。楽しむ心、感謝する心、挑んで行く心。そんなものをあなたは教えてくれた。短い時間だったけれど楽しかったわ。あなたのような女房を召し使えるなんて、中納言家の姫君が羨ましい。また、機会があったら、是非、御所に琴を弾きに来て下さいね」

「ありがとうございます。ええ、ぜひともまた、更衣様にお目にかかりたく存じます」

私はそう言うのが精いっぱい、ただ、ひたすら頭を下げ続けていた。

でも、私は再び顔をあげた時に、常につつましやかで、私をほほえましく見て下さっている、今の更衣様の方が、ずっと美しいと思っただ。横に控えている小侍従の目も、同じように思っているだろうと思っただ。

女雅楽（前書き）

歴史や当時の文化に詳しい訳ではないので、こんな風な世界だったんじゃないかと、イメージだけで書きました。

女雅楽

日暮れとともに女雅楽が始まった。宮中では定められた年中行事の他にも、こついった管弦の遊びや物合わせと言った遊びの行事が頻繁に行われるらしい。

遊びと言ってもそこは社交の場である。どちらかと言えば非公式な催し、宴と言った色合いが濃いものになる。

特に後宮では「物合わせ」は行われることが多いらしい。女御様や更衣様方が競われるのにちょうどよいからだろう。

「物合わせ」とは、何か一種類の物を、様々な趣向を凝らして互いに披露しあい、優劣を決めるといふ遊びである。

良く行われるのは「香合わせ」、「絵合わせ」、「歌合わせ」。少し趣向を凝らすと「春秋あらい」と呼ばれる春と秋、それぞれに分けて漢詩や歌を合わせる遊び方をする。

例えば「香合わせ」では、様々な香の調合による香りを競うのはもちろんだが、そこに使われる香炉は勿論、その香に合わせた衣装、装束、小物、当の主人と女房達、使われる子供たちにいるまで、色目や姿形を統一して、その調和と華やかさ、交わされるやり取りのゆかしさまでもが競い合わされるのだ。

勿論、判定をするのはその道の専門家で、遊びと言っても真剣勝負。しかも金や物をそろえるだけでは秀でる事は出来ない。人や物を調和させ、その場を盛り上げるだけの知識と感覚が問われる。それぞれの御殿の方々の面目もかかっている。

その中で総合的に特に優れていると判断されれば、殿上人たちに一目置かれるようになり、宮中での権限や、発言力にも影響を及ぼしてくるのだ。

今夜の女雅楽にも、そんな雰囲気の色濃く反映されている。それぞれの御殿から楽の名手が選出され、それに合わせて、皆、美しく着飾っている。

お帰りになった中宮様を歓迎する意味もある雅楽だが、その中宮様のおられる麗景殿の方々は、咲き始めたばかりの桜を意識したような、桜重ね（表を白、裏を濃いピンクにした特有な着物の重ね方）の衣装を中心に、萌黄や若草色を添えた爽やかな衣装の女房や少女達が、美しい柄が打ち出された白の唐絹に高貴な紫を重ねた格調高い装いの中宮様を囲んでいる。

本当なら麗景殿で行うはずだった雅楽だが、昨夜の火事騒ぎで場所を主上のお休みになる清涼殿に移したので、中宮様の周りにも御簾とは別に几帳を巡らせているが、その几帳にも白と薄紫が、裾にかけて濃くなっていく、美しい布がかけられている。春の盛りを思わせる、美しい装いだ。

同じ春でも私達梅壺は、紅梅色や海老茶色に、白をきりりと加えた早春の引き締まった色で統一されている。

残念ながら、実際の梅の季節は終わろうとしているが、梅壺の象徴は常に梅の花なのだろう。

小物や衣装の柄なども、梅の花で統一され、浅縹の叔母や、青鈍色の小侍従でさえ、刺し色に紅梅色を重ね、華やかな梅柄の扇を手にしている。

御簾の外に列席している公達も、各大臣の方々や、それにまつわる人々。そして、楽の音に秀でた方々が、私達の演奏を聴き比べられるはずである。いうなれば「音合わせ」とでもいったところだろうか？

女人達は皆、琴や琵琶を手にし、童殿上している可愛らしい子供たちは、横笛や太鼓、ひちじりまき筆箒、笙の笛などを手にしている。

主上も席にお着きになり、殿方達の席では、すでに酒などが酌み交わされているようである。女雅楽の始まりだ。

大将様の高らかな笛の音を合図に、皆、一斉に演奏が始まった。

横笛の清らかな音色。笙の笛や筆箒の荘厳な音。そして女人達の琴と琵琶。まるで天界のような荘厳な音が、春の夜に響き渡って行く。この世の音ではないようだ。

しばらくすると興に乗ってこられた公達などが、漢詩などをゆるゆると吟ぜられる。

そうすると他の公達も、負けてはならぬと催馬楽呂などを唄ったりする。男君たちにとっても、この機会は良い披露の場になるらしい。

声に自信のある方らしく、良く通る、美しい声を、ゆったりと響かせ、調子を添えてお唄いになる。

やがて曲が変わると笛や太鼓の音は止み、女人達の弦の音だけが響き渡る。

そうするとその音に聞き入りながらも、

「誰それに召し使えるあの女房はなかなかの音を聞かせる」だの、

「あの女人の琵琶の音は聞かせどころを良く知っている」だのと評論が始まっている。いよいよここからが本番か。

女人達の演奏にも一層の熱がこもってくる。その時だった。

「ピン！」

無様な音を立てて、私の琴の糸が切れてしまったのだ。

私は一瞬、この悪夢が現実とは思われなかった。思わず手が止まり、琴を見つめる。

琴の糸は比較的切れやすいものだ。私の使う箏の琴の中間に張られた糸は、より高く繊細な音が奏でられるようにある程度の力をかけて張っているので、いささか細くなっている。「中の細緒」などと呼ばれるゆえんだ。だから余計に切れやすい。琴を弾いたことがあれば誰でも知っていることだ。

知っているからこそ、大事な席に出る前には、入念に糸の状態を

確認する。今日の私だって何度となく確認した。

いくら切れやすい糸だと言っても、そんなに急に切れる物ではないはずなのに。

演奏は続いている。それでも冷たい視線が突き刺さる。時折遠くから忍び笑いが漏れる。

「あなたは弾き続けるのよ」

姫様のお言葉を思い出した。今、あきらめてはいけない。

今、私がここにいるのは、私の力だけではない。私の琴にはいろんな人の思いが込められるべきだ。私が奏するのはその人たちの思いだ。琴は私にとってはただの道具ではない。

私が今宵、奏するのは、私を思ってくれる人たちの愛情。私を慕ってくれる人たちへの友情。それは甲高い音に頼らずとも表現できる世界。

私は高音を捨てた。高い音で弾くべきところをむしろ低く、やわらかく丁寧に弾いてゆく。

人の優しさ、思いやり。そんな思いに高い音や、人の気を引くような派手な音は似つかわしくない。低く、やわらかく、さりげなく。他人の心を思いやる時の寄り添う心。そんな心の伝わる音。

気が付けば他の琴や、琵琶の音が止んでいた。今、私は一人で私

を支えてくれた人たちの心を、みんなに伝えている。この世にはこんなにも優しい音がある。美しい心があるのよ、と。

曲が終わって、私は糸を張り直す。次の曲にはまた笛や太鼓の合奏に戻り、間を縫って春の唄が軽快に唄われたりなどしている。座の人々は、一層心柔らかく、華やいだ気持ちになったようである。私はあらためて心をこめて人の心の優しさを奏で続ける。

中空に美しい月の登る中で、女雅楽は華やかに繰り広げられる。

その夜、私達梅壺は、もっとも美しい演奏をしたと評価され、主上からのお褒めのお言葉と、更衣様へと美しい絵物語の巻物をたまわった。お里下がりの際の間のよすがとされるようにとの主上のお心づかいと思われた。

それでも主上は中宮様と、お生まれになって初めてご覧になられる男御子様とお時間を楽しみななされていたようで、さっそく麗景殿へとお出ましになってしまわれた。

それはそうだ。宮中のしきたりに阻まれて、ご自分のお子様を今までご覧になる事さえできなかつたのだから。

しばらくは主上も、やっと果たした我が子との対面に夢中になれることだろう。考えてみれば更衣様のお里下がりは、良い間を計る事が出来て、かえって良かったのかもしれない。

翌日、私は更衣様方よりも先に御所を退出することになった。更衣様もお支度に忙しく、ゆっくり別れを惜しむ間は殆んどなかったが、

「あなたには、また御所で琴を弾いてもらう約束がありますから。これからも楽しみにその日を待ちましょう」と言ってお別れした。

更衣様のお言葉は勿論嬉しかったけれど、私のそのつもりでいるのだけだ。

不思議な事に、私は昨日、姫様から頂いたお手紙を見て以来、早く姫様の元へ戻りたいと思ってしまっていた。

郷里は遠くに離れているけれども、あのお手紙で姫様のおそばへの懐かしい想いがいつぱんに湧いてしまっていたのだ。私は早くも都の中に、心のふるさとでも言うべき場所を、姫様の元に作ってしまったようだ。

私もこうして都の人間になって行くのだろうか？ 私は自分の心の変化に戸惑いと、少しばかりの寂しさを感じていた。

私は一人で女車に乗り込んだ。来た時のように叔母に付き添われてはいない。叔母は更衣様の女房として、更衣様の御実家のお屋敷にこのままついて行かなければならないのだから。

私は牛車の中から離れていく御所の姿を感慨深く見送っていた。

すると一頭の馬に乗った公達らしい人影が、車のそばへとかけ寄って来た。

良く見ると、あろうことが大将様だ。近衛の大将ともあろう方が、お伴の一人もつけずに私の車に寄ってくる。

「なんてことなさるんですか？ 今頃お伴の方々が困っていらっしやるでしょうに」

私のあきれ声を愉快そうに聞きながら大将様はおっしゃった。

「なあに。時期に皆、気がついて追いかけて来るでしょう。いつも私は彼らに小言を言われながら追われているんです。たまには彼らに追い駆けさせないと。それに私は自分の妻の元に帰るんですよ。誰にも文句は言わせません」

「姉君様の中宮様も、ご心配なさるでしょうに」

「あつちは主上と親子の団欒ですよ。私がいたらかえって野暮ってものです。それとも姫は、主上の近衛の大将が護衛では、ご満足いただけませんか？」

そう言って大将様は楽しげに笑われる。

何だか私も笑いながら、御所という場所を後にしてしまった。

女雅楽（後書き）

「御所編」終了。次は「苦惱編」って感じ。主人公に悩んでもらいます。

撫子

康行は広い所に立っていた。目の前には粗末な作業小屋が立っている。

彼は緊張していた。作業小屋の陰に隠れて、相手の気配をうかがっている。

花房が襲われようとしている。康行は小屋の陰から身を躍らせ、一人はみぞおちに当て身をくらわした。その間にもう一人が花房に斬りかかろうとするのが見えた。思わず太刀を抜く。

すぐさま相手に反撃される。とっさに身体を翻し身をかわす。ほとんど反射的に太刀をふるうと、太刀が相手の身に当たり、いやな感触とともに振り斬られる。生温かい返り血が、彼の全身に降りかかった。

するとその血が康行の身体にしみこみ、侵食し始める。力が抜け、粘着質な血が鼻と口を塞ぎ、息が出来なくなった。

そして何処からともなく声が聞こえる。「苦しめ、苦しめ」と。

「うわああああ！」

康行はガバツと身を起こした。また、あの夢だ。

「大丈夫か？ 康行」

共に旅をしている仲間が、眠そうな目をこすりながら声をかけて来る。

「ああ、すまない。起こしちまったな」

「いや、どっち道夜明けだ。仕度をして出発した方がいいだろう。そうすれば今日のうちに、都に入る事が出来るはずだ。草枕の旅はもう結構だよ」

そう言って先に立ち上がると、つないでいた馬達を軽くたたいて、機嫌をうかがっている。

「そつだな。早く立とう」

康行もそう言って、馬の一頭に声をかける。

全く俺は度胸がない。仲間たちにも心配をかけている。実際皆は、俺が京に旅立つのをやめるようにと言ってきた。故郷での様子がよほど悪く見えただろう。

だが、丹精込めて育てた馬達の献上に立ち会わずにはいられないし、花房の事もやはり気になる。

故郷に居る時、花房が御所に呼ばれ、帝の前で琴を弾くと聞いた。

花房はますます自分から離れて行く。我々下司の者にとって、御所や、殿上人などは、遠い遠い雲の彼方の世界。彼女はそこで時の帝に認められた人物となった。

もう、彼女には簡単に近寄ることはできない。花房はこのまま琴を弾き続ける事を望むに違いない。そういう生き方を望む以上、そして、高貴な方々が彼女の事を認めている以上、花房はもう、自分と同じ下司の身分とは言えなくなるだろう。

自分は花房には近寄れなくなる。いや、近寄ってはいけないのかもしれない。

遠い昔、「子馬が欲しい」と、自分の着物の袖をつかんでねだつた少女は、今、中納言家の女房として、立派にその地位を手に入れた。普通なら我々いやしい身分の者には、決して手に入れられないものを、彼女は手に入れたのだ。

これからは今まで通りではいられない。それは分かっている。

だが、やはり花房の気性を考えると、彼女の行く末が気になった。

あの花房の事だ。決して素直に若君の妻になるとは思えない。何としてでも中納言の姫君のそばにいる事を望むだろう。しかしそれが、世間体やしきたりに縛られて暮らす貴族の世界で通用するのだろうか？

花房がいくら気強くしていても、若君と姫君の庇護にも限りがあるのではないだろうか？

それでも若君が強引にでも花房を娶るかもしれないし、それなら彼女の地位は確定的になるだろう。しかしそれでは花房は姫君との板挟みに一生苦しむ事になる。

自分の嫉妬心を抜きにしても、そんな事態はできれば避けさせたい。若君を信用してはいるが、それだつて状況次第だろう。

あるいは他の貴族の情人になるか……。あの花房がそう簡単にそんな打算的な事をするだろうか？ なにしるあいつは武蔵の国のじやじゃ馬だ。

ここまで考えて康行は我に帰る。

自分が花房の心配をしても、花房に近寄ることはできない。むしろ彼女の出世の邪魔になるばかりだろう。本当なら彼女のことはきっぱりと忘れる事が一番いいはずだ。

それなのに、彼女が気になって、馬の献上をいい訳に、また京の都に戻つて来てしまった。

京に来たからには、自分は侍者として若君の護衛をするしか、京にとどまるすべはない。だが、今の自分は悪夢にうなされ、花房への未練を断ち切れずにいる。こんな状態で都に居て何になるのかは分からないが、故郷でじつとしていいる事も出来ない。

康行は自分の弱さに苦悩をしながら都に入ろうとしていた。

京の都は相変わらず、賑やかなところだった。早くに出立したのが幸いし、まだ、日が傾く様子もない内に康行達は大納言家に到着する事が出来た。

馬を厩に無事納め、下人達が休む小屋に入ると、いつものように

邸の下女達が康行達の旅の疲れをねぎらってくれた。手足を洗えるように清らかな水を用意してくれ、僅かな酒と、ささやかな干し魚を少し用意してくれる。

その中に見慣れない顔があった。花房と同じくらいの年頃の少女だった。

「初めて見る顔だな？ 最近勤めに出たのかい？」

少女はもの慣れぬ風に恥じらいながらも、康行に足を洗うための藁を編んだものを手渡し、はきはきと答える。

「ええ。つい、十日前にお邸に入ったばかりなの。至らないところが多いけれど、よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる。

身のこなしなどがまだ垢ぬけていない。いかにも上京したばかりの仕草だ。

「慣れるまでは大変だろうが、慣れてしまえば都は若い娘には楽しいところだよ。早く友人でも作るといい。故郷はどこだい？」

「若狭。実はこの干し魚も、父と母が私に持たせてくれたものなんです」

「じゃあ、これは君の故郷の味なんだね。やはり若狭は豊かな国だなあ。こんなにうまい魚が獲れるなんて」

「獲りたての生魚はもっとおいしいわよ。私の父さんは漁師だったの」

「そうか。これはお父さんが獲った魚なんだね」

すると少女は悲しげに眼を伏せた。

「いいえ。これは母さんが買ったものなの。父さんは病気に掛かって海に出られなくなってしまったから」

これは余計な事を聞いたかもしれない。彼女が親元を離れて不慣れな都の邸勤めに出たのは、おそらく父が仕事に出られなくなったせいだろう。ひょっとしたら口減らしの意味もあるのかもしれない。

「ねえ、都って、そんなに楽しいところなの？ 私まだ、あまりお邸の外に出た事がないの」

少女が明るく言う。康行の考えた事の見当がついて気を使ったのだろう。

「ああ、きつと楽しいだろう。だが、物騒な事も確かだ。一人では出歩かない方がいい」

「それなら、今度私を町に連れて行ってくれる？ 私、まだここに知り人も少ないし、そんなにお邸を出た事もないの」

田舎者らしくすんなりと心を開いて、甘えて来る。自分も昔はそうだった。花房もほんの少し前まではこうだったのだろう。

そういえば他人に心を開く様子は、花房に似ている。年の頃も同じくらい。不慣れな暮らして緊張した態度も見えるが、こうして甘える時には瞳の奥に意思の強さを感じられる。そんなところも似て

いるような気がする。

「ああ、かまわないよ。君、名前は？」

「撫子。ありきたりでしょう？」

「そんなことは無い。可愛らしい名だよ。俺は康行だ。若の警護を務める侍者だ。侍所か、厩にいつもいるから、見かけたら声をかけてくれ」

「康行……いいの？」

「まだ、知り人も少ないんだろう？ 一人じゃ心細いだろう。遠慮しなくていいさ」

そう笑いかけると、撫子は少し恥じらうように、ほんのりと笑った。

こういふ所は花房とは違うな。何だか可憐な可愛らしさがある。

「さて、もう一度馬達の様子を見るか」

そう言って康行は腰を上げると、小屋を出て行った。

その後ろ姿を撫子がいつまでも見送っている事に気づきもせず。

町にて

その数日後、康行は約束通り、撫子を町に連れ出した。

「すごい人の数ね」

「京ではこれが普通さ。どうだい、邸に少しは慣れたかい？」

「ええ、少しは」

撫子は初めのうちこそ心細げに康行の横を黙ってついて歩いていったが、物売り達のにぎやかな声に誘われて、あちこちの品を覗き始めた。

「まあ、綺麗」

高貴な人々が仕立てに使った布の小さな切れ端が、色とりどりに並べられている。撫子の様な下女の娘は、身体を動かす作業や、食べ物を扱う時には、こういう端切れで長い髪をきりりと結ぶ。撫子は髪をまとめる時は粗末な麻の、地味な端切れを使っていた。

「これなんか、似合うんじゃないか？」

そう言って端切れを手にとってやると、撫子は嬉しそうに顔をほころばせる。こういう事には疎い自分だが、やはり若い娘はこんな物への興味がつきないのだなと実感した。

「これをくれ」

そう言って端切れの代金を払ってやる。撫子が慌てて制しようと

するがかまわず払う。

「買ってもらう訳には……」

そう言つて撫子は自分の懐を探ろうとするが、

「ここは黙つておぐられておけ。気にすることは無いから」

と言つて、人混みに足を向ける。撫子も慌ててついてきた。

「その、懐の金はお前の両親がなけなしの金をお前のために持たせてくれたものだ。無駄遣いするんじゃない」

そう言つと撫子もハツとして、懐から手を離した。

「それに撫子はまだ知らないだろうが、都は何でも値が張るんだ。

田舎とはモノの値段が違うのさ。簡単に懐を開けると、あつという間に金なんて無くなってしまう。よく、覚えておいた方がいい」

「怖いんですね。都って」

「そうさ。だから田舎ものが一人で出歩いたりしちゃいけない。まして若い娘の身ではなおさらだ。だが、用心していれば楽しい事もある。おや？ あつちで軽業を見せているようだ」

康行は撫子を人だかりの方へと引つ張った。見ると身軽そうな小男が、逆立ちをしたまま蹴鞠のまりを器用に足で回し、やんやの喝さいを浴びていた。

次は大きなざるを回し、ついには畳（当時は四角いものを座布団の様に使った）をくるくると器用に回してみせる。

こんな見せものなどみた事もなかったのだろう。撫子は夢中になつて目を皿のようにしている。この年頃の娘は、花房でなくともこんな風に好奇心が働く物らしい。

小男が回し終えると、拍手とともに小銭が彼に向けて投げられる。小男はさつき回していたざるの中に小銭を拾い集めていた。

「器用なもんだな。あの、琴弾きの三日夜の宴にはちょうどいいんじゃないか？」

隣にいた下卑た男が昼間からほろ酔い加減で、連れの男にそんな事を言っているのが耳に入った。

「なんだ？ あの琴弾き、ついに大将殿の妻になるのか？」

町の男どもが「あの、琴弾き」と噂する時には、はっきりとした軽侮の色が含まれる。今ではちょっとした色ごと話の枕詞のようにも使われているのだ。本人は知りもしないのだろうか。

「違うさ。あの女人を召し使っている中納言家で、あの琴弾きを家臣の養女にしようと言う動きがあるらしいんだ」

「なんだってまた」

「なんでも今、飛ぶ鳥を落とす勢いの三条殿に対抗する手立てらしい。三条殿の北の方は琵琶の名手だから世間の注目で負けたくないんじゃないかって噂だ。大納言家も何か絡んでいるらしいぞ。詳しい事までは知らないが」

「それでどうしてあの琴弾きが、結婚するんだよ」

「鈍いなあ。どうして中納言家が養女にしてまで後ろ盾すると思う？ あの琴弾きに今更よそへ逃げられちゃ困るからさ。実家を出た女はいい男が出来ればどこに行くとも分からだろう？ あの琴弾きのおかげで、中納言家は注目の的。大納言様にも常に一目置かれているんだからな」

「それにしたって、いくら目立つと言っても所詮下司の娘じゃないか。なんだってそんなに手元に置きたがるんだろう？」

「下司と言っても今の母親は育ての親で、実の母親は一応貴族だったらしいんだ。その母親の実家が、昔、中納言家と関わっていたらしいぞ。ま、ただの噂だな」

聞き捨てならない噂を聞いた。花房が養女に？ 彼女の母親がどんな人だったのかは知らないが、中納言様は本当にそんな事を考えているのだろうか？

「すまない。今日はもう、帰ってもいいか？」

撫子に聞くと、撫子は暗い顔で頷いた。

「今度、また連れて来るから」

そう言ってやるが、撫子は軽く首を横に振る。

「それはいいけれど。康行は花房様を助けるために、危ない目にあつたそうね」

「俺は侍だよ。危ない目に合うのは仕方のない事だ」

「本当はそんな目にあつたのは初めてだったんでしよう？　花房様を助けるまでは人を斬つた事もなかつたそうじゃないの」

撫子が真つ直ぐに目を見つめて言う。真剣な表情だ。

「人なんてむやみに斬る物じゃない」

「花房様は康行とゆかりの深い方なの？」

撫子は視線を外さずに康行を見つめ続けていた。悲しげな眼だった。

「幼馴染だ。もつとも俺の親父は花房の父上に使われている厩番だが」

「康行は花房様が好きなのね」

撫子は視線を外し、さっき買ってやった端切れを握り締め、そこへ視線を落とした。

康行は返事が出来ずに黙り込んだ。

「聞いたの。康行は花房様のために命懸けで人を斬つて、それから毎晩のように夢にうなされてるって。侍所の人たちはみんな心配しているわ」

「もう、花房は俺の近づける女人じゃない。それに俺がうなされて

いるのはあいつのせいじゃない。俺が弱いせいなんだ。そのうちやんと吹っ切れる」

いや、吹っ切ったりなど出来るのだろうか？ 今、噂を耳にしただけで、こんなに心がざわついていると言っのに。

「だって、それでも花房様が好きなんでしょう？ その上、人を斬った事に苦しんで、毎晩うなされてばかりいるんでしょう？」

撫子がそう問いかけた。まるで今にも泣きそうな顔だ。撫子の方が苦しんでいるような顔だ。

「大納言家も関わっていると云っのなら、きっと若君のことだろう。若君は俺の主人だ。事の真偽を確かめたい。早く帰ろう」

康行は撫子に返事もせずになんと言っつと、人混みの中を歩き始めた。

「三条殿の姫君を若君の妻に？」

邸に帰るとさっそく侍所に戻り、町の噂を仲間に知らせると、仲間一人がそういう噂があると教えてくれた。

「ああ、お前は出かけて知らないだろうが、下男下女の間で今日はその話で持ちきりさ。中納言家の姫君も気の毒だな。まだ、御新婚だと言っのに」

これは、口さがのない都人がすぐに話に飛び付くだろう。京を牛

耳るこの、大納言家と、今、最も勢いがあると言われる三条家が、縁故で結ばれようとしているのだ。中納言殿は大層焦っておられるに違いない。

その中での花房への養女の話。これは果して花房にとって、良い話になるのだろうか？

「康行」

気がつくとも撫子が声をかけて来ていた。

「花房様が心配なのは分かるけど、花房様はもう、御簾のうちの方なんでしょう？ 康行にはどうする事も出来ないことよ。考え過ぎない方がいいわ」

心配そうな、悲しげな眼で撫子が言う。こんな風に女人に心配された事など今までなかった。優しい娘だ。

「分かってる。花房のことはきつと、若君が見ていてくれる。俺なんかじゃ口を出せない事なんだ」
「そついいながら口調に苦みが混じるのをどうする事も出来ない。」

すると突然、頬のあたりが温かくなった。撫子が自分の手を康行の頬に寄せていた。

そして康行をじっと見つめる。やはり、悲しそうな眼だった。

「綺麗な端切れを、ありがとう」

そつ言っって手を離し恥じらうようにうつむくと、撫子は足早に去

って行った。

その頬に、撫子のふれた指のぬくもりを微かに残して。

身分

私は久しぶりに、本当は半月にも満たなかったのだけれど、気持ちの上では本当に久しぶりな思いで中納言家に戻ってきた。

とにかく早く、自分の女主人であるところの、一の姫様にお会いしたかった。話したい事は山ほどあるけれども、何より先にお礼を申しあげたかった。勿論、女雅楽での衣装のお礼だ。

あの衣装はただの衣装ではない。姫様は勿論、色々な方々の心使いや思いのこもった衣装なのだ。そして姫様が私を心から信じて下さった、友情のあかしでもあったはず。私は一刻でも早くそのお礼を述べたかった。

しかし、姫君様の婿君でいられる大将様が、私に「護衛」と、おふざけになられながらくつついてきてしまわれたので、まさか私が先にしゃしゃり出る訳にも行かず、ただただ、お声がかかるのを待っていないければならなかった。

当然、女雅楽での出来事は大将様が姫様に詳しくお話になって聞かせられているはず。

一番おいしい所を大将様に取りられてしまい、私はちよっぴり癩な思いを味わいながら待っている。

すると、肝心の姫様からのお声がかかる前に、中納言様から声がかかってしまった。仕方なく私は中納言様の元へ先に参上する。

普段はそもそも身分が低すぎる上に、何かと人の口の端にも上りやすい私の事を、お世辞にも快くは思って下さらない中納言様ではあるけれども、さすがに御所からお呼びがかかった事で私への評価がぐっと上がっておられるらしく、以前のように軽んじた態度や視線を向けられるような事は無かった。

いや、むしろ、何だかひねこびた笑みを漏らされていて、手をすりあわせんばかりの態度でいらっしやる。これはこれで何だか気味が悪い。

「いや、御所での務め、御苦労であった。主上からのお褒めのお言葉を我々も受ける事が出来て、中納言家としても大変鼻が高い。もう、お前は今までの身分という扱いにはしておくわけにもいかない。そこでお前には私の家臣の養女になってもらう事にした」

コレまた、突然に、一方的な話だ。養女？ 両親の揃っている私か？

「お前は高貴な方々に認められ、さらには御所で、主上にも認められた身の上。いつまでも下司の娘として扱う訳には行かない。一の姫のもとでも、いつまでも小間使いと言う訳にはいかぬ。そこでお前の身分を相応のものにするために、私の乳兄弟の忠光の養女とする事にしたのだ」

「でも、私には里に立派に両親がそろっております」

下司の娘。この言葉にカチンときて（仕方のない事なんだけど）つい、私は言い返してしまう。

「別に里の親を忘れろと申しているのではない。あくまでも形式上、

お前の身分を整えるための事なのだ。一の姫も、これからは近衛の
大将殿の正妻として身が重くなつていく。そこに、お前の身分があ
まり低くては置いておくにも具合が悪い。それではお前も困るだろ
う？ 我々もお前を認めたらこそ、この話を勧めているのだ。ま
ずはお前から父親に手紙を書いてやるが良い。その後、正式に養子
縁組の運びとなる。お前にとつても悪い話ではないはずだ。一の姫
の元にも長くいられるし、良い婿をとる事もできる」

迷う事は無いだろう？ そんな視線を私に中納言様は向けられた。

確かに父は私の出世を望んでいる（はずだ）。そうでなければ、
私を都に出してくれたりしなかつたはず。父の思惑をこれ幸いに
と都に出て来たのは私の意思だ。

私自身だつて、これは人生の転機になる。この話を受ければもう、
人に身分の事であれこれ言われるわずらわしさは無くなるだろう。
大手を振つてここにいる事が出来るのだ。

この話を喜ばない人は私の周りにはいないはず。やっかみは別に
して。

中納言様から解放され、ようやく姫君様からお声をかけていただ
き、私は姫様に頂いた衣装のお礼を言う事が出来た。そして、養女
の件もご報告させていただく。姫様は早速私にお聞きになった。

「花房はその話、受けるつもりなの？」

「勿論でございます。ありがたい、もつたいないお話でございます」
私はそう、答えた。

「「」両親とは身分が違ってしまつたのよ？ それに」

「こんな話、もう、私の身には二度とない事でしょう。せつかく姫君様と長く共にいる事が出来る権利を得る事が出来るのです。私にとつて、こんなに素晴らしいお話はありません」

つい、私は言葉をひつたくつてしまった。

「……」

姫君様は何か言いたげになさっていたが、何もおっしゃられない。すると、

「花房さん、ちょっと」

やすらぎが私の袖を引いて、視線を御簾の外に向ける。

「お話中すいません。花房に相談したい事がございますので、少し、中座させていただきとう存じます」

やすらぎがそついつと、姫様もつなずいて「下がってよろしい」と言われた。

「花房さん、あなた、本当にその話、お受けしてしまつていいの？」
さつそくやすらぎは聞いてきた。

「仕方が無いのよ。中納言様にはお世話になつてゐるし、姫君様の元に長くいるためにはこうするよりほかにないわ。むしろ、今まで追い出されずにいられた事の方が異例だったんだから。これで安心して姫君様につかえる事が出来るわ」

「康行はどうするの？」

やっぱり。それを聞かれると思った。私の身分が上がると言う事は、康行とも身分が違ってしまうと言う事だ。下手をすれば顔を見せるどころか、口を聞く事さえ難しくなるかもしれない。

親、兄弟とは身分が違ってても、肉親の情までさえぎられる事はないだろう。今までのように気安くは行かなくても、肉親が気心を通わせる事に、そう、文句を言う人間は多くはないはず。ただ、養子先への遠慮はしなくてはならないだろうけれど。

だけど、康行と私には、なんの特別な繋がりもない。身分が違ってしまえば、ただの他人だ。いや、今だってただの他人か。

「あなた、康行からもらった櫛を、肌身離さず持っているでしょう？ あなた達、何か約束しているんじゃないの？」

約束。確かに遠い昔、幼かったころにした約束はあった。しかし、それももう、果された。今はなんの約束もなければ、康行からなんの言葉も受取った事もない。だいたい私はいつも康行をはねつけてさえいたのだから。

「康行は関係ないわ。約束どころか、私はあいつが苦手で、逃げ回っていたのをやすらぎも知っているでしょう？」

「でも」

「気にしないで。これは私が望んで来た事なの。都に出て来る時から、ずっと。憧れの都で、お姫様につかえて、御殿の中で一生を暮

す。夢見て来た世界が目の前にあるのよ。康行の事なんか気にしちゃうられないし、康行だって私みたいなじゃじゃ馬に付きまとわれてちゃ、迷惑かもよ？」

「本気でそんなこと思っただけじゃないでしょうに」
やすらぎはため息をつく。

「本気であろうと、無かろうと、私が大手を振って姫君様の元に仕える事が出来る機会を、逃すと思う？ 姫君様に目を止めていただかなかつたら、私はここにいられなかつたし、御所で琴を披露する事もなかつた。こんな養子のお話をいただくことだつて無かつたのよ。私は誰よりも姫君様が大事なの」

私はここを力説した。やすらぎだつて、姉妹同然の姫様が、何より一番大切なはず。私の気持ちが分からないはずはない。

「ねえ？ あなたの気持ちは分かるけれど、ここは良く考えましよう。何故、姫君様があなたにお言葉をさえぎられても黙っていらしたと思っているの？ 姫君様があなたに考え直せと言ってしまったら、お立场上、それはあなたに命じた事になってしまう。あなたの意思を無視する事になってしまうからよ。あなたには姫君様のご心配なされる気持ちが分からないの？ 一度養女となつてしまえば、もう、元には戻れなくなる事がたくさんあるのよ？ あなた、本当にそれでいいの？」

やすらぎは言葉の一つ一つに、力を込めるように言う。

やっぱりやすらぎはしっかり者だ。私がその場の勢いで決断しないように慎重に物を考えている。私の心の中にある、ためらいや戸惑いを見抜いてしまっているのだろう。

私もわずかな間に貴族の暮らしや考え方を垣間見てしまっている。都に出て来た時の憧れだけではどうにもできない部分を見せつけられてしまっている。私がこれから入ろうとしている世界は、そういう世界なのだ。

「ね、本当に良く考えて。この話を受けなかったからと言って、すぐここを出される訳でもないでしょう？ 第一、そんなこと姫君様がお許しにならないわ。この寝所で暮らしている限り、姫君様は女主人でいらっしやるのだから」

確かに私は、中納言様のおっしゃった「下司の娘」という言葉に、反発してしまっていた。少し、勢いに乗せられているのかもしれない。

「それにね、何故中納言様がこんなにあなたに固執するのも分からない。実の親にもこんな大切な事を手紙一枚で済ませるなんて、おかしいじゃない？ 軽々しく返事をしない方がいいわ」

言われてみれば確かにおかしい。「下司の娘」と言いながら、中納言様は頻繁に私に目を付けているような気もする。

「分かったわ。もう少し、良く考えてみる。お付きの女房が姫君様に「心配をおかけしちゃ、おしまいだわ」

私の頭が少し冷えたようだと思ったのか、やすらぎは安心したようにほほ笑んだ。

「良かったわ。これで私も安心して、宿下がりできるわ」

「宿下がり？ なあに？ 長くお休みするの？」
私は何気なく聞いたのだが、やすらぎは言いたくそつじにして
いる。

「実は、結婚が決まったの」

「へ？ 誰の？」

思わず聞き返す。

「私の」

失態

私は口をあんぐりと開けた。私が御所に行く前にはそんな気配もなかったのに。いつの間に。

「驚いた！ 誰？ お相手はどなたなの？」

私は勢い込んで聞いてしまう。

「それが……。忠光様の御子息で、今は大将様にお仕えしている、忠長様なの」

忠長様なら私も分かる。何と言っても、大将様のいちばん身近なお世話係で、大将様からのお文係として、姫君様付きの私達の元へ頻繁に出入りしていたのだから。でも、忠光様の御子息とは知らなかった！

「あなたが御所に行かれた頃、忠長様からの文が届くようになったの。私もよく知っている忠長様の事だったから、しばらく文のやり取りをしていたのよ。そうするうちに気があってしまって」

はあ。私が御所に行っている間に、そんな事になっていた訳。確かに身近な相手だし、気心も知れているだろうけど、慎重な人ほど、こういう時には思い切った事をするもんだわ。

「それじゃ、中納言家を離れてしまうの？ 寂しいわ。あなたとはずっと一緒に姫様を見てさし上げられると思っていたのに」

するとやすらぎは真底驚いた顔をする。

「私が姫君様の元を離れる？ そんな事、ある訳ないじゃない」

「でも……。忠長様が」

普通、男君は女君が結婚後も邸勤めを続けることを喜ばない。邸に勤めていれば、高貴な方々に接する時は、顔や姿を見せない訳にはいかないから。そういう「はしたない」と言われることをする必要に迫られる女房でいることを快く思わないのだ。

「忠長様は大丈夫。私に女房を辞めるなんていう訳ないわ。忠長様はね、私と姫君様のように大将様の乳兄弟なの。それも、形ばかりなんかじゃない、本当に心から大将様のことを思って仕え続けてらっしゃるの。私は忠長様の気持ちが分かるし、忠長様も私の気持ちが分かるのよ。そう言う方だからこそ私、忠長様と一緒にになりたいと思ったの」

すこい。

私が御所に行っている僅かな時間のうちに、ここまで互いが理解し合っているなんて。

さすがはしつかり者のやすらぎだわ。浮いた言葉や家がらに惑わされたりしないのね。忠長様も、やすらぎがどれほど姫様を思っているか知ってらっしゃるんだろう。その上で通り一遍ではない、やすらぎを理解していることをきちんと伝えるお言葉を送り続けたに違いない。そんな忠長様だからこそ、やすらぎの心をつかんだんだろうな。

なんだかついでに惚気られた気もするけれど。

「私、決して姫様付きの女房を辞めたりしないわ。出来ればお母様のように、立派な姫様のお子様の乳母になりたいの」

やすらぎは恥じらいながらも、嬉しそうにそう言った。

「おめでとう。それなら私も嬉しいわ。でも、よく、あなたがこんなに急に結婚を決めたわね？ 以外だわ」

こうとしか言いようがない。

「それがね、訳があるの。中納言様は一の姫様を大納言家の別邸に住まわせる事になさるの。大納言家でも、姫君様を正式に大将様の北の方になさるおつもりみたい。まだ、お歳若でいらっしやるのに」

「ええ？ もう、大将様は姫君様をご自分の身のうちにお引き取りになるの？ 随分とまあ、早い事」

本来、若いうちは婿として通いながら、女君の実家から様々な支援を受けて、自らの地位を確立していき、さらに、事実上の正妻として世間を認めさせてから、初めて自らの邸を用意して、そこに女君を引き取って北の方とするのが、通常の手続きだろう。それを結婚からわずか数カ月で北の方を据えると言うのは、異例な事だ。

ただし、大将様は、すでにご出世を果たされているし、自らの御実家は都で一番の権勢を誇っている。おまけに姫様はご結婚の際の特殊な事情で、すでに一度、大納言家で幾日か暮らされている。普通のご結婚とはかなり事情が違ってしまっているけれども。

「これは大将様のご意思じゃないわ。きっと、大将様も今頃初めて中納言様から聞かされているはず。これは中納言様が大納言様にお願いされて、大納言様が許可された事なのよ」

「親同士で、突然、勝手に決めちゃった訳？　なんだってまた？」

「これは、あくまでもまだ噂なのだけれども、大将様は三条殿の姫君を新たにお迎えになるかもしれないの」

「何ですって？」

三条殿と言えば、こちらの中納言様と同格の方。その方の姫君を迎えられるとなれば、ウチの姫様とは、モロに妍を競う事になってしまう。まだ、こっちも新婚だって言うのに。

「今、三条殿は勢いがあるよ。盗賊達を取り締まる立場に直接当たっておられて、役人の数が増えて以来、実績を積み上げてらっしゃるから。大納言様にとっても無視できない存在らしいのでも、ウチの中納言様とも、長いお付き合いで、政務上の勝手も良く分かってらっしゃる仲でしょう？　決してこちらを軽んじてはいないという所を、お示しになりたいんじゃないかしら？　何より、大将様と姫君様は仲がよろしいのだし」

そういう事だったのか。それでは三条殿の勢いというのは相当なものだろう。長い間政務上の事では手を携えて来た両家の間に割って入る事が出来るなんて、かなりの勢いだ。

「だから、あなたの養女の話も、この事と無関係ではないんじゃないかしら？」

「なんでそこに、私が出て来るの？」

「あなたはご自分が、今、どんなふうに見られているか、分かって

いないのよ。あなたはこの所都の噂の中心だわ。良くも、悪くもね。あなたが姫君様に仕えていると言うだけで、世の人々はあなたと姫君様に注目する。中納言家も自然と脚光を浴びているの。中納言様は大納言様との関係が世間に広く知らしめられる今のうちに、この勢いに乗じてその関係を一層密にしようとしてらっしゃるの。実際、朝廷でのご自分の立場も強めてらっしゃるみたいだし。三条様と言う手ごわいお相手が現れた今、あなたの様な注目を浴びる存在を中納言様は手放したくはないの。だから、ご自分のご家来の養女にしようとなさっているのよ」

私が。私なんかが、中納言家にそれほどの影響を与えていたとは思ってもみなかった。

でも、そう考えれば、中納言様の今にも手をすり合わさんばかりだった態度も合点がいく。

「とにかく、大将様が姫君様を御身のうちにおかれるのなら、私は姫君様について新しいお邸に入る事になるし、そのお邸の主は大将様。忠長様もそこに住まわれる。姫君様達が落ち着かれるまでは私達も落ち着けないし。だったら今のうちに宿下がりして、せめて三日夜だけでも済ませてしまおうかと」

成程。それで話が急に具体的になっちゃった訳ね。しばらくは同じ邸の部屋に通わせにくいし、その内通うにしても正式に一緒になっちゃった方が都合は良さそうだし、宿下がりのお願ひもしやすそう。やすらぎも恥ずかしそうだが、聞いてるこっちの方が赤くなる。

「だから、あなたもこの件は良く考えた方がいいわ。決して、あなた一人の問題ではないんだから」

うーん。これで私が養女になって、問題でも起こそうものなら、それはそれで厄介そうだ。

養女になった以上は、決して今までのように自由奔放でいられなくなるだけではなく、養父の忠光様のために、中納言家が安寧に過ごせるように気を使わなくっちゃいけないくなる訳ね。

おまけにやすらぎは忠長様が大將様の従者である以上は、その妻として大納言家とのつながりが保てるから、まあ、先々も安心だろう。姫様は正式に北の方とされるのだから、一生の保証を得たのも同然だわ。ただし、どちらも大納言家の権勢が崩れなければの話だけれど。まず、それは大丈夫だろう。

でも、私は、もしも中納言様が三条殿に取って代わられることでもあれば、そして、何かと噂になりがちな私を悪目立ちする厄介な存在だと思われれば、多少強引な手を使ってでも、私を姫様から遠ざけるかもしれない。

私は中納言様から用済みと見なされれば、忠光様の足かせになってしまっただろう。大將様だって、私に何かとお味方下さったのは、私の身の上が気楽な下司だっただからこそ。普通の貴族の姫と同格になった時には、情勢次第では私への態度を変えられてもなんの不思議もありはしない。それを私は先日御所で学んだばかりだ。

そして、ふと思う。信頼だけでは繋がる事の出来ない貴族の方々は、なんて孤独なのだろうと。

翌日、大將様から私達に正式に大納言家の別邸へ姫君様の身を移

される話しがあった。一応、私達はお祝いを申し上げる。三条殿の姫の話はまだ、ただの噂なのだし、姫様が正式に北の方になられるのだから、ご夫婦にとっては目出たいお話と言う事になるのだ。

勿論、私達は三条殿の姫の話など、毛ほども姫様には漏らす事はない。それは大将様がごく、内密に姫様にお伝えすべきことだ。その事があるせいか、大将殿もどうも落ち着きが無い。懸命に姫様のご機嫌をうかがっている。

そんな調子だったので、私は大将様に自分の養女の件など、言う訳にはいかなかった。

だからその日の夜も遅くに、中納言様の暮のお相手に行っていた大将様が、そろそろ休もうと下がりかけていた私の元に吹っ飛んでこられたのには驚いた。

「花房、何故あなたは養女の件を私に話してくれないのだ」

「どうやら暮の席で直接中納言様から聞いたらしい。」

「話すも何も、大将様にお話しなくてはならない事とも、思いませんでしたので」

「これは私の個人的な事だ。」

「中納言殿は言っておられたぞ。一の姫は北の方となり、あなたは忠光の養女となる。これだけこの家と深く縁が結ばれるからには一の姫は勿論、あなたの事もゆめゆめ軽々しく扱うなど。私はあなたを一度たりとも軽んじた事はなかったはず。あなたはいつから、そんなに私を疎んじられたのか」

「めっそうもない！ 私が大将様を疎んじたりするはずが、無いじ

やありませんか」

私は慌てて否定した。

確かに私は大将様からの結婚の申し込みはお断りしたし、その手の仲になりたいとは思っていない。大将様自身も私に無理強いはなさらなかった。だいたい、大将様なら私みたいな風変わりな女人を相手になさらずとも、宮中にも行けばもつと素晴らしいお相手は掃いて捨てるほどいらっしやる。

「とんでもございません。誤解です。むしろ私は大将様が私に向けて下さる、友情や信頼に心から感謝しているくらいです」

私は誠心誠意、心をこめて言う。

「これは、中納言殿にやられたな」

大将様が苦々しげにおっしゃる。

「は？」

「中納言殿が焦り出したのだ。今、私があなたから離れては困ると」

「離れるも何も、私は姫君様の女房ですし」

「しかし、世間的には私の情人だ。あなたが忠光殿の養女になるなら、正式に妻の一人とするか、私とのかかわりを断たせてあなたに別の婿を取らせるか、どちらかはつきりさせようとなされているだろう。でなければ中納言殿は体裁が立たない。北の方の一女房にすぎないならともかく、きちんと婿取りが出来る姫を、ましてや中納言家が後ろ盾する気のある姫を、私が情人扱いする訳には行かない。中納言殿は、何が何でもあなたを私の妻にさせたいらしい」

「そのために私をご家来の養女に？」

「あなたは私に色よい返事を下さった事はない。だから私はつきり、あなたが私から離れるために養女の件を御隠しになっていたのかと思つたのです。あなたがこつそり婿を決めてしまえば私は手出しできませんからね。中納言殿はあなたにその気が無い事を勘づいておられる。だから私を煽つたのですよ。あなたを早く妻にしてみえと」

私はまたしてもカツとなつてしまふ。眞実はともかく、そういう噂を姫様が快く思つてなどいないはずなのに！ 姫様は全て聞き流して下さつてゐる。なのに、一番お味方して下さる筈の御父上様である中納言様が、そんなことをなさるなんて、ひどすぎる！

「冗談じゃないわ！ そこに私の意思も姫君様のお気持ちもあつたもんじゃないじゃないの！」

「花房、声が大きい」

大将様が私を落ち着かせようとする。でも私はその態度が余計はらたらしい。

「実の御父上がなんてことなさるの？ いくら女人は男君の道具のようだとはいえ、あんまりだわ！ そもそも大将様が三条殿の姫君を迎えようとなさるからこんな事になつたんじゃないの！」

大将様が怒鳴り散らした私を見て鼻白んだ。それを見て私も我に帰る。ここは姫様の御簾の近くだった……。

「殿。それは本当の事ですか？」

御簾の向こうから姫様の通る声が聞こえた。大将様が御簾のうちに入られる。

「皆、下がっていなさい」

また、姫様の声が聞こえる。女房達が御前をそっと離れていく。

やってしまった。ご夫婦の繊細な難しいお話を、私が勝手に暴露してしまった。

「花房さん、さあ」

そう言っただけでやすらぎが呆然としてしまっている私を引っぱ張った。

御簾の内

その夜、私は姫様の御前に出なかった。どの面下げて姫様に会う事が出来ようか？ だからと言つて部屋にも居たくない。閉じこもつてしまうと、いろいろ悪い事ばかり考えてしまう。部屋でなくたって考えてはしまうけど。

せめて外の空気だけでも吸いたい。私はそつと庭に出た。

春の夜は、意外と暖かかった。勿論空気はひんやりと冷たいのだが、都特有の冬の底冷えするような冷気はもう感じなかった。むしろ、少しだけ冷たい風が、心地いい。

忠光様の養女になんかになったら、こんな風に庭に出る事も難しくなるんだろうな。やっぱり私にそういう暮らしは向かないわ。姫様に仕え続けるには不利になるけれど、養女の件は断ろう。

その前に今日の不始末を姫様にお詫びしなければ。姫様に許していただけなければ、仕え続けるも、養女になるもないんだから。

私は半月の月を眺めながら、姫様へのお詫びの言葉を考えていた。すると人の気配を感じる。誰だろう？

月夜なので目を良く凝らすと姿が見えて来る。康行だ。都に来ていたんだわ。また、大将様についてきたのね。

私は思わずホツとした。康行なら私の愚痴を全部聞いてもらえる。そら見た事かと言われるだろうけど、今はそれもかまわない。むし

る康行と口喧嘩の一つも交わしたい。

しかし、そこにもう一人の人影が現れた。長い髪を束ね、足元をキリっとたくし上げた下働きの少女だ。私とそう、変わらない年周りでだろう。思わず私は身を隠してしまった。

いくら下男と下女とはいえ、こんな夜更けに庭で会うなんてただの用事とは思えない。二人は何事か会話を交わしているが、何を話しているのかは聞こえなかった。私は音をたてないように、でも、急いで立ち去った。

そうだ。康行が都で会っていたのは私だけじゃないはずだ。共に働き、共に主人たちの世話をする、沢山の下女たちとも会っている。大納言家でも、中納言家でも、むしろ、彼女達の方が親しくしているはずだ。

私のように縁の上から見下ろし、見下ろされて話をするのではない。男女でも、同じ地面に足をつけて、同じ目の高さで面と向かって会話をする。

今まで当たり前だった事が、ここでは当たり前ではなくなっている。

ふと、思い出した。大将様はそれをとっても羨ましがっておられたっけ。自分達には出来ない。

私は顔を隠すのをやめた。几帳に隠れるのもやめた。それでもなお、庶民の暮らしとは違ってしまふ。

大將様は今頃、姫様に自分のお立場と、姫様への想いをこんこんと語って聞かせておられることだろう。そして、姫様のために自分の出来うる精いっぱいのことをなさることだろう。

やすらぎももうすぐ結婚する。姫様の乳母であるやすらぎの母親も、忙しそうにしている。きっと、実家では三日夜の準備が進んでいるのだろう。

私は何だか、ひどく孤独に思えて来た。私だけが、都で取り残されてしまったような。

康行は私に櫛をくれた。馬にも乗せてくれた。幼い時の約束は果たされてしまった。それから、なんの約束も交わしていない。不器用な手紙で、私の琴を褒めてくれただけ。

もし、ただの下女として仕えていれば、夜更けの庭で、康行と面と向かって話をしていたのは、私だったかもしれないのに。

もう、庭にいる事も嫌になって、私は仕方なく部屋に戻った。なかなか寝つかれなかったが。

「どうしても、私と一緒ににはなれませんか？」

撫子が康行を見つめながら言う。

「撫子と一緒になれないんじゃない、俺の心は人殺しの罪から逃れられなくなってしまったんだ」

「それなら、私はなおさら康行のそばにいたい。康行は傷ついてい

るんだもの。花房さんは康行のそばにいられないけど、私は康行を慰める事が出来るわ」

撫子が見かけに似合わぬ意思の強い瞳で言う。花房によく似た瞳で。

「傷ついてるんじゃない、花房のせいでもない。ただ、俺に度胸がないだけなんだ」

「度胸って何？ 人を傷つけ、殺す事？ そんなもの要らないわ。康行には優しさがある。上京したばかりの私に優しくしてくれたり、馬達を心から愛しんだり、若君のために誠意を尽くそうとしたりしているわ。それで十分よ」

「撫子がそんな風に行ってくれるのは嬉しい。だが、それじゃ、俺は納得できないんだ」

「納得なんかしないでいい。ただ、私は優しい康行が好きなんだから！」

撫子がそう言って近づいてくる。花房は遠い世界に行ってしまう。この娘は自分のそばにいてくれる。

あの、頬に残ったぬくもりを想いだす。今この娘を抱き締めれば、すがりつく事が出来るかもしれない。苦しみを和らげてくれるかもしれない。一瞬、手を伸ばしかける。

だが、それは俺の望む生き方じゃ無い。どうすればいいのかわからない今でさえも、それだけは分かっているんだ。この娘の優しさを利用してはいけない。

「すまないが、俺は自分の望む生き方をしたい。傷ついたって構わないんだ。君に逃げたくはないんだ」

それだけ言うと、康行は撫子に背を向け、その場を去って行った。

あとに残された撫子は、康行が買ってくれた端切れを髪からほどき、何か、決心でもしたかのようにそれをじっと見つめていた。

翌朝、とにかく私は姫様にお詫びを申し上げに行く。まずは何より謝らなくては。

一晚経って、姫様も落ち着かれたのだろうか？　いつもどおりに私を御簾のうちに通して下さった。

「気にすることはないのよ。昨夜のうちに殿はお聞かせ下さるつもりだったのですから」

姫様はそう言って下さったが、私は穴があつたら入りたかった。

絶対に大将様から先にお聞きしたかったに違いない。だってその後、

「やはり、花房に妻のお話を受けてもらっておけばよかったわ。そうすれば少しは慣れて、こんなにも憂い思いはしなくて済んだでしょうに」と、洩らされたのだから。

私が相手でも、さぞやご気分が悪かろうに、まして突然、妍を競う相手の事を私の軽い口から聞かされたんじゃ、さぞや御不快だっ

たに違いないのだ。身近な女房に手をつけたのと、同格の姫を妻に迎えるのでは、天と地ほどの差があるのだから。

大将様の御身分では、いつかはこうなる事とは思っていたけれど、それをこんな形で姫様に私が伝えてしまったのは、我ながら口惜しかった。まして、それならいつそ、私を先に妻にさせておけばと言う姫様の心情はあまりあるものがある。相手がだれであろうと、自分の夫が別の妻を迎えて平気なはずはないだろう。

大将様が同格の姫君を迎えられるという事は、姫様にそんな言葉をもらさせるほど、悲しい出来事だったのだ。

本来ならこういう時にこそ、姫様をお慰めするのが年の近い私達若い女房の務め。それなのに今回は私がその張本人だ。当然、周りの視線も冷たく感じてしまう。

「琴を」

突然、姫様がつぶやかれた。

「花房、琴を弾いて頂戴。今のあなたの自由な心を聞かせて」

ああ、そうだった。私には琴があった。こんな時に姫様をお慰めできる、私の唯一のとりえ。私は姫様の心を琴の音に表す事が出来る。私の思いを伝える事が出来るのだ。

私は弾いた。姫様の望まれるがままに。誰に聞かせるともなく、心のままに。

弾いているうちに、私は姫様を慰めると言うよりも、私自身が琴

の音に慰められてきた。そして、今こんな中でも私に琴を弾かせてくれる、姫様に感謝していた。

そう、姫様は私に琴を弾かせるために私を守り続けて下さっている。こんなに姫様自身が苦しいであろう時でも、私には琴が必要だと言う事を分かって下さっているのだ。

ようやく私は気持ちを立て直す事が出来た。中納言様にお会いしよう。そして養女の件はきっぱりとお断りしよう。

もともと私は女人を手駒のように扱う世の中に逆らおうと、琴を弾き続けて来た。いつの間にかその力の大きさに呑まれようとしてしまっている。これではいけない。姫様は、私の気概と、立ち向かう心を認め続けて下さったのに。

康行のせいなんかじゃないわ。

一瞬だけ、昨夜の庭の光景が頭をかすめたが、すぐに振り払う。

私は早速中納言様の元に向かった。非礼なのは承知の上だ。私はいつだって、非礼なやんちゃものだったんだから。

だが、その康行を、中納言様の元へ向かう途中で見かけてしまった。昨夜の事があるのでためらったが、あつちは私には気がつかなかったのだから、気にする必要はないはずと思い直して、私は声をかけた。

「康行、都に来ていたのね」

ところが康行は、縁の下で膝をつき、私に向かって頭を下げた。私は驚いた。

「いつたいなんの真似？」

「あなた様は御身分が上がられる方ですから」

康行は頭を下げたまま言う。

「養女の事を聞いたの？ それはこれから断りに行くところよ。私は今までと、何にも変わりはないわ」

「それでもだ。お前は俺の主人の北の方になられる方の、女房になるんだ。侍者の俺とは違うんだよ。邸の人目の着く所で軽々しい態度でいる訳にはいかないんだ」

康行は声をひそめながら言う。

「養女の話は断るのか。大将様との結婚話の時と言い、お前らしいな」

康行は軽口をたたくが、顔はあげない。

「そうよ。私は逆らって生きるのが性分なのよ。だからあんたも頭をあげてよ、康行」

「俺はそういう訳にはいかないんだよ。お前とは違う」

「なによ、何が違うって言うの？ 私の身分は変わらないのに」「私はイライラと聞いてしまう。」

「それは、俺は男で、お前は女人だからさ」

「どういこと?」

私には意味が解らない。

「俺の身分はいやしいが、男だから侍として大将様を守ることが出来る。馬の世話もできる。自分の身分のまま職務を果たす事が出来るんだ。しかし、お前は女人だ。女人のお前が女主人に直接仕え、お守りするには女房になるしかあるまい。それしか、御簾の内に入る手段はないのだからな。だが、御簾の内と外では世界が違う。お前が女主人を選ぶ以上は俺とは世界が違ってしまふのは仕方のない事なんだ」

康行は低い声のまま言う。

御簾の内の世界。

そつだ。考えてみれば当然のことだ。身分の違いの他に、この世界ではそつという違いもあったんだ。

「俺に氣遣う事はない。お前の気持ちは分かる。俺だって大将様を放つておくことなんか出来やしない。だからこそ、人を殺すような侍者にまでなつたんだ。お前が一の姫様に寄せる思いも同じだろう。だから俺はお前がどんな決断をしたって、それを認めるよ。誰が何と言おうと俺だけは認めてやる。お前はそれを忘れずにいれればいい」

そつか、今まで気づかずにいたけれど、私が姫君様を選ぶ以上、それだけで康行とは立場が離れて行ってしまうんだ。それなのに康行は私の生き方を認めると言ってくれているんだ。

けれど今のままでは私は康行と疎遠になつて行ってしまう。そして康行の周りには昨夜の少女の様な下女がいっぱいいるんだ。それ

は仕方のない事なんだ。

私は返事も、礼さえも言う事が出来ずに黙り込んだ。康行は頭をあげようとはしない。彼がどんな表情をしているのか私には分からない。ただ、ひそめていた声を一転させて

「一の姫が別邸に移られる時には、私も護衛させていただきます。その後の邸の警護も我々が当たらせていただきますので、これからもよろしく願います」と、はきはきと言う。

康行はさらに丁寧に頭を下げると、私に背を向けて去ってしまっ
た。

母

いざ、こうなってしまうと、私はやはり寂しかった。康行は私の気を晴らしてくれるだけではなく、故郷の風を運んで来てくれる人だった。

それでも私が姫様に仕えたい気持ちは変わることはない。姫様は御新婚だと言うのに、大将様が新たな妻を、それも、姫様と同格の妻を迎えられようとしていて、不安定になっておられる時だ。そんな姫様の元から、私が離れることなど考える事も出来ない。

けれど、養女の話はまた、別だ。私は中納言様達の庇護のもとで姫様に仕えるのではない。私は私のままで、自由な心のままで、姫様をお守りするために戦うのだ。

寂しい今だからこそ、戦わなくてはいけない気がした。

私は中納言様の元に乗り込むと、はつきりと申し上げた。

「忠光様の養女の件、お断りさせていただきます」

「断る？ お前は一の姫の元に長く居続ける事を望んでいたのではなかったか？」

中納言様は意外そうに私を見た。私が断って来るとはつゆほども思っておられなかったらしい。

「お前は本気でこんな良い話を断るつもりか？ お前の事など私の

言葉一つでいつでも追い出す事も出来るのだぞ。いくら大将殿が以前の後ろ盾になっても、このままでは所詮情人。大将殿のお気が変わらればお前など、すぐに都での行き場を無くしてしまうだろう。それを承知の上で断ると言うのか？」

中納言様は御不快な様子を隠そうともせず、あの、私を見下すような目つきをお見せになる。しかし私はひるまない。

「たしかに結構なお話では御座います」

そして、中納言家に都合のいい話でもある。

「けれどもそれは、私の心の自由を失う道でも御座います。姫君様は私におっしゃいました。私は心の自由を失ってはならないと。私の琴は、私の自由な心のままに弾かれなければならないと」

「お前は、私に受けた恩をあだで返そうと言うのか。ただの下司の娘でしかないにもかかわらず、お前を姫の元に仕えさせてやった私に」

「私を選んで下さったのは姫君様でございます」

「お前を女房候補として、ここに来る事を許したのは私だ。そうでなければお前は姫の足元にすら近寄れなかった」

よく、ぬけぬけとおっしゃるわ。どうせ、私のお父様にたんまりと金を握らされたくせに。

そんな事を考えて中納言様を睨んでいたら、中納言様は妙なお顔の表情をなされた。

「お前、自分が何故ここに呼ばれてこの邸に入ったか、知らぬだろう？ これでも私はお前を憐れんでやっているのだぞ」

中納言様が、一層私への嫌な視線を強く投げかけられた。

「憐れむ？ 確かに私は下司の娘ですが、中納言様にそこまで同情いただく事は……」

「やはり、父からは聞いておらぬのだな。お前の生みの母の事は」

「お母様の事？」

何故、この方が私の母の事を知っているの？

「お前の母は、本当ならこの私の妻となり、北の方の座を得る事が出来たはずなのだ。お前の祖父が我を張らず、お前の父が現れなければ」

「お母様が？」

お母様が貴族の出なのは聞いていたけれど、中納言様の北の方になられようとしていたなんて、聞いてないわ。

「いいか、お前の母はあの、前帝の側近中の側近だった大臣の娘だ」

「あの、前帝の？ まさか！」

「それにお前の祖母に当たる大臣の妻は、さらに前の帝の御皇女で尊い血筋の方だった」

「私のお婆様が、元の女宮様だった？」

「なんでも琵琶の名手だったと聞いている。お前の母親は琵琶よりも和琴を得意としたらしい。その評判を聞いて、私もお前の母を娶ろうかと思っただけだから」

私が琴を得意とするのは、祖母や母から受け継がれた血のなせる事だったのか。

「その大臣は前帝の激しいご気性を、きちんと抑え込む事が出来なかった。詔は口々に発せられる事が無くなり、世の中は荒れかけた。にもかかわらず、お前の祖父の大臣は無責任にも己の官位を返上し、無位無官の身で仏門に入ってしまった。あの岩窟者は私からの援助も、お前の母との結婚さえもはねつけた。そのせいで家は貧窮し、お前の母と妹は苦しい生活を強いられ始めていた。妹はつてを頼りにかろうじて後宮の女房として勤め始めたが、それでお前の母親の世話までは出来かねたに違いない」

貴族の娘の人生は、父親の後ろ盾に寄って決まる。母は、あの梅壺の更衣様のような身の上になったのか。いや、更衣様はすでに後宮に入られていて、難しいお立場とは言え、その身が立っている。弱々しいながらも御父上の庇護もある。母の場合は未婚のまま父親が無位無官になったのだから、その心細さは大変なものだったかもしれない。近頃は宮様のお血筋とも言えども、お立場が弱くなって人が寄りつかなくなれば、いつともなく噂を聞かなくなったと思ううちに、食べる物にさえ事欠いて、はかなく亡くなられることだってあるのだ。

傾きかけた家の、立ち歩くことさえまれに育った貴族の娘ほど、心もとないものは無いだろう。叔母の様に勤めに出られるほどしっかりした人など、そうはいない。

「そこにお前の父が付け込んで、お前の母に近づこうとした。当然一族はお前の父を拒絶しようとした。しかし、お前の祖父は仏門に入った身、俗世の事には疎くなっていたのか、お前の母をまんまと盗み出されてしまった」

「盗み出した？」

「用は、お前の父は母を無理やりさらって、妻にしたと言う事だ。後に母は返されたが、お前を身ごもっていては、すでにどうする事も出来なかったのである。一族の者たちを協力させ、お前の父が財力を蓄える元手を作り出した。まあ、彼らもお前の祖父母も、それ相応に利益は得たのだらうがな。まるで娘を盗人に売ったようなものだ」

お母様が。顔も知らずに亡くなられたお母様が。

今まで懂れて、慕わしく思っていたお母様が、そんな目に合っていたなんて。私を誰よりも可愛がってくれたお父様が、そんな事をしたなんて。

「そんな……。信じられない」

「お前にとつてはそうだろう。しかし、おかしいとは思わなかったのか？ 貴族になんの繋がりもなかったお前の父が、貴族の母と結ばれるなど不自然ではないか。それに、母親を亡くした娘は普通、母親の実家で育てられるもの。お前は父に、武蔵などと言うあらえびすが暮らすような田舎に連れられて育った。当然だ。このような事情のある娘、とても都には置いておけない。お前は祖父母からも厄介者として追い出されたのだ」

信じたくはない。信じたくはないが……確かに、おかしい。

何か事情がなければいくら貧しいとはいえ、実の母の実家のある娘がわざわざ他の土地で父親に育てられるなんて事は無いだろう。中納言様のおっしゃっている事には筋が通っている。今まで、父のもとでは当たり前前に思ってた事が、都人の考え方になぞらえてみると、とても不自然に思えた。

「心労がたたったのか、お前の祖父母は相次いで亡くなった。お前の母の家系はお前の叔母がかるうじて繋げているだけで、没落の一端をたどっている。にも関わらず、お前の父は厚顔にもお前を私の姫の女房にしたいと言ってきた」

だから、中納言様は私をいつもさげすんだ目で見ていらしたのか。これでは私にいい感情など起るうはずもない。だが、父には他に都でのつてなど無いのだろう。

「それでもお前は多少なりとも皇族の血を継いでいる。育ちのせいで多少田舎臭くはなっているだろうが、我が姫の元で磨かれればその血がお前を輝かせるに違いないと、私は考えた。現にお前はその才覚を現したではないか。今のお前があるのは、私の憐れみがあったこそ。その恩にお前は報いようとは思わんのか？」

確かに、中納言様が私を女房候補として認めなければ、私は姫様に仕える事は出来なかった。だが、そこにあるのは私への憐れみなどではない。おそらくは昔、母に断られ、顔を潰された恨みを娘の私を召し使える事によって、晴らそうと思ったに違いない。だって、中納言様は私に危険な姫の身代わり役をさせたんだから。

私は崩れかけた気概を奮い立たせた。母と祖父はこの方に信頼を

寄せられずに断った。それをこんな形で恨みを晴らすなんて、中納言様のおごり心だ。そんなものにくじけたりなんかしたくない。

「私は……。姫君様の女房です。姫君様から離れたりはしません。でも、養女にはなりません」

かろうじて、そう、言い返した。

「私はお前の主人の父親だぞ！ 私に逆らって、ここにおられると思つのか！」

中納言様は、顔を赤く染めて怒ってらっしゃる。しかし、私は言う。

「私の主人は、あくまでも女主人であるところの姫君様です。その姫君様が私の琴を求めて下さる限り、私はどこへも行きません。姫君様のおそばにいます」

生意気で結構。どうせじゃじゃ馬と言われてきたんだから。ぐつと腹に力を込める。

「それに、本当は中納言様だって、私を追い出すわけにはいかないんじゃないですか？ これだけ良くも悪くも都中の噂になってしまっている私を、急に追い出したりしたら、中納言家にも余計な傷がつきかねないんじゃないですか？ 人の口に、戸は立てられないのですから」

私はわざと強気に出た。姫様が私に琴を弾かせ続けているお心をお思つと、弱気になつていけない。

私の弾く琴は、私一人の物じゃない。今、姫様が味わっているお

苦しみも、私を支えて下さっている御心も、伝えるための物なんだから。私は逃げてはいけないんだ。

中納言様は忌々しげにしてはいらっしやるが、私に反論はなさらなかった。私の言葉は結構凶星だったようだ。

「姫君様のところへ、戻ってもよろしいでしょうか？」

「お前が勝手にここに来ただけだ。勝手に戻ればいいだろう」

中納言様は相変わらず不機嫌なままだったが、私を追い出すとは言わなかった。戻ればいいというのだから、私はこのまま姫様のそばにいて良いと判断した。

私の主人は姫君様だ。私はそれを中納言様に宣言した。姫君様が私の味方でいて下さる限り、私は中納言家や大納言家に逆らっても、姫君様について行く。私はあらためて決心がついた。

これまで私は望んで琴を弾いてきた。今は望まれて弾く事を覚えた。

そして、私は姫様に望まれてここにいる。康行も認めてくれる。私は決して孤独なんかじゃ無い。

少女

それでも私は話を聞いて、頭の中がぐるぐると回っていた。とても落ち着いて考える事など出来ない。初めて聞く母の事、祖父母の事。

ああ、あのお父様が、お母様にそんな酷い事をなさったなんて。

私はお父様とお母様の、睦まじい愛の中で生まれたのではなかったの……？

都に出て来る前なら、男君が愛する姫をさらって愛を遂げると言うのは、とても美しい世界だと思っていた。絵巻物や、物語の世界ではそんな風に描かれていたから。

けれども私は知ってしまった。現実に盗み出される姫は、そのような美しい気持などになれるはずがないと言っ事を。

ある日突然現れた男によって恐ろしい目に遭い、何者かに売り飛ばされたり、殺されたり、母の様に身ごもらせられたりして、つらく、苦しく、悲しい目にあわされてしまうのだ。

そして私はそんな風にしてこの世に生まれてきた。おそらくは母にとっては望まぬ子として。

これが本当なら、私はもう、父の元には帰りたくない。いや、帰れない。これまで大切に慈しんで下さった、その心までもが信じられない。だって、どんなに父が私を愛して下さるうとも、それにはお母様を深く傷つけた代償が伴っているから。そんな愛情なんて、

欲しくない。

お父様のために、都で名を上げるとか、人繋がりをよくするとかなんて、考えたくない。

動揺と混乱の中にはいたが、私は姫様の元に戻る事にした。もう、随分と時が経ったはず。姫様にご心配をかけたくない。

故郷に自分の居場所を失う以上、私の帰りつける場所は姫様のところしかない。姫様は私をお認めになって下さった。中納言様の恨みなど露ほどもお知りになる事もなく、私自身をお認めになり、私の琴を必要として下さっている。やすらぎだつて認めてくれている。

ふるさとを失つても、私の心のふるさとは姫様のおそばだ。

それに康行も私の琴を認めてくれた。私がかここにいるのは確かに中納言様の思惑の結果なのかもしれないけれど、姫様や、やすらぎや、康行が私の琴を認めてくれているのは確かだ。きっと私の琴の音は、他の方々の心にも響いていらつしやるに違いない。お母様は私を望まなかつたかもしれないけれど、お母様の琴を弾く心は、私の中に受け継がれていた。

お母様。私、琴を弾き続けるわ。何があつても。お可哀そうなお母様の分まで。

お母様が望まぬながらも生んで下さった命だもの。決して無駄になんかしない。

そんな思いで姫様の御寢所に戻る途中、私は突然、誰かに呼び止

められた。見ると、下働きの少女が縁の下でかしまって膝をつき、頭を下げている。よく見ると昨夜康行と会っていた少女だと気がついた。

「お呼び止めて申し訳ございません。私、大納言家の下女で、ここへは康行に連れて来て貰いました。少し、お話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

私はまだ、混乱から立ち直ってはいなかった。一瞬、どうしようかと迷う。

「私のような者がこのように奥まったところへ近づいてはいけない事は分かっております。こんな奥まで入って来たのは私の勝手な振る舞いでございます。康行は知らないことなのです」

少女は頭を地面にこすりつけたままそう言った。とはいえ、彼女のような身分では高貴な方々の住む建物に、容易に近づく事は出来ない。侍者の康行が通したからこそ、彼女はここにいるのだろう。私は少女が僅かに震えているのに気がついた。

それほどまでして少女は私に話したい事があると言う事だ。私は彼女の話聞く事にした。何と言っても少女の声が、とても断れるようものではなかったから。

「かまいません。私も本来、こんな所にいられる身ではないのですから。それで私になんの御用でしょう？」

私は緊張した。少女にただならぬ気配を感じる。

「花房様は一の姫様とともに大納言家の別邸にいらっしゃるのです

ね？」

「ええ、勿論です」

「こんなこと、私が言うのは大変失礼なのは承知しております。でも、私は覚悟してお声をかけました。どうか、康行をあなた様から解き放つてやって下さいまし」

少女は初めて私に向かって顔をあげた。燃えるような目をしている。

「解き放つ？ どういうこと？ 私は康行を縛った事なんかないわ」

私はうるたえた。それほど強い視線だった。

「いいえ、あなた様は、あなた様の存在そのものが、康行を縛りつけています。今、康行は苦しんでいるのです。とても。本当にとても苦しんでいます」

「どういうこと？」

「康行は、あなた様のために人を斬り殺してしまったからです」

少女は視線を外さずに言った。

ああ、前にもこんな目を見たことがある。これは桜子さんの目だ。あの人もこんな目で私を睨みつけていた。恨みと、嫉妬と、憎しみを帯びた目だった。

「康行は、あなた様の身を守るために、やむを得ず賊を斬り殺しました。けれど、その事にあの人はいまだに苦しんでいるのです。あの人は侍には向かない、本来、優しい人なのです。馬達を育て、慈

しみ、大将様にも優しい、仲間にも優しい、あなた様にも、私にも優しくしてくれる、そんな人なんです」

少女の視線が、ふっと柔らかくなる。康行への思いが、その目から恨みの炎を遠ざける。

「けれど、賊を斬ってしまったて、あの人の表情には陰りがあります。仲間達も心配しています。夜中にうなされる事もあるようです。あれからずっと、康行は苦しんでいるのです」

そして少女の目に、再び恨みの火が燃え上がる。

「康行は侍になってからも、決して人を殺した事はありませんでした。たとえ刀を合わせる事があっても、人の命を奪うような真似はしなかったそうです。そんなこと、出来るような人じゃないんです。きっと、自分の身が危険にさらされても、人の命を奪うことの出来ない人なんです。それなのにあの人は人を斬ってしまった。あなたを守るために。あなたのために人を斬ってしまった自分が、あの人は許せずにいるんです」

恨みで赤く染まった少女の目から、今は涙がこぼれおちている。

「康行が……可哀想……」

少女は泣きながらうなだれてしまう。

知らなかった。康行がああした後、そんなにも苦しんでいたなんて。私に歌を送ったり、励ましてくれていたその陰で、そんな風に苦しみもがいていたなんて。

私は何にも知らないまま、御所で楽しく暮らしたり、更衣様に肩入れしたり、姫様に気を回したりして、自分の事ばかり考えていた。あの賊を斬った時、康行はあんなにも震えていたのに。人を斬って、平気じゃいられないと、康行自身が言っていたのに。私は康行の歌をからかってさえ、いた。

「優しい人なのに。優しくて、みんなから好かれて、幸せにしていたのに、あなた様のためにこんなに苦しむ事になってしまって。それなのにあなた様は御簾のうちの一の姫様に付き添って、康行と同じ邸に暮らす。あなたの姿を見れば、康行は一層苦しむのに。もう、十分でしょう？あの人を苦しめるのは」

「ごめんなさい。私だって康行を苦しめたくはないわ。でも、私は姫君様のおそばにいなければならないの。私はどうすることも出来ないわ」

「それは存じております。決してあなた様のせいとは申しません。けれど、せめてさっきのように康行に声をかけるようなことはしないで頂けますか？」

少女は再び顔をあげた。

「さっきの話を聞いていたの？」

「申し訳ございません。でも、あなた様も昨夜、私達のことをご覧になっていらっしやいましたよね？」

少女の方では気づいていたのか。女人の勘が働いたのかもしれない。

「あの時私は康行に自分の気持ちを伝えました。私の方から一緒に
なつて欲しいと言いました。でも、康行は受け入れてくれませんでした。
自分は一殺しだと。人の心に応える資格はないと言っていました。
勿論、それだけではないはずですが」

少女の目から、嫉妬の火は消えずにいる。私はその目をそらして
しまつう。

「私は言いました。それでも康行が好きだと。お願いです。もう、
康行にかまわないでください」

少女の目が、嫉妬から哀願へと変わる。本当に康行を想っている
のだらう。

「あなた様には大切にしている方が、他におられます。康行も大切
なのでしょうが、一の姫様の事も大切に思っていていらつしやる。でも、
私には康行より大切な人はいないんです。お願いです。康行をあな
たから解き放つてあげて下さい。そうでないと、康行は苦しんだま
まなんです」

康行は私のために人を殺して苦しんでいる。なのに、私は姫様
にお仕えする道を選んでいる。しかも、それを康行は認めてさえくれ
ている。少女の言うとおりだ。私はこれ以上康行を苦しめてはいけ
ない。

「勝手な事ばかり申し上げました。私の事はいかようにも御処分下
さい。でも、康行の事は、もう、かまわずにいてあげて下さい。名
も告げずに失礼な事ばかり申しました。私の名は」

「いいえ。名のすることはないわ。あなたは独り言を言っただけ。私

はそれを聞いてしまっただけよ。そして、もう康行に声をかける必要はないって思っただけ。私達はただの通りすがりよ」

そう言っつて私は自分の局に向かう。今、姫様のそばに行く気にはとてもなれなかった。

私は心配して様子を見に来たやすらぎに「気分が悪い」と言っつて、姫様に少し休ませてもらうとことづけてもらった。とにかく一人の時間が欲しかった。

私は康行に助けられた後の事をあらためて思い出してみた。男を斬つた後の康行は、小さく震えながら異様な気配を漂わせていた。あの時は無事に帰りつく事だけを考えて気を張っていたが、それでも康行は普通ではなかった。

私が目覚めてから会つた時も、明らかに様子がおかしかった。もともとよくしゃべる男ではないが、それにしても黙りがちだった。ついには私が尼になるんじゃないかとさえ、勘ぐっていた。私がそんな性格じゃない事はよく知っているのに。

あんなに嫌っていた和歌を、私に贈ってくれたのも考えてみればおかしかった。もう、どんなに私を心配しても、これからは距離が離れていく事を、康行は知っていたのかもしれない。

私が姫君様のそばに近づくほどに、康行との距離は離れていく。彼は私のために人を斬りさえしたというのに。

私は姫様から離れることはできない。姫様は私の心のふるさとだ。

それだけははっきりしている。それならもう、康行に近づいてはいかない。

甘い時間

ここにきて私はどれだけ康行に甘えていたのか思い知った。いや、康行だけじゃない。大将様にも、姫様にも、やすらぎにだって甘えていた。

大将様だって、三条の姫君をお迎えになる以上、より、姫様との絆を深めなければならぬ。姫様を正妻として御身の内に置きながら、もし、三条様よりもお通いが少なくてもなるうものなら、口さがない都人は何を言っても分からない。かと言って、三条の姫を軽んじるそぶりを見せれば、これも立場を危うくするだろう。きっと、私どころではなくなるはずだ。

姫様だって、まだそうとうお若いにもかかわらず、身分も責任も一気に重くなられる。ご両親のもとでお暮らしになるのとは違い、大納言家の別邸とはいえ、大きなお邸を一つ、ご自分で采配し、切り盛りしなくてはならなくなる。それに、三条の姫と寵も競わなくてはならないし。これからは大変なはずだ。

やすらぎだって忙しくなるだろう。何せ、夫が同じ邸の中にいるのだ。自分の実家に通わせて両親が夫の世話をしてくれるのならともかく、彼女は母親とともに邸の中で夫の世話をすることになる。金銭的な援助は実家から受ける事が出来るだろうが、何かの席での衣装の用意や、こまごまとした雑務は母親と二人で実家に伝えなくてはならない。とても、私に気を回す余裕は無くなるはずだ。

姫君様が北の方となられる事で、色々な事が変わっていく。全てが今までとは違ってしまふのだ。

今までのように人に甘えていては、姫様をお守りするどころか、自分が都で生きていけなくなってしまう。もう、私は姫様のおそばにしか生きてゆける場所など無いのに。

これからは本当に覚悟が必要なんだわ。寂しがってなんかいられない。しっかりしなくっちゃ。私は衣装や化粧を直して、あらためて姫様の元へと向かった。

それから私は不用意に御簾の外へ出ないように気をつけた。まして、縁になど近づかない。出来うる限り康行に姿を見られまいとしていた。

そんな私の様子に、やすらぎが気がついた。仕方がないだろう。それまではちよくちよく縁に出ていた私なのだから不審がられて当然だ。仕方なく私は康行の事を白状した。下働きの少女の事は告げずに。

あの少女の名前を聞かなくて本当に良かった。これであの人まで傷つけてしまつては立つ瀬がない。

「康行らしいわね。彼はあなたが身代わりになっている事を知らない時でも、全力で姫君様を守ろうとした人ですものね。でも、それだけに心配だわ」

そうだ。その時やすらぎも私達のそばに居たんだっけ。

「ええ。でも、もう私にはどうする事も出来ないわ。康行自身が立ち直ってくれるのを信じるしかないのよ」

「それはそうなのだけれど。今はね、また物騒になっているの。これまでの盗賊達だけではなく、山賊達まで都に入ってきているらしいの。真夜中に都大路で牛車が襲われたりしているのよ。そういう時に真つ先に盾となって主人を守るのは、従者よりも侍者でしょう？　もし、そんな事になったら、康行は大丈夫なのかしら？」

「そんなに怪しげな者達が増えているの？」

私は不安になった。康行は今後も姫様の護衛につくと言っていた。

「いい話は聞かないわね。三条殿も検非違使を手配して、懸命に賊を追いかけているらしいけれど、捕まるのはいつも雑魚ばかり。数は多く捕まっているけれども、肝心の親玉や、先帝の息のかかった貴族達の尻尾はつかめずにいるのよ。かえって都の外からならず者を呼び集めてしまうみたいで、ちっとも安心できる状態にならないわ。せつかくの桜の季節だと言うのにな」

そう。季節はすでに桜を満開にしていた。あちこちで毎晩花見の宴が催されている。大将様も、色々お声がかかるらしく、あちらこちらへとお出ましになっているらしい。当然、その後を康行もついて行っているのだろう。

「康行も、向いていないなら侍なんて辞めればいいのに」と、やすらぎは言つが

「ううん。康行は辞められないと思う。私が姫君様から離れられないように、康行も大将様から離れる事は出来ないの。それがどんなにづらい仕事であっても。私には解る」

そう、私には康行の気持ちがよく解る。康行が私を理解し、認め

てくれたように。どうしても解ってしまうんだ。

「花房……」

やすらぎは心配そうに私の顔をじつと見ていた。

いよいよ姫様が、大納言家の別邸に移られる日取りが決まった。占いに手間がかかったらしく、あと、十日足らずしかない。私達は引越しの準備に大忙しとなってしまう。

大將様と三條の姫の結婚も本決まりになったようで、こちらの引越してからひと月の間をおかずに、ご結婚される事となったようだ。向こうも勢いがそがれない内にと、急いでいるのだろう。

引越しの支度や手続きをするのに、御簾の奥に引越込んでばかりもられない。私も寢所の縁や、ひさしの周りに出て歩く機会が増えてしまった。ただし、のんびりと庭を眺める余裕など無く、気ぜわしさに追われて、バタバタと歩きまわるような日々ではあるが。

そんな中で偶然、康行の姿を見かけた。彼は刀を腰にさし、何やら広げた紙を片手に、仲間の男と話していた。おそらく引越しのために物を運んでいる者達の、出入りを確認しているのだろう。次々と庭先を通る人たちに、声をかけたり、手を振って見せたりしている。おそらくは皆、顔見知りになっているのだろう。

康行は皆に愛想のいい笑顔を見せていた。

私と居る時の康行は、いつも心配そうな顔をしていた。そして時

折あきれたような顔もした。

康行が私に見せる笑顔は、少しひねくれた、意地の悪い、からかうような笑顔だった。こんな素直な笑顔を私に見せたことなど無かった。いつだって私をからかって、心配して、それでも目の奥は優しく、私を元気にしてくれた。故郷の匂いを運んで来てくれた。

そういえばこんな風に、彼の姿をしげしげと眺めた事もなかった。思ったよりも元気そうだ。表情も雰囲気も、前より明るさが感じられる。良かった。

そう、康行は私に会わなくても一人でちゃんと元気になった。私もすっかりしなくっちゃ。

いつまでも立ち止まっただけでは康行に気付かれてしまう。私はそくさとその場を立ち去ろうとした。

ところが去ろうとする気配が伝わったのか、康行がこちらを振り返った。私は慌てて御簾の中に引っ込む。そんなことをしていると何だか急に恥ずかしくなってきた。康行を盗み見るような真似なんて今までした事が無かったから。いやに胸が高鳴った。

そつと、康行の方を振り返る。康行がその場を去る気配はない。私は近くに琴が置かれている事に気がついた。誰の物かは知らないけれど、ちよつと拝借する。

私は琴をつま弾いた。出来うる限り優しい音が出るように、康行に届けとばかりにそつと、想いを込めて弾いた。

そういえば以前、康行は姫様の三日夜の宴で、私の琴の音を聞き分けてくれた。そして良い演奏だったと褒めてくれる歌を送ってく

れている。

もう、康行とは関わることはできないかもしれない。それなら、せめて。

私はひたすら心をこめて琴を弾く。康行からは御簾の中にいる私の姿は見えない。それでもまるで見えているかのように視線をじつとこちらにあてている。その視線は何処までも深く、どこまでも優しい。いつだって康行はこうやって私を見守ってくれた。

私は琴の音に康行を想う心に乗せた。子供の頃約束してくれた優しき、都に出てからも私を見守ってくれた優しい瞳。彼に会うたびに感じていた故郷に吹く風の匂い。そんなものをこの音に乗せる。

目を合わせる事も叶わず、声を掛け合う事も許されない。そんな恋の形を、今、私は初めて知った。この都に暮らす姫君達は、皆、こんな心を抱えて生きているのだろうか？

そこに仕える女房達も、こんな苦しい思いを幸せに変えるすべを手にしようと、必死に生きているのだろうか？

康行に見つめられて、見守られながら琴を弾ける幸せ。私はその甘い時間に酔っていた。

出来るなら、このままずっと、時が止まればいい……。

「康行」

声をかけられて康行がハツとした。私の手も同時に止まる。

康行はさっきの仲間に顔を向け、どこかへと向かって行ってしまった。

伝わっただろうか？ あの、夜に弾いた琴の音の様に、康行の心に。

私はしばらく呆然とそこに座り込んでいて、姫様がお呼びだと他の女房に声をかけられるまで気づかずになっていた。

三条邸

「何をしているんだ？ 交代の時間だろう？」

同じ侍者の仲間が、康行に声をかけた。

「ああ、すまない。ちょっと、ぼうつとしていた」

「大丈夫か？ 今夜もお前は若君に付き添って、三条様の邸でおこなわれる花見の宴の護衛をするんだろう？ 不安があるなら俺が代わってやってもいいぞ」

「いや、大丈夫だ。心配いらない」

皆、自分が夢にうなされ、苦しんでいることをよく知っている。侍者を辞めて故郷で馬を育てればいいと言ってくれる者もいる。若君に尽くすのは、何もおそばに仕える事ばかりではないと言える。れる。

それでも俺はここを離れようとは思わない。少なくとも、今は離れてはいけないと思う。

今、都を離れると言う事は、自分に負けると言う事だ。若君の身を守り、花房の行く末を見守ることを、俺は目標にしていた。都を離れて故郷に逃げ帰るのは、自分の苦しみに負け、目標を放り投げるのと一緒に。今、故郷に帰ったからと言って、人を殺した苦しみは逃れられるものではないのだから。

それに、あの琴の音。

俺には高貴な方々のように、演奏の良し悪しなんて分からない。何が上手くて、何が下手かもよく分からない。

だが、花房の琴の音は何かがちらに伝わってくる。時に心苦しく、時に心優しく、耳の中に寄り添うように、心の中にしみこむように、あの音が何かを揺さぶってくる。

さっきの音色は、いつも以上に優しい音色だった。苦悩も罪も、まるで洗い流される様な、すべての事が許されるような音色だった。

この音を絶やさせてはいけない。花房を見守ってやらなければいけない。何故か、強くそう思う。

花房の琴の音は、俺に必要な勇気をくれるんだ。

そんなことを考えていたら、そばに撫子が寄って来た事に気がついた。しかも、その頬が濡れている。

「どうしたんだ？ こんなところで。泣いているのか？」
驚いて声をかけると、

「違うの。ごめんなさい、付け回してしまって。今、あの琴の音を聞いていて……。あの琴は、花房様が弾いていらしたのでしょ？」

そう言って、撫子が袖で涙をぬぐった。

「美しい、優しい音色だったわ。康行を心から慕う音色だった。康行にも分かっているんでしょう？ 花房様も康行の事が好きだと」

そして、目を伏せて苦しげな声を出す。

「私、花房様に申し上げたの。もう、康行をかまわないでって。花房様が御簾の内におられる以上、かえって康行を苦しめるからって」

「撫子」

「でも、そんな事は無いのね。あんなに素晴らしい琴の音で、花房様は康行を慰めて下さる。康行も花房様のお心を想いやってあげている」

撫子は軽く首を横に振った。

「あんなことを一方的に告げたのに、私達はただの通りすがりだと言って、花房様は私の名をお聞きにならなかったの。強い、お優しい方なのね」

「……あいつらしいな」

「私なんかには敵わないわ」

そう、撫子はほほ笑んだ。

「そんな事は無い。撫子は本当に優しい娘だよ」

そう言つと、撫子の笑顔に少し、さびしげな影が加わった。

「俺よりも、その優しさに似合う奴が必ずいるよ」

康行がそう言つと撫子は、

「その言い方、ずるい」

と言つて、口をとがらせた。

「綺麗な端切れをありがとう。そして、素敵な気持ちも。思い出にするにはまだ悲しいけど、ずっと大切にするわ」

「すまない。ありがとう」

そう返事をする、撫子はどこか満足そつな表情で、頷き、去つて行つた。

本当に可憐な少女だったと、康行は思った。

その夜、三条様のお邸に向かう前に若君からお呼びがかつた。しかもこつそりと耳打ちされる。

「すまないが、三条の邸に行ったら向こうの下人達の噂話を、聞き集めておいて貰えないか？ どうも三条殿は気の許せぬところがある。検非違使の役人の態度も良くないらしくて、主上もひつかかつておいでらしい。こういう事はお前にしか頼めないのだ」

無事に三条邸に着くと高貴な方々は早速、春の宵の桜の宴を楽しみ始めた。

お付きの従者や侍者の我々は、ささやかな酒と肴をもてなされたが、食事はともかく、酒はほんの口を湿らせる程度に抑えなければならなかった。

近頃は帰り道が物騒だ。こちらの姫君の元へは通うと言つてもい

結婚なさるまではお泊りにはなれない。宴が終われば暗い夜道を遅くに帰らなければならぬので、若君をお守りする立場の我々が酔う訳にはいかない。

しかし、おりしも桜は満開の時。宴は盛り上がり、高貴な方々は上機嫌で下々の下男下女にまで酒がふるまわれたらしい。帰り道の心配がない三条邸の使用人たちは、いい機嫌で酔っ払っている。

「三条殿はご機嫌なようだな。使用人にまでこんなに酒をふるまっ
て下さるなんて。羨ましい限りだ」

康行は三条邸の侍者に声をかけた。

「まあ、今は勢いがおありになるからな。以前は結構ケチで、冬の炭まで使う量に文句を言っていたもんさ。それがどうだい？ 最近
は物取り、強盗の類を捕まえているおかげで、春の宴の振る舞い酒
お宅の若君のような公達まで娘婿に迎えようっていうんだから、雲
泥の差だよ」

酒のせいか、侍者の口もなめらかに動いている。様子からすると同郷か、似たようなあたりから上京した者に思えた。それで気を許しているのかもしれない。

「三条殿はこのところ、ご活躍が目立つからな」
康行はそう、水を向けた。

「そのご活躍って奴も、ちょっと怪しい感じなんだがな。大きな声
じゃ言えないが」

「どづい事だい？」

「実はこの間捕まったはずの盗賊が、こっそりこの邸にかくまわれていたようなんだ。広い邸だから一部の者しか姿をみなかったそうだが、人相は確かにその盗賊だったそうだ。検非違使を使うのが三条殿になってから、いやに盗賊達を捕まえるのが素早くなったのは、案外三条殿が盗賊達の手引きをしていてわざと捕まえては逃がしているんじゃないかって、下男たちの間で噂になってるんだ。……噂だぞ、あくまでも噂」

「ああ、分かってるよ。噂だな」

「今時、お偉い方が悪党を使いこなすつてのも、ない話じゃないかな。あの、先の帝もそうだったって言うじゃないか。ひよっとしたらまた、前帝が裏で手を引いているんじゃないか？ あの方も帝の位を降ろされてから、すっかり執念深くなられているようだし」

「そうかもしれないな」

「こつこついう時は帝がすっかり、兄の前帝を処分しなければ世の中は安定しないんだがな。他に誰も前帝を諫めたり、押さえつけたりできる者はいない。だが、今の帝はどうも情に流されやすい。特に身内に甘過ぎるから前帝だつてつけ上がるんだらう」

「御兄弟の事でもあるし、帝位をあんな追われ方をなさっているからな」

「まあ、どつちにしたつて、そのおかげで俺達は美味しい思いが出てきているんだから、文句は無いんだ。だが、三条殿が危ない橋を渡っているならいつまでものんびりはしちゃいられない。何処でこつちにとばっちりが来るか分からない。なあ、あんだ。六条殿の邸に

仕えてるんなら、俺を紹介しちやもらえないか？ そろそろ俺も鞍替えしないと。高貴な方々が右往左往しようとか関係ないが、こっちは飯が食えるかどうかがかかってるからな」

そう言われると康行は苦笑いを浮かべるしかない。身分の高い貴族たちは自分達のようにやしいものを人もなげに扱ったりもするが、庶民は庶民で世の中の事より自分の事。明日も飯を食っていけるようにしたたかに生きて行くものなのだ。

どんな身分であろうとも、この都で生きて行くのは生易しいことではない。

上の者は下の者を見下しているし、下の者は上の者を影で嘲っている。悪党であろうと、善人であろうとそれは同じだろう。

悪党だったとはいえ、俺はそうやって日々、懸命に生きていた命をこの手で奪ってしまった。

そうまでして助けた花房の命だ。やはり俺は彼女の人生を見届けてやりたい。

たとえ世界が違ってしまっても。

信頼

私はいつものように姫様の元へと急いでいた。ところが、ひさしの下を歩いている途中、突然、何者かに衣の裾を引つ張られ、転びかけた体制を立て直そうとした途端に、ぐいと身体ごと近くの部屋の内に引き込まれてしまった。

あまりの事態に何が起こったのか分からずにいると、そこに、大将様がおられた。私の衣の裾をつかんだままでおられる。私をここに引つ張ったのは、どうやら大将様らしい。

「どうなさったんですか？　こんなところで」

私はとりあえずホツとした。大将様はなかなか型破りな方なので、時にはこのくらいの、戯れ心をお見せになってもおかしくは無いから。

「どうもこうも。あなたを待ち伏せしていたんですよ。あなたの方こそ一体何があったのです？　ずっと様子がおかしいじゃありませんか。姫ややすらぎも心配しておいでだ。私はてっきり康行の事だと思つてやきもきしていたが、どうやらそれだけではないようですね。あまりにも沈み過ぎています」

「何を勘違いなさっているんです？　別に何でもありません」

「いいえ。勘違いなどしていませんよ。今までに幾度あなたの琴の音を聞かせていただいたと思つていらっしゃるんですか？　このところ、あなたの弾く琴には悲しい音が響いてくる。哀切を帯びているんです。まるであなたらしくない。さあ、何があったか教えてくれないと、

この衣を離しませんよ。正直に白状しなさい」

「大将様には、関係のない事です」

「そんなおっしやり方をしてはいけませんね。あなたは私の藤の花なのですから。藤の花が萎れてしまつては、ホトトギスはなすすべもありませんよ」

そう言つて、私に少し、にじり寄つてこられた。

「何だか思いだしますね。あの、初夜の時のことを」

そう、懐かしそうにおっしやられる。

大将様がからかつておっしやっているのは分かっている。いつもだったら、私もツンと澄ましてやり過ぎるところだ。だが、私は嫌な記憶を思い起こしてしまつた。

あの身代わりの初夜の前夜、私は桜子さんと、前帝方の手の者に連れ去られそうになつた。口をふさがれ、息もできずに身動きを封じられて連れ去られる恐怖。お母様もあんな恐怖の中で、お父様に連れ去られてしまつたのだろうか？ そして、強引にお父様に押し通されてしまつたのだろうか？

私はぞつとした。大将様のもの慣れたしぐさも厭わしくなつた。思わずバツと背を向け、身を縮め固くなつてしまふ。自分が震えているのが分かつた。

大将様は呆然となされている。私自身も驚いていた。

「本当に、どうなされたのです？ 何でもないとはいわせませんよ」
大将様の言葉が、詰問するように変わった。

「男君って……みんなこうなんですか？ 女人の気持ちなど考えず、自分の想いを遂げるためなら、平気でこんなことをなさるんですか？」

私は裾を引きちぎれんばかりに引っ張ったり、喘ぐように言った。

「私をさらった男達も！ 大将様も！ お父様も！ みんな、女人のことなどお構いなしに、平気で傷つけたりなさるんですか！」

いつの間にか涙がこぼれていた。

「その拳句に、望まれずに生まれて来る人もいるんだわ。私みたいに……」

嗚咽がこらえきれなくなった私は、その場に突っ伏して泣きだしてしまっただ。

大将様はさぞ、驚かれたことだろう。なんの関係もない事だったのに。

私だってこんなこと、言うつもりなんかなかった。だけど、大将様のしぐさにどうしようもない恐怖を感じて、自分に抑えが効かなくなってしまうのだ。

それでも大将様は、私に寄り添って下さった。まるで幼子をあやすかのように頭を優しくなでて下さっている。でも、決してそれ以上、私に近づこうとはなさらなかった。

私は子供の頃、お父様にこうやって慰めてもらった事を思い出した。確かにお父様は私に心から優しくかった。あんなにお優しいお父様だったからこそ、お母様になさったことが許せないと思った。

でも、今こうしてお父様のことを思い出していると、やはり、お父様がお母様に酷い事をなさったとは思えない。私をあんなに慈しめる人が、困窮したお母様につけいるようなことが出来るのだろうか？　そして、そんな女君を傷つけるようなことが出来るだろうか？

「少しは、落ち着かれましたか？」

大将様にそう聞かれて、私はどうにか鼻をすすりあげながらも、「はい」と返事をした。

「とにかく話を聞かせて下さい。何か、私がお力になれることがあるかもしれませんが」

そんな、大将様のお優しい言葉に促されて、私は中納言様から聞かされた、私が生まれてきたいきさつをお話した。

「そのような形で、ご自分の御母上の家のことを知ったのは、さぞかし驚かれた事でしょう。しかしその話、すべて信じる必要はありません。おそらく中納言様に都合の良い憶測が入っています」

「憶測？」

「たしかに当時、あなたの母上が下司の者にさらわれたと言う噂はありました。しかしそれは、怪しげなところへ連れ去られたと言う訳ではない。あなたの祖父殿のお身のうちの邸に、かくまわれていたそうです。ひょっとしてあなたの父上の身分では、あなたの祖父殿は表立って母上の事を許すわけにはいかないのです、見て見ぬふりをなさったんじゃないでしょうか？」

「どうして、大将様がそんなことをご存じなんですか？」

私が生まれる前の話なら、大将様もまだお小さかったはず。

「申し訳ありませんが、あなたの事は大納言家でも少し、調べさせていただきました。あなたは私の北の方となられる方の身代わりを勤めようとなさったんですからね。その時に大納言家でもあなたの素性を知っておく必要があったのです」

「では、私を妻にしたいとあの時おっしゃったのは、私が身分の低いお気楽な相手だったからではなく、一応、宮家の血を引いているからだっただんですか？」

血を引くったって、孫じゃ薄くなってるし、下司の血も混じってるけど。

「どちらも違います」

「じゃあ、どうして」

大将様はあきれたように目を丸め、ため息を突かれた。

「あなたは私にそんな野暮なことを言わせるおつもりですか？ 私
はあなたのホトトギスで、あなたには歌まで贈っていると云うのに」
そう言つて大将様はクツクとお笑いになる。

「とにかくそのお話は、すべてが真実ではありません。あなたの祖
父の大臣は前帝のことを最後の最後まで、真剣にお諫めなさつてい
たそうです。それは私の父も見ているそうですから間違いありません。
むしろ、そのせいで大臣は本当に身の上が大変な事になってお
られた。そのままではご自分の一族はおろか、ご自分に味方をして
下さつた他の大臣の方々にまで累が及びかねないと自ら官位を返上
し、仏門に入る決心をなさつた。一族を栄えさせる貴族としては良
くない選択をなさつた愚かな行為でしょうが、大臣たちを守り、政
を硬直させなかつた政治家としては立派な振る舞いであつたと父は
言っています」

立派だつた。私の祖父は。決して国を見捨てたり、母を見捨てた
り、私を見捨てるような無責任な方じゃ無かつた。

「父はこうも言いました。あの大臣の孫であるなら、中納言家の姫
の身代わりを買つて出るのも領ける、と。父がそう思うほど、あな
たの祖父殿は責任感のお強い方だつたのでしよう」

あの大納言様が。都を実質的に支配しているような方が、私のこ
とをそんな風に言つてくれていたなんて。

「そのような方が、ご自分の大切な娘を粗末になさると思えますか
？ あなたの父上と、母上がどのようないきさつで結ばれたかまで
は分かりませんが、決してあなたが誤解しているようなことではな
かつたと思いますよ。男と言うものは確かに愚かかもしれません、
女人が思うほど、情け知らずな者ばかりではありません。私の事も、

もう少し信頼していただきたいものです」

「申し訳、ありませんでした……」

大将様は、こんなにもお優しいのに。

「謝る事はありませんよ。先に戯れたのは私ですしね。私には姉君と弟がおりますが、もしも妹姫と言う方がいたのなら、このような気持ちになるのかもしれないね」

大将様はそう言ってほほ笑まれる。私も明るい気持ちを取り戻す事が出来た。

「ありがとうございます。さあ、もう、姫様のところに参らないと、そう言って私が立ちあがると、

「そうですね。だが、お忘れにならないでくださいよ。いくら妹姫の様だと言っても、私はあなたに衣を着せかけた仲なんですからね」

そう言って大将様は、快活にお笑いになられた。

陰謀

忠長は足取りも軽く、月夜の下、都大路を歩いていった。いつもは主人の車に寄り添ったり、馬の横に徒歩で付き添ったりして歩くか、仲間たちと連れ立って歩く事が多いが今夜は一人だ。

いや、昨日も一人、おとといも一人歩きだった。何故なら、結婚のためにやすらぎの元へ通っているのだから。

今夜は三日目の晩、三日夜の宴の晩だ。

宴と言ってもまだ若い彼の身分ではやすらぎの両親と身内、彼の親しい仲間が数人殆んど冷やかしまぎれに酒と肴を楽しみにしているような物で、質素な、ささやかなものである。

それでも忠長は満足していた。年は若いがかっかり者で、声が良く、見た目も可愛らしいやすらぎは親元も良く、忠長の仲間内でも狙っている男は少なくは無かった。

しかし、中納言家の一の姫の女房の上、母親は姫の乳母。御簾の奥で働き、母親がいつもそばについているやすらぎに、手紙を送るのはなかなか骨が折れた。

正直、手紙さえ送ればそれなりに自信が忠長にはあった。やすらぎは一の姫の乳姉妹。自分だって若君の乳兄弟だ。権門の家に仕える出自のいい女房を手に入れられれば得だと考えているような輩の、自己保身が透けて見えるような誘いには、やすらぎは乗らないはずだ。

乳兄弟として主人に仕えると言う事がどういう事か、自分とやすらぎには分かっている。血こそ違えども、共に育ち、共に学び、それでも、その家の繁栄があつてこそ、主人の健やかな成長があつてこそ、自分の人生が成り立つ。人に仕えて一生を生きる覚悟を持つというのがどういう事か、やすらぎとは共に分かち合う事が出来る。

信じる心と、支える愛情がどういうものかを彼女は知っているはずだ。

そんな事も知らずに、彼女の噂と、出自につられて口説きにかかる様なやつらに、負ける訳が無いと思つていた。

余計な甘言は一切使わなかった。もしも気持ち動いたら、自分と逢つて欲しいとだけ書いた手紙を、母親の一瞬の隙について、若君の手紙の下にこっそり忍ばせ、目くばせをただけだ。

その代わり、手紙を渡す前には十分に自分の事を見てもらえるように、工夫を凝らした。見た目に自信がある訳ではないが、若君に仕える態度がどれだけ真摯なものであるのか知ってもらつた努力をした。自分を良く見せる事よりも、その方がやすらぎには効果的だと分かつていた。

そして、やはりやすらぎは、色よい返事をよこしてくれたのだ。

実際に逢えるまでには時間がかかったが、忍びやかな文のやり取

りで、互いの気持ちは十分に伝わっていたので、あせる必要もなかった。そしてやすらぎは受け入れてくれたのだ。

「そうやって迎えた結婚。そしてついに迎えた三日夜。足取りだつて軽くなるうつと言つもの。」

明日には中納言家の姫が、大納言家の若君の北の方となられる。そうなれば北の方をお迎えするお世話で、こつちも忙しくなつてしまふ。やすらぎだつて同じだろう。夫婦で睦まじくできるのは、今夜をすぎるとしばらくは難しくなつてしまう。だから余計に今夜は特別なのだ。

一刻も早くやすらぎの元へ、と思つ反面、冷やかすのを手ぐすね引いて待つているであろう仲間達を、ちよつとじらしてやるうかなどとも考えてしまい、歩を緩めたり、先を急いだりと、落ち着きのない歩き方をしてしまつてゐる。

そんな落ち着きのない歩き方をして、何度目かに歩を緩めた時に、不意に夜風に乗つて人の話し声が耳に入ってきた。

忠長は一瞬ひやりとした。夜の京の街は物騒だ。物取り、強盗の類が暗闇で待ちかまえていることもざらだ。思わず足を止めてしまふ。この辺は下町なので小さな建物の間は暗闇で、悪党が潜んでいてもおかしくは無いのだ。

「では、姫君の行列が三条の大路を通る事は間違いが無いんだな？」
ひそひそと囁くような声がする。

「ああ、ここだけはどうしても避けて通れないはずだ。この辺の警護の者には金をつかませてあるが、あの方のお力を借りれば、より、

手薄にする事も出来るはずだ。旨く行けば大将殿の動揺は相当なものだろう」

「中納言殿も……しっ！」

会話が突然途切れる。忠長はとっさにモノ売りか何かが出しっぱなしにしていたらしい荷物の裏に身を隠した。じっとして、息まで止めてしまふ。

「何か影が映っていた気がしたが。樹の陰か？」

「またあとで連絡する」

そして人が立ち去る気配。やがて周りは静寂に包まれた。忠長はようやく息を着いた。

これはえらいことだ。役人に知らせるべきか？ いや、警護の者に金をつかませていると話していたのだから、役人はあてにはならない。中納言家に伝えるか？ それならやすらぎの母親に直接伝える方がいい。何せ、姫、いや、若の北の方になれる方の、乳母なのだから、一番確実だ。

忠長は浮かれた気分から一転して、やすらぎの実家へと駆け出していった。

一方、やすらぎの実家では、酒や肴の用意も出来て、花婿はまだかと意気揚々として待っていた。

だからその花婿が案内も乞わずに転がるように飛び込んで来た時は、皆、啞然としてしまっていた。

「たつ大変です！ 中納言家の一の姫が何者かに狙われています！」

忠長は息も切れ切れに、事の次第を説明した。

「暗い路地裏の事なので、賊らの顔も分かりません。声もかなり忍ばせておりました。しかし、明日、姫君が三条のあたりで狙われる事は間違いないでしょう。検非違使の役人をつかさどる三条殿の目と鼻の先で警護の者を買収するほどの輩です。何が起こるか分からない。御移りになる日取りを変える事は出来ないものでしょうか？」

「それは難しいと思いますわ。でなくても、占いに手間がかかってなかなか日取りが決められなかったんですから。これ以上日を伸ばすとなると、御移りになること自体、難しくなってしまうでしょう。それだけでなくも中納言様はあせってらっしゃるのに」

やすらぎの母は几帳越しに狼狽しながらも、大納言家にチクリと皮肉を込めた事を言う。

「だったら、警護を厚くするとか、三条のあたりをしらみつぶしに見回るとか、何らかの手を打たないと。姫君の身の安全が一番大切な事なのでから」

主人の家への皮肉にめげることなく忠長は言った。

「そうですね。とにかく私が中納言家に知らせに行きます。下男に行かせるよりも話が早いでしょう」

やすらぎの母がそこまで言った時、奥からやすらぎが顔を出した。母親が慌てて娘を押しとどめる。

「何ですか！ 人の妻が人前に顔を出そうとするなんて！」

「そんなことかまっていられませんわ。姫君様の身に危険があると
言うのなら、私もすぐ、姫君様の元に行きます」

「落ち着きなさい。すぐにどうこうということではありません。明日の事について、中納言様にご相談申し上げて来るだけです。あなたも人の妻になられようと言うのに、そんなに軽々しくてどうしますか？ 明日には姫君様の元に行けるのですから、まずは部屋にお戻りなさい。忠長様、やすらぎをお願いします。あなた、この御友人方をお送りがてら、大納言家にもこの事を伝えていただけませんか？」

妻に言われて、やすらぎの父も慌てて支度を始める。妻の牛車の用意や、自分の馬の用意をさせる。客達も帰り支度を始めた。忠長は無遠慮にやすらぎの部屋に入ってきた。

「なんです、不作法に女の部屋に入って来るなんて
やすらぎは八つ当たり気味だ。」

「何が不作法なもんか。俺はお前の夫だ。黙っていたら、お前は一の姫様のところへ飛んで行ってしまっじゃないか」

「当たり前じゃないの。姫君様は私の御主人なのよ」

「そんなの俺だって同じだよ。俺の大事な若君の北の方になられる方だ。だが、今はいけない。お前を放す訳にはいかないぞ」

そう言つて忠長は小さな餅が盛られた器を差し出した。夫婦が契りを交わした証し、三日夜の餅だ。

「明日になれば俺達は若君、いや、殿とお方様の事で頭がいっぱいになるだろう。俺達はそういうふうに着てきているんだ。他の事なんて考えられなくなってしまう。だから、今夜はどうしてもお前と無事に共に過ごしてこの餅を食べてもらうまでは、お前をこの部屋から出さない。殿とお方様に負けないくらい、俺はお前が大事なんだ。文句があるか？」

そう言つて忠長はどっしりと腰を据えてしまう。やすらぎの着物の裾をつかんだままで。

やすらぎはじつと忠長の顔を見ていたが、やがて不満そうだった顔を和らげると、黙つて忠長の横に寄り添った。そつと、その頭を忠長に持たせかける。

「かえつて、うるさい冷やかし屋達が居なくなってせいせいした。最高の三日夜だ」

そう言つて忠長は笑つて見せた。

つられてやすらぎまで、一緒に笑いながら

「肝心のお餅を召しあがるのを、忘れないでくださいね」と、言つた。

行列

知らせを受けた中納言家では、急ぎ、占いをやり直させた。しかし、やはり近い日にちに吉日とされる日が無い。

日を伸ばしては三条家の姫君の結婚と、殆んど間がなくなってしまう。それでは中納言家の威厳が保たれない。

「やはり、明日大将様の邸に入られるしかないだろう。これだけの行列になると、道筋を急に変えるのも困難だ。姫の護衛を多くつけて、侍の数を増やすより手はあるまい。姫の車は他の女房車よりも護衛を手厚くしよう。いざという時身軽に動けるように、女房達は乳母を除いて皆別の車に乗せて、その護衛も姫の方に回す事にしよう」

中納言様は私達女房にそうおっしゃった。姫様のお世話をすべき女房がおそば近くにいられないのは異常な事だけでも、安全のためには致し方ない。逆に女房の護衛が手薄になってしまいが、姫様が狙われている事がはっきりしているのならば、まずは姫様の安全が第一だ。

朝を迎えやすらぎも戻ってきたが、お出かけになられる支度に追われながらも、皆、襲われるかもしれないと脅えながら心ここにあらずと言った風情になっていた。

「母が姫君様の身の周りを手厚く固めるために、かなりの役人と侍を用意してもらったと言っていたから、きっと大丈夫よ。もしかしたら、あんまり警護が固いので賊もあきらめるかもしれないわ」

やすらぎはそんな事を言って笑っている。遅くなった、と言うより、結婚直後の喜びがこれから起こるかもしれない不安をも上回っているのかもしれない。やすらぎの幸せそうな顔を見て、私はそんな事を思った。

牛車の準備が整うと、姫君様は母上様や妹姫様としばらく別れを惜しんでいた。別の建物に分かれて暮らされていたとはいえ、やはりお身内。邸を離れるとなると特別な思いがあるようだ。

これからも手紙のやり取りは頻繁に行われるだろうが、それぞれに簡単には屋根の外へ出る事も叶わぬ高貴な女人の身。直接お会いになれる機会は一層少なくなってしまうだろう。古くから中納言家に仕えていた古参の女房達も感慨深いものがあるらしく、中納言様や北の方様、妹姫様にお付きになっている女房達と、それぞれ別れを惜しんでいるようである。

お世話になった大勢の下男、下女、小者たちともめつたに会えなくなるので、皆が別れを惜しんでいる。懇意にしていた大納言家の使用人達もお別れに来てくれた。決して遠くに行く訳ではないが、やはり邸が変わればどうしても仕事に追われて疎遠になってしまう。邸とは沢山の使用人が暮らしている一つの町の様なもの。私などは暮らした時間が短いからいいものの、長く勤めている人達はその住み慣れた町を離れるのだから晴れがましくも悲しい時間だ。

私はその中に、あの下働きの少女の姿を見つけた。一瞬、目が合う。

少女は深々と頭を下げた。私も礼を返す。が、互いに言葉は掛けなかった。私達は通りすがり。そう、決めている。

あれから彼女と康行がどうなったのかは分からないけれど、彼女の瞳にあの日の嫉妬の炎は見受けられなかった。きっと、彼女なりに納得のできる何らかの結果が出たのだろう。私はそう思う事にした。

そんな訳で牛車の列が邸を後にしたのは定刻よりもずいぶん遅くなってからだった。でも、やすらぎが言うにはこの手の行列の出発が遅れるのは、ごく普通の事らしい。まして権門の家の姫が邸を移るとなれば大事なので、この程度の遅れは皆、許容範囲なのだそうだ。どおりで中納言様が簡単に道筋は変えられないとおっしゃったはずだわ。普通の引越しとはわけが違う。

その上中納言様や大納言様が手配した沢山の役人や侍達が、姫様の牛車の周りを物々しくぐるりと取りまいていて、一層行列をいかめしくしている。少し猛々しくはあるが、やはり心強い。

しかし康行がどこにいるのかは分からなかった。あまりにも侍の数が多いいのだ。この中のどこかにはいるはずだけど。私はつい、康行の姿ばかりを探している事に気がついて慌ててその思いを振りきった。

一の姫様や私の車の近くにいないのならその方がいい。少しは危険から免れやすくなる。もう、康行に人を斬る事は出来ないだろうし、斬らせたくない。そんな事になったら康行の心はどうなってしまうのか。危険な所には欲しくなかった。

ゆっくりと牛車が動きだして行列が前へと動き始めた。門前に居並んだ使用人達に見送られながら、私達は出発した。京の街の中を

見た目は悠然と進んでいく。

街中の事なので道を譲る下司や、商人、様々な人たちが野次馬になつて物珍しげに行列を遠巻きに眺めている。しかし、私達はいつ賊に襲われるか分からないと緊張して、周りを眺める余裕などなかった。誰もが先に行く姫君様の車に注目していた。

女房達の中には、こんな街中では人目につくから大丈夫だろうと囁いたり、いいえ、だからこそ野次馬にまぎれて襲う者がいるかもしれないと、身を固くして声をひそめる者などがいて、とても落ち着いてなどいられない。

それでも行列はゆるゆると進み、様々な屋敷が連なり、少し人通りの少なくなつてきた通りへと入ってきた。

もうしばらく行けば、問題の三条の通りだ。皆の緊張が高まってくる。そこに馬の蹄の音が近づいてきた。

馬にはなんと、別邸でお待ちになつているはずの大将様と、康行が乗っていた。行列に近付くと、

「生まれ、生まれ！」と叫んでいる。

行列は慌ててその歩を止めた。

「康行、姫の元へ！」

大将様がそう叫ばれて、康行が姫君様の車の前に馬で近づいてきた。

「この行列に、三条殿の回し物がまぎれている。行列を狙っている

のは三条殿だ！ 手の者はとつと立ち去れ！」

大將様はそう叫びながら、ご自分も姫様のお車に近付いていらっしやうた。康行と二人で馬上のまま姫様のお車に立ちはだかる。

「三条殿のたくらみは全て調べがついている。三条の邸の前で待ちかまえていた者達は全て、取り押さえた。あきらめて早々に立ち去るが良い！ でなければ容赦はせぬぞ！」

普段のみやびやかな物腰からは考えられないような大声をあげて、大將様は叫ばれる。皆、ざわざわと騒ぎ出した。

当然だ。三条殿と言えば盗賊、強盗たちを取り締まる検非違使の役人を統率する役目をしておられる方。その方が悪人達に加担しているのなら役人たちの動きは全てが筒抜け。どんなに追いかけてまわしても雑魚しか捕まらないはずである。皆、一様に信じられないと言った面持ちで大將様をご覧になっているようだ。

大將様と康行は姫様のお車を守るように立ちはだかっている。この中に三条殿の回し者が混じっているならば、どの人が敵なのか分からない。私は一気に不安にかられる。大將様や康行に、敵がいっぺんに襲いかかったら、どうしよう？ 康行は無事で済むものだろうか？

すると、突然姫様の護衛についていた侍達の何人かが、私達の女房の乗っている車に向かつて来た。なんと検非違使の役人まで混じっている。車にかかっている御簾を跳ねのけ、男達が車の中に入ってくる。

「花房と言う女房はどいつだ？ 返事をせい！」

いきなり名前を呼ばれて私は驚いた。なぜ、私が狙われるの？ 考えている暇はない。このままでは他の女房まで巻き込まれてしまう。

「私よ！ 私に一体なんの用なの？」
私は叫んだ。

「おお、こいつが大将の想い人か」
男が私の腕をつかもうとした。

そうか、狙いはあくまでも大将様か。大将様の動きを封じ込める事が出来るのであれば、別に姫様でも私でも、こいつらにはどっちでもいいんだ。ついでに中納言家の威厳に傷が付けば上々と言ったところなんだろう。これは簡単に捕まる訳にはいかない。

そう思っただけでも抵抗はするが、男の力にはかなわない。あっさりと腕をつかまれてしまう。すると、

「いいえ！ 私です。私が花房よ！ その人をお放しなさい！」
あろうことかやすらぎが男に向かってそう叫んだ。

「どっちだ！ 正直に白状せい！ でなければ二人とも斬って捨てるぞ！」

男はそう叫びながらも戸惑っている。私は顔色が変わりそうな思いを必死にこらえた。何とかこの男を混乱させて時を稼ぎたい。男はどうやら私の顔までは知らないらしい。私は男の手を振り切り、

思い切つて車の外へと飛び出した。こつちに気をそらさなくては。他の女房達に危害を加えられたくない。

しかし男はやすらぎの腕をつかんだまま、私の後を追つて来た。なんとかやすらぎから男を離したい。なのに私まで待ちかまえていた別の男に捕まってしまった。

私達は車の前で、それぞれつかまつたまま男達に取り囲まれる格好になった。その姿を見て大将様が動揺されたらしい。

守る

「花房！」

大将様が馬を下り、私に向かってこようとすることを康行が慌てて止めた。

「やすらぎ！」

忠長様もやすらぎに向かって駆けつけようとする。

「忠長！ 大将様を止めて！」

やすらぎが叫ぶ。言われて忠長が大将様にしがみついた。

「大将様！ 姫君様を守って！」

私もとっさに叫んでしまった。

その拍子に大将様と私の目があった。その目に苦渋の色が浮かぶ。たぶんそれで分かってしまったのだろう。

「こっちか！」

そう言っつて男は私を引つ張っつていこうとした。

「あなた達、本当に私が大将様の想い人だなんて信じてるの？ そんなの都人が好き勝手に立てた噂に決まってるじゃない。大将様とは何でもないわ。私は何の役にも立たないわよ」

私は抵抗はし、ずるずると引きずられながらもそう言った。向こうでは忠長様がやすらぎを助けようとしているのが見えた。

「そんなこと、どっちでもいい。三条様の後ろには前帝様がついて

いらっしやる」

「前帝様が？」

「前帝様は中納言とあんたの祖父を大層恨んでおいでだ。中納言家の顔を潰し、ちよろちよるとうるさい大将の動きを封じてあんたを差し出せば、前帝様はさぞかしお喜びになるだろう」

前帝様が二条様を後ろ盾しておられたなんて。

「それじゃ、最初から姫君じゃなく私を狙っていたのね」

「そうさ。その身分で中納言家の姫のそばに仕え、身代わりまでさせるなんてただの女房とは思えねえ。ちよいと調べれば分かる事だ。生き残りの娘の方は御所勤めで後宮に引っ込みまっっているから手が出しにくかったが、お前は身分が低くて隙を狙えそうだったからな」

叔母様も狙われていたのか。でも、御所の奥深くの後宮までは、さすがの前帝も手が出せなかったんだわ。

「だが、お前は前帝様が真底恨んでいる中納言家の女房だ。前帝様の恨みを、一身に受けちまったのさ。俺はあんたにや恨みは無いが、前帝様がお前をご所望だからな。都に出て来たのが運のつきだったとあきらめるんだな」

なんてこと。私のせいで姫様達を危険な目にあわせてしまったんだわ。

このまま黙って連れ去られてたまるもんですか。

男は私を馬に乗せようと、私の身体を抱えようとした。私をつかみ直すためにその手が襟元にかかる。

「あきらめたり、するもんですか！」

私は男が襟をつかんでいるその手に、思い切り噛みついた。

男は「ギャツ」と言う声と共に私を離す。

「この、小娘！」

その顔に怒りが現れ、私の頬を大きな手で叩いた。その勢いで私の身体が投げ出され、地面にたたきつけられた。

そして男は大きな太刀を抜いていた。そのまま私に太刀を振りおろそうと構える。男は頭に血が上って見境なくなっている。斬られる！

その時誰かが男に向かって斬りかかってきた。康行だ。何やってんのよ！ バカ！

男は私の身体を放し、康行と刀を合わせた。このままでは男と康行は斬り合いになってしまう。私は叫んだ。

「ダメ！ 康行！ もう、人を斬ってはダメ！」

康行に人を斬らせてはいけない。これ以上、康行を苦しめさせて

はいけない。今、人を斬ったりしたら、康行の心は壊れてしまふ。まして、私のために苦しめたくなんかない。

「逃げて！ 康行！ 逃げて！」

私はそう叫ぶが、康行は引こうとしない。

二つの太刀は咬みあつたままビクとも動かない。斬りに行く男の力を、康行がしっかりと押さえこんでしまっている。ギリギリという刃のこすれるような嫌な音だけがその場に響いた。

ついに康行は男の刀を振り落とした。さすがは武蔵の男、力勝ちしたらしい。そのまま男を突き飛ばす。

すると今度は別の男が私に迫ってきた。康行がすぐに気がついて男につかみかかるうとする。

その時、さつき突き飛ばされた男が、康行に向かって斬りかかって来るのが見えた。康行は気がつかない。

「危ない！」

何も考えられなかった。一瞬だった。全ての迷いも戸惑いも消えた。ただ、康行を守りたかった。

私は賊に背を向け、康行を突き飛ばし、覆いかぶさった。私の背に向かって刃が振り下ろされる気配がした。避け切れない！

康行が目を見張るのが見えた。太刀をつかみ直して私に斬りかか

った男に向かおうとするのが見えた。

私の長い髪が風に舞って飛んで行くのも見えた。背中にも冷たい風を感じる。衣装も斬られたのだろう。

ああ、きつと、私の人生もこれで終わるのね。康行はあの下働きの少女と幸せに暮らせるかしら？ 私のように迷ったり、意地を張ったりするばかりでなく、あんな風に一途に思いを寄せる人に想われていれば、きつと幸せになれるだろう。その時に、ほんの少しでも、私の事を思い出してくれるかしら？

康行は私を守ろうとしてくれた。その康行を私は守る事が出来た。それで私は十分だわ。痛みもまるで感じない。ありがたいことだわ。このまま幸せな気持ちでお母様の元に逝けるのなら。

しかし、それにしておかしい。周りの怒号や、悲鳴ははつきり聞こえるし、背中に通る風も感じる。ちゃんと五感は働いている。私は……斬られてはいない？

思い切って背中に手を回す。髪はぶつつりと斬られ、沢山重ねられた女房装束は大きく斬り裂かれている。だが、自分の背中は無傷だった。とつさに逃げられ相手の刀に力が入らなかつた上、間一髪、長い髪と分厚い衣装に守られて、わが身に太刀が及ばなかつたらしい。

目の前で康行が男に太刀をかまえていた。大きく降りかぶろうとしている。目が怒りで燃えていた。

「康行！ 斬らないで！ 私は無事よ！」
とっさに、そう叫んだ。

康行は太刀を止め、私を見つめた。そしてすぐさま男に殴りかかった。男が伸びてしまったのを見ると、私の所に駆けつけてくる。

「大丈夫なのか？」

「ええ、大丈夫。髪と衣装が切れただけ。賊も捕まっただけだ。役人たちが取り押さえているわ」

私の周りで役人たちが、賊を次々ととらえて、縄をかけていた。康行が殴った男も縄をかけられている。どうやらやすらぎも無事らしく忠長様に寄り添い、その身を身を気づかっているようだ。

「主上がよこして下さった、応援の役人たちだ。ようやく駆けつけてくれたようだ」

気がつくともそばに大将様がいらして、周りを見回しながらそう説明して下さった。

「三条殿が怪しいと探りを入れてはいたのだが、その事で私の動きを封じようとしていたらしい。しかし、姫ではなくあなたの方を狙ってくるとは。すまなかった」

そういいながらご自分の着物をお脱ぎになったが、それを康行の方に差し出ししながら、

「これはお前が着せかけるべきであろう」

と言って、康行に着物を渡すと、姫君様のお車の方へと向かわれ

た。

故郷

康行は受取った着物を、私に着せかけてくれた。切れた髪が肩先に広がるのが分かった。

「こんな姿になっちゃったわ」

私は毛先をつまみあげて笑った。長い髪は女の命であるが、私は今、おそらくは尼削ぎ姿よりもみっともない様子になっていることだろう。

「まったく、お前はいつも無茶をする」

そんな姿にもかかわらず、康行は笑わなかった。

「でも、あんたが人を斬らなくて良かったわ。私のために苦しむなんてバカみたいよ」

「違うよ。お前のせいじゃない。侍になる事は俺が望んだ事だった。なのに俺は、お前の半分も覚悟ができちゃいなかったんだ。侍にならなくたって大將様を守る方法はあったはずなのに、簡単な道を選んでおいて、そのくせ自分の度胸のなさを後悔していたんだ。あまりに俺が弱過ぎたんだよ」

「でも、康行は私を二度も守ってくれたわ。大將様や、姫様も守ってくれた。人を殺す度胸なんかより、ずっと大切な勇気があるわ。弱くなんかない」

「そして危うくお前を失うところだった。一度目はお前の心を、今度は命さえ失うところだった。俺は気づいた。失った命を悔いるよ」

りお前を守る方がずっと大事な事だった。もう、苦しんだりはしない。だが侍はやめるよ。やはり俺には向いていない」

康行がやっと見せた笑顔は寂しげなものだった。

「私も、もう、姫君様の元へは戻れないわ。この姿では御簾の内には入れないもの」

私は肩に揺れる切れた髪を見た。

長い黒髪は女人の命。つまり、女人の髪は長くなくてはならない。髪を短くすると言う事は女人では無くなる事。つまり、まだ女人ではない幼子か、俗世を断つて人の世で生きることを捨てる、尼となるかしかない。

尼でもない女人が、短い髪で高貴な方々がいらっしやる御簾のうちに入るのは許されないことなのだ。

私は悲しかった。康行を傷つけた上に、姫様にお仕えする事も出来なくなってしまうた。

もう、私に帰る場所は無い……。

「気にするな。髪はきつとまた伸びる。それまでの間、一緒に郷里に帰らないか？ お前の父親には遠く及ばないが、俺も出来る限りお前の面倒を見るよ」

「康行と一緒に？ だって、康行には大将様が」

「大将様は大丈夫さ。主上がお守り下さる。主上も前帝様はお身内と言う事があって、なかなか思い切った事はなさらなかったが、今回は御親友の大将様のために動いて下された。これからもきつとお守り下さることだろう。これ以上の強い庇護者はおられない。今度の事で三条殿の姫君の話も流れることだろう。姫君には気の毒な事だが、そこは大将様も気をつかって下されるに違いない。俺は元通り、馬を売って暮らすよ。その方が俺にはあっている。花房、一緒に帰ってくれるかい？ お前の父上には、必ず許しをもらうから」

私は驚いた。そして嬉しかった。ただ、ただ、嬉しい。でも、姫様と離れる事は悲しい……。

「姫君様に、もう、琴をお聞かせすることは出来ないのね」
私はぽつりと言ったが、

「そんな事は無いさ。髪が伸びたらまた、女房として仕えればいい。俺はお前を縛ろうとは思わないよ。お前はこれくらいであきらめるような女じゃない事は分かってる。無理に俺の妻になれとは言わない。ただ、今だけはお前を郷里に連れて帰りたい。お前の髪が伸びるまで、俺が馬を育てるまで、お前の元に通いたい。その先はお前が決めればいいさ。たとえお前が都に戻ろうとも俺はお前を待っていてやるよ」
と、康行は言う。

「男が女を待つなんて聞いたことが無いわ」
私はあきれていったが、

「俺は変わり者なんだろう。変わり者のじゃじゃ馬を相手にしよう

なんて男は、変わり者でちょうどいいさ。どうする？　こんな男は他にはいないぞ？　それとも歌の一つも贈らないと、答えられないのか？」と、言われてしまう。

私は思いつきり康行にしがみついた。

「そんなことないわ。康行、私に櫛をくれてありがとう。馬にも乗せてくれてありがとう。歌ももらって嬉しかったわ。でも、もう何にも要らないわ。今は康行がいてくれればいい。いつかは姫様の元に戻りたくなるだろうけど、でも、今はあんたさえいてくれれば、何にも要らない」

私はやつと本音が言えた。そう、いつかはまた、姫様に仕えたいなるに違いない。けれど今は確かに康行が一番大切だ。康行の一番近い所に私は居たい。

「帰ろう、花房。俺たちの故郷に。そしてまた、元気を取り戻すんだ。元気を取り戻す事ができれば、俺達はまた、それぞれの目的を見つけて歩いてゆけるだろう。その時にはきつと都に戻って来る。そしてお前は都で一番の琴を弾いて、俺は都一の名馬を大将様に献上するんだ。そのために俺達は一緒に帰るんだよ」

故郷に帰る。康行と共に。

康行は私の母の事など知らない。私がお父様に戸惑いと不安を抱いている事も知らない。私が故郷に帰ると言う事は、そう言う事に決着をつけに行くと言う事だなんて、全く知らずに言ってくれている。

帰れば私はお父様に、お母様の事を問わずにはいられないだろう。そして、お父様も私にお母様と結ばれた事情を話してくれるだろう。

その時に、良い話が聞けるのか、聞かなければよかつたと後悔することになるのかは分からない。ひよつとしたら、辛い話を聞かされることになるのかもしれない。あの家にいる事は苦しい事になるのかもしれない。

それでも、康行と共に帰れるのなら。

あの、武蔵の山々から吹き下ろされる、風の匂いを思い切り吸って、その隣に康行がいてくれるのなら。

たとえ真実を知ってあの家にいられなくなるうとも、康行のそばにいられるのならばどんなことにも耐えられる。

「いいえ。都で一番になんかならなくてもいいわ。私の琴は、私に友情を下さった人たちの想いを伝えるためにあるの。その想いさえ伝えられれば、私には十分なの。そのために、いつか私はここに帰って来るんだわ。康行、あんたと一緒にね。私はあんたを待たせたりなんかしない。ずっと一緒よ」

そう言って康行に顔をあげて見せようとして、髪の毛の短さに気がついた。顔の周りに切れた髪がハラハラと童女のようにまとわりつく。

「ごめんね。こんな髪で」

思わず言ってしまったが、

「なあに。おかげでお前は俺と帰る気になってくれたんだ。俺もあ

の男を斬らなくって良かったよ。お前がその気になったのはあの男のおかげだからなあ」

と、言って笑いながら私の短い髪をなでてくれた。

「お前が琴に込めている想いは分かっているよ。先日のお音も優しくて美しかった。あれを聞いて俺は、何があってもお前だけは守りたいと思ったんだ。お前の琴が俺に勇気をくれた」

そう言って、そっと抱きしめてくれる。

ううん。勇気をもらったのは私の方。康行と一緒になら、どんな真実だって受け入れられる。

そのために私は、故郷に帰るんだわ。

「それにしても髪が短くてもお前は似合うな。おっと、余計な事は言わない方がいい。お前の事だから、都恋しさに調子に乗って、やんちゃ者の尻にでもなられたらたまらないや」

そう言って康行は笑っていた。

藤の花の匂う頃

それから数日後、三条様は流罪が決定した。都からは遠い筑紫へと流される事となった。

前帝様は都の外れ、嵯峨野のお邸で役人たちに厳しく見張られながらお暮らしになる事実上の幽閉状態となられた。監視は本当に厳しく、いよいよ仏門に入られる日も近いだろうと都人にはもっぱらの噂となっている。

三条の姫君と大将様の結婚話は当然流れたが、姫君や北の方に直接の咎は無いのだからと大納言様のお心づかいで、姫君は来年大納言様の三男の方とご結婚の運びとなるようにとり計られているようだ。

大納言様の三男はまだお歳若の元服前でいらっしやるので三条の姫君がかなりお歳上になってしまいが、三条様が流されてしまった今では、かえって先々の見通しの明るい、まだお子様めいた若君の方が姫君の将来のためには良いのかもしれない。おそらく大将様もお気づかいをなさるに違いない。

今回の件で主上がお強く出られたので、街の悪党や盗賊達の動きも封じ込められつつある。

主上もこれまではお身内の事と、実の兄である前帝様にはどこかご遠慮気味で強気に出られずにおられたようだったが、官職のある程度にまで上り詰め、役人をつき従えるお立場の方が悪事に加担なさっていた事に緊迫した思いをなさったらしい。

主上のそうした態度が役人たちにも伝わったようで役所にも隙がなくなつて来たらしく、悪党どもがはびこりにくい雰囲気が出来て来たようだ。京の町の秩序が取り戻されつつあり、とりあえずは都人たちも一安心と言ったところだろう。

勿論、一の姫様は無事に大将様のお邸に移られて、大将様の北の方としてお若いながらも邸の女主人としての地位を確立なさった。お立場としては大変になられるだろうが一の姫様個人としては大将様との御新婚の時間を取り戻されて、お幸せそうである。

私は大将様から頂いた、お歌の書かれた手紙をお返しした。

「とうとうあなたの心を私に振り向かせることはできませんでしたね」

と、大将様はおっしゃるが、

「それは違います。大将様も、本当はお気づきになっておられるのでしょうか?」

私はそう、お答えした。大将様も照れくさそうに微笑まれた。

そう、大将様も姫様を命懸けでお守りになった事が姫様は勿論、ご自分のお心にも変化をもたらしたようでお二人は一層仲睦まじくなられたようだ。きっと、私の様な気楽な身の上の者を養うのではなく、姫様のような方を覚悟を持ってお守りすることの大切さや素晴らしさに気付かれたに違いない。支える御愛情とは本来、そういうものなのだろう。信頼を深められたお二人の御様子が私には嬉し

かった。

勿論、やすらぎと忠長様は新婚の真つ只中。やすらぎの次の宿下がり待ち遠しくて仕方ないらしい。二人とも本当に幸せそうだ。それも私には嬉しい。

中納言様と言えば、大将様が御身分も顧みずに、自ら一の姫様の行列を守って下さったことが都中の話題になり、さらには大納言様が、

「姫が危険にさらされたのは、こちらの不手際もあつたのだから」と、政務上の条件もかなり中納言様に譲られたらしく、かえってご機嫌なようである。

おまけに私が髪を斬られてしまうと言うやむを得ない事態により、姫様の元を離れる事も本当のところは喜んでいない。

しかし姫様……いや、大将様の正妻となられた、お方様はおつしやって下さった。

「あなたが幸せになる道を選ばれるのに、私になんの文句がありません。けれども、あなたは必ず私の元へ戻って来てくれるのでしょうか？」

「勿論でございます。髪がまた、元通りに伸びましたら、必ず都に帰ってお方様に仕えとう存じます」

「その言葉が聞けて、嬉しいわ。出立はいつになりそうなの？」

「康行の馬達の世話が無事、引き継ぎ終えましたら。藤の花の匂う頃には、旅立つと思います」

「そう。これからは、藤の花を見る度に、私達はあなたを思い出すのでしょうかね」

お方様は寂しげにおっしゃられるが、

「ほんのひと時で御座います。お方様が大将様と楽しくお暮らしになられるうちに、あっという間にその日が来る事でございますよ」と、私はほほ笑んだ。

「それはあなたも同じね、花房。康行と仲良く暮らすうちに、すぐにその日はきてしまうわよ」と、お方様もからかわれる。

「それではあなたにお祝いをあげましょう」

そう言ってお方様は私にご自分の琴を、差し出された。

「私はあなたにこの琴をあげましょう。代わりにあなたの琴を私に下さるかしら？ あなたの魂の欠片のこもった、その琴を」

そうだ。お方様とやすらぎは、一番初めに私に琴がどれほど必要なのかを気づいてくれた。私自身でさえも気づかずにいた、琴を弾く事の大切さをこの方々は私に教えてくれたんだ。

「勿論でございます。この琴には京で暮らした日々のが詰まっております。お方様にお仕えた魂がこもっております。それをこそ望みただけなんて、私は幸せ者でございます」

私は深く頭を下げ、琴を差し上げた。

「あなたは私の琴を弾き続けてね。私も弾くわ。やすらぎとともに。時には殿も弾く事でしょう。この身は離れても、私達の魂は琴の音を通じて繋がっているのよ。どんな時も。それを忘れないでね」

私は返す言葉を失ってしまったので、さっそく、お方様の琴を掻きならした。私には言葉以上の事をこの音に乗せて、伝える事が出来る。それに気づいて下さったのはお方様だった。そのことへの感謝をこめて、私は琴を弾き続けていた。きっとこれからも、弾き続けるんだらう。様々な人の想いを乗せて。

出立の朝、お方様は特別に私達をひさしの下までお見送りに出て下さった。北の方様がこんな端近に出ていらっしやるなんてとんでもないことだが、この主は大将様とお方様だ。お二人が御認めになる以上、誰も文句は言えない。お方様は短い間に、すでに北の方としての風格をお持ちになられたようだった。ご結婚からわずかの間に起こった様々な出来事と、大将様に守られている自信がお方様を少し早く大人にされたようである。

「本当に、牛車の用意をしなくてもいいの？」
やすらぎが私に聞いた。

「いらないわ。どうせ途中で返さなければいけないし、馬の方が身軽で動きやすいわ。武蔵の国は遠いのだから身軽なのが一番なの。それより護衛の人や、こんなに立派な市女笠やご衣裳をいただいてしまつて、申しわけございません。お方様」
そう言つて私は頭を下げたが、

「いいえ。これは私からの餞別よ。少し動きづらいでしょうけれど、

都を出るまではこれを着ていなさい。これは康行の希望なのよ」「
そう言ってお方ははにっこりなされた。

「康行が？ どういうこと？」

私は隣にいた康行に聞いたが、康行はいきなり私を抱き上げてしまった。そして、そのまま私を馬に乗せる。

「ちよつと！ 大将様やお方様の前で失礼じゃないの！」
私は慌てて叫んだが、

「いいのだ、花房。私が許可した。これでお前達の約束は果たされ
たな」

と、大将様がおっしゃる。

「約束？」

私は康行の顔を見た。

「昔、約束しただろう？ お前は都の姫様のようになって、俺が馬
に乗せてやると。前の時はひどい恰好だったからな。あらためてや
り直した」

そう、康行は笑っていた。

「康行。花房の身はあなたにすっかり預けるわ。けれども心のひと
かけらは花房の琴とともに、ここに置いて行かせるわ。必ず取りに
戻って来るのよ」

私を抱えるように馬に乗り込む康行に、お方様がそう声をかけら
れた。

「勿論でございます。私の心の欠片も、殿の元に置いてまいります。私達は必ず帰ってまいります。馬上にて失礼いたしますが、皆様もお元気で」

そう言つて康行は馬を邸の門へと向かわせた。皆が手を振つてくれているのが分かる。私はすっぽりと康行の胸の中にくるまれたまま、

「帰りましょう。私達のふるさとへ」と言つた。

「ああ」

と、康行は短く返事をした。明るい朝日とその顔を照らして、まばゆいくらいだ。

今度は康行と二人でここに戻つて来るんだわ。

どこかから藤の花の香りが漂つてくる中、私達は京の都を後にした。故郷へと帰るために。

藤の花の匂う頃（後書き）

「苦惱編」はここまで。次は波乱の「帰郷編」です。

帰郷（前書き）

ここから「帰郷編」です。

帰郷

長い、長い旅だった。

時には馬の背にゆられ、時には舟に乗り、時には自らの足で歩いて。

京の都から武蔵の国までは途方もない長い旅路。その旅を私達はようやく終えようとしていた。

「お前の父上には必ず許しをもらおう。一番最初にお前の事をお願いしよう。お前は父上に自分が生まれたいきさつを聞きたいだろうが、まず、先に俺からお前の邸に通いたいと言つ事を伝えさせてくれ。俺は堂々とお前の元に通いたいんだ」

康行はそう言つて私と共に私の父の邸に入った。邸の前で私達の姿を見つけてから、顔なじみの使用人たちが皆、こぞつて出迎えてくれる。父も建物のすぐ入口にまで出て来て私を出迎えた。

「おお、花房。長い旅でさぞ疲れただろう。早く中に入ってゆっくり休むがよい。食事もお前の好物をたくさん用意してある。都は意外に食べ物は質素だからな。ここでは滋養のある物を思う存分食べるというだろう」

そう言つてお父様は使用人が持ってきた足を洗うための水の入った桶をもどかしそうに奪い取つて、私に麻布と共に差し出した。

「ちよつと待つて、お父様。着いたそうそうで気ぜわしいんだけど、康行からお父様に話があるの」

今にも私を座らせて、子供のように足元を洗おうとしている父に、私は慌ててそう言った。

「康行？ いや、話なら後にしてくれ。今は花房と積もる話をしたいのだ。大将様との噂は耳にしたぞ。それに御所で帝からご衣裳を賜った話し、ゆっくりと聞かせておくれ。ああ、私は本当に鼻が高い。私のようなしがない者の娘が、このような立派な榮譽を受けるとは。お前は本当に素晴らしい子だ。良い子だ、良い子だ」

父はそう言いながら私の市女笠を外し、私の頭を幼子のようになでて……その手を止める。

何故なら、その拍子に私の切れてしまった髪が、衣装からこぼれ出て少し長めの尻削ぎ姿のように背中に広がったからだ。

「これは……なんとしたこと
事情を知らぬ父は仰天した。

「申し訳ございません！ 花房の髪が斬り落とされたのは私のせいなのです。太刀で斬られかけた私を花房がかばって……」

「太刀？ 斬られかけた？」

父は目を白黒させ、手にしていた桶を落としてしまう。

「そうです。花房は私を命懸けでかばって、太刀でその髪を斬られてしまったのです。それほど花房は私を想ってくれているのです。私は御父上に、花房の元へ通う事を許可していただきたいのです」

康行は必死な顔で父にそう告げた。が、途中から父の耳には届いていない。

何故なら父は、白目をむいてそのまま気を失ってしまったから。

使用人たちが父を支え、お義母様が奥から呼ばれ、邸中が騒然となってしまうた。

結局、康行は自分の家に帰り、お義母様はお父様に付き添い、私はその間に着替えを済ませ人心地ついた。やっぱり話があんまり急過ぎたかしら？ これは事情を理解してもらうのが大変そうだわ。そう思ってたため息をついていたらお義母様が、

「お父様が気がつかれました。私とお父様に詳しい話を聞かせて頂かないと」

そう言って私をお父様の前に連れてくる。

お父様は顔色こそまだ優れないようだったが、気はすっかりなさったようだ。

「で、一体どういう事なのだ？ 康行をかばって太刀で女の命の髪を斬りおとされるとは」

そこだけ話しても理解してもらうのは難しそうだ。

「待つて、お父様。順を追って話をするから」

私は上京してからの出来事を、事細かに説明した。

途中、姫様の身代わりになった事や、賊に連れ去られた事のところでもた気を失うんじゃないかと思っただけ（お義母様は実際、気を失いかけたけど）、どうにか耐えて私の話を聞き続けてくれた。

そして私は、康行がどれほど私を守ってくれたかを語り、彼がいなければ私は命が無かったに違いないと、康行を褒めそやした。

ただ、お義母様はすっかりおびえてしまい、

「もう、そのような姫の元にお仕えする必要はありませんわ。いつ花房さんの身に危険が及ぶとも分からないじゃありませんか。それにいくら身分が低いとはいえ、お付きの女房は沢山いるのになぜ、花房さんばかりが身代わりにされたり、狙われたりしなくてはならないんでしょう?」

と、顔色を青ざめながら言う。当然の疑問だわ。

でもそれは私がお父様に聞きたい事の確信に触れてしまう。そしてその話はお義母様の前では持ち出しにくかった。

「その事で私、お父様にお聞きしたい事があるの。私の生みのお母様の事なんだけど」

そう言って父の顔を上目遣いでうかがう。父も気まずそうにお義母様の顔を見た。

「……私は花房さんが持ち帰ったお土産物でも拝見させていただくわ。お二人でゆっくりお話して下さい」

お義母様はそう言ってその場を離れた。

「お父様。中納言様は私に、お父様はお母様を邸から盗み出して強引に妻にしたとおっしゃいました。そして、お父様が財をなす元手を作ったと。それは本当の事なの？」

「中納言殿は約束を破られたのか」
父は苦々しげにそう言った。

「私にお母様の事は告げないでも、約束していたの？」

「その通りだ。私は中納言様が前帝様を惑乱させた僧侶に送った、『帝に御国譲りを促すよう進言せよ』と書かれた文を持っている。昔、お前の母の父上から受取ったものだ。これを持っている以上、中納言様は私とのお約束を破られる事は無いと思っていたのだが」

「お父様は都から離れていらっしやるからご存じないでしょうけど、今や、大納言家を後盾に中納言様は大変な力を持っていらっしやるの。康行が一人斬り殺そうともみ消してしまえるくらいにね。そんなお文、きっと今では簡単に無かった事にされてしまうわ」

「そうか。私が甘かった。田舎者の浅知恵などこんな物か」

「中納言様がおっしゃったことは本当なの？ この髪は前帝様が私の御爺様を今も恨んでいて、孫の私を狙って斬り落されてしまったの」

私は肩の下に広がる髪に手を触れながら、父の目を見た。

「中納言様は私の御爺様はお父様にお母様を売ったようなものだとおっしゃった。でも、大将様は御爺様は立派な方だったとおっしゃったわ。ねえ、本当は何があったの？ お父様はお母様を無理やり妻になさったの？」

聞く前は口にするのが恐ろしいとさえ思っていた質問が、矢継ぎ早に飛び出してしまふ。一刻も早く父から否定の言葉を聞きたかったのかもしれない。

「中納言様の言うとおりだ。私はお前の母をさらって、妻にした。私がそんなことをしなければお前の母は中納言様の妻となっていただろう」

聞きたくなかった言葉が、父の口から語られてしまった。

「そんな。それでは私は、お母様に望まれずにこの世に生まれてきてしまったの？ 御爺様は私を疎んで都から私を追い出したの？」

私は父を問い詰めるような口調になった。

「いや、違う。中納言様の言った事も本当だが、大将様がおっしゃったことも本当だ。お前の祖父殿は大変、立派な方だった。おそらく誰よりもお前の母を愛してやまなかったに違いない。むろん、お前の事もだ。あの方はお前達を愛するためなら身分も、都の常識も覆す事を厭わなかった。それにお前の母がどれほどお前を可愛がったか。お前が小さすぎて憶えていない事を私がどれほど残念に思っているか」

父は私の切れた髪が広がる肩に触れ、まるで懇願でもするのかのよう
に言った。

「……詳しく、聞かせて下さい。お父様と、お母様の事」

「そうだな。話さねばなるまい」

そう言って父は、真実を語り始めた。

身投げ

私はその頃武蔵の国の豊かな恵みを都人たちにいい値で売ることができないだろうかと考え、一念発起して京に出てきたばかりだった。

もともと親の代からそこそこは豊かな暮らしだったので、郷里に居れば相応の暮らしは成り立っていたのだが、やはり一度は都人を相手に物売ってみたい気持ちがあった。

京の都は何でも物の値が張るのだが、田舎の物となるとどうしても見下げられるところがあって、普通に取引をしたのでは分が悪い。

武蔵の国の物は決して都に劣らない。絹糸にしても、馬、牛と言った家畜にしても、十分都人に喜ばれるに値する価値があると私は思っていた。

ある程度身分のある方々にその良さを分かっていただければ、きっと商売が成り立つ。

そう考えていたが、肝心のそういう方々との繋がりが無い。田舎者と言っただけで都の邸では下人でさえも相手にされず、まして高貴な方々に仕える人たちに品物売り込むなど到底かなわない。

それに、郷里の品は質はよいのだがそれを生かす技術に長けているとは言えない。たとえば絹糸も、都の機織りの技術があればもつと立派な絹として通用するはずなのだが、織が稚拙なばかりに「所詮、田舎の絹」と言われてしまうのだ。

だからそういった技術で良い立派な品を作り、高貴な方々に認めてもらえたら。

若い私はそんな理想を抱いて都にやって来ていた。

しかし現実には甘くなかった。どこに行っても、誰に声をかけても門前払い。話しすら聞いてはもらえない。どうやって当てを作ろうかと私は思案していた。

そんなある夜、その日は暑い夏の日だったので私は外に涼みに出ている。都の夜は物騒だと知ってはいたが暑さにはかなわなかった。

川岸は少しは涼しかろうと川べりに向かって歩いていくと、向こうに白い何かぼろりと夜の闇に浮かびあがる。いったいなんだ？

どうにか闇に慣れた目をよく凝らして見ると、それは女の姿に見えた。

こんな夜更けの川岸に女の姿？ これは夢か？ 幻か？

京の都は庶民には過酷なところで、行き倒れた者がそのまま餓死して川に流れる事も多い。そんな者の魂がものけとなってさまよって歩いているのだろうか？

ひよっとしたらもののけに取りつかれるかもしれない。関わらない方がいい。

頭ではそう思つものの、すうりとした女の姿に私は思わず近づいた。

それはとても美しい女で、はかなげな姿に白い肌。とても質の良い衣を一枚身にまとい、豊かな黒髪が美しく流れ、まるで天女のように見えた。私はすっかり見とれてしまっていたが、天女のような女は目から一筋の涙を流した。

これは幻でも、まやかしてもない。まして、もののけなどではない。生きた人間の女だ。

そう確信した時、女が岸から川に身を躍らせ、飛び込んだ。身投げだ！

私も慌てて川へと飛び込む。決して泳ぎが得意な訳ではなかったが、目の前の美しい女を助けたい。その一心で身体が動いてしまった。

まず、自分が浮かび上がると、女の姿を探す。その身をつかんで自分の元に引き寄せようとするが、女の長い髪が川の流れに持って行かれてしまう。

私は女の頭を支えながら無我夢中で岸を目指した。ようやく身体が水からはい出ると、ゼイゼイと息を切らしながら女の身を横たえ、頬をたたいた。

「もし、あんた、しっかりしろ。目を覚ますんだ」

そう言いながら何度かたたくと、幸いにも女は意識を取り戻した。

「よかった、気がついたか。怪我は無い様だな。その衣や風貌を見ると結構な御身分の娘さんに見えるが、あんたが暮らしている場所

はどこだ？　いくら夏とはいえ濡れたままでは身体に悪い。送ってやるから早く着替えた方がいい」

私はそう言ったのだが女は、

「何故、死なせてくれなかったのですか……？」

そう言ってさめざめと泣きだしてしまった。

「何故も何も、目の前であんたのような綺麗な女が身を投げて、放っておけるわけがない。気がついたら俺も川に飛び込んでいたんだ」

「助けられても困ります。私はこのままではお父様達の足を引つ張るばかりです。私はお父様を追い詰めた憎い相手に娶られるか、死んでしまうよりほかに道が無いのです」

そういう女の表情はまるで死人のような眼をしている。身を投げる以前に心がすでに冥土へと旅立ってしまったたかのような顔だ。

「そんなことを言っちゃいけない。あんたのような身分のありそうな人たちの世界の事はよく分からないが、あんたに大事な親がいるならその親はどれだけ悲しむと思ってるんだ？　今は何も考えない方がいい。とにかくあんたを送って行こう。立つのが難しいようなら背負ってやる。そら、この背に乗ってくれ」

すると女はためらうようなしぐさをする。

「怖がることは無い。俺はいやしい身だが、身投げしようとする女に手を出すほど愚かじゃない」

「いえ、そうではなくて。あなた、腕に怪我をしています」

「ああ、田舎者の俺でも夜の川に入ったのは初めてだから、もがくうちにどこかにぶつけたんだらう。この程度の傷、何でもない。さあ、しっかりつかまって」

そう言つて女を背負い、女の案内ですぐ近くの大きな邸の前に着いた。

着いてみるとその邸は何処までも塀が続く大きな邸で、牛車や馬が楽に通れるような立派な門が構えてあつた。一目でかなりの高貴な方が暮らす所と分かる。

しかし、その様子はどこかさびしげで、うらぶれている。よく見ると築地塀の所々が崩れ、場所によっては夜目にも向こうが見通せるほどの穴さえあつた。

「門は閉ざされていますが、この先に壁の大きく崩れたところがあります。私はそこから抜け出しました。そちらを回つて下さい」

「これじゃ、どんなに門を堅く閉ざしても戸締りの意味が無い。塀をしっかり直さない」と

そう言つと女は一層悲しげな顔で、

「今の私達に塀を直す余裕はないのです」と、
ため息交じりに小さく答える。

塀をくぐつて広い庭を表に回ろうとすると、向こうから松明の明かりが見えてきた。

「ひ、姫君様！」

背に載せた女の顔を見て、使用人らしき年老いた男が目を見開きながら叫んだ。

「心配をかけました。この方は私を助けて下さった方。決して怪しいものではありません」

姫と呼ばれた女はさっきまでの頼りなげな姿とは違った、凜とした声で使用人にそう言った。

明らかに人を使いなれた、自らに強い誇りを持つ人の言い回しだった。

「分かりました。すぐに殿にお知らせします。このままではいやしい者たちに御姿を見られてしまう。早く建物の中に入って下さい」

深窓の姫君は決して位の低い者にその姿を見せたりはしないし、身分のないものも遠慮をして見ないようにするもの。私は戸惑った。

「私はここで……」

そう言いかけたが、

「あなたは私の命を助けた方。それにあなたは姿を見るどころか、この身に触れているではありませんか。今更脅えたりなさらないでください。その傷の手当てもしなければなりません、きつと父はあなたにお礼を言いたいはず。このまま私の父に会って下さい」

脅えるなど言われても無理がある。この姫の様子や邸の規模から

考えてもこの主はかなりの身分のはず。だが、ここでこそそと帰ったら、逆にこの姫に何かしたのではないかと疑われかねない。こうなったら腹を据えるよりなさそうだ。

私は姫を背に抱えたまま、邸の建物に入った。すると姫に仕えているらしい中年の女房が真っ先に姫に駆け寄って、

「そのようなお姿では身体に障ります。早く、早く中でお召し替えを」

そう言いながら姫を奥へと連れて行く。おそらくは姫の乳母なのだろう。姫は一瞬振り返り、私に視線を送ってくれた。さっきまでの死人のような眼の色が抜けて、鮮やかに華でも咲いた様な瞳だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635y/>

藤の花の匂う頃

2011年12月11日11時47分発行